

先方ぢやア何にも知らず、たゞ一所懸命、苟も大臣の令嬢が戀なればこそ遠路わざわざ此場末の草深いところへ来て、本人が居らなきやア僕にまで愛嬌を滾してゆくのさ、いッその事あの文章あのまゝ送った方が雙方の爲に宜からうかと思つてゐるがね、無教育の下種女と違つて、また料簡の極めやうもあるだらうから、ねエ君、君は何と思ふ』『さればさ、そんな事になると僕は頗る例の僕で、返答に困るがね、相手は兎も角、此方が萬事に慎重の態度を取つて周到緻密の倉橋だから、まして外の事と違つて人事の大節、生涯の利害輕重に關することだから、大丈夫、失策のある氣遣ひはないよ、捨て、置くが宜い、なまじツか坐傍から騒いちやア却つていけない、君が今いうた文章の意を倉橋の眞意とすれば、これを先方へ送る事は猶更ら出来ない、何故、なぜつて君、もし送れば先方の料簡を聞くよりも寧ろ其實は我ために三年を待てと強ふる結果に等しいから、倉橋として人しれぬ草稿に止めて置くのが當然

だ、決して冷淡でも何でも無い、また事實からいへば、すでに三年の社會と斷つ、三年の戀を斷つは固より其道理だ、まして大臣の令嬢といふのが多少、今日の輕薄才子と其軌を同じうせざる倉橋の心に取つて、好ましからぬところもあるだらうよ、兎に角、君や僕の出る幕でないから、まア騒がない方が宜いね、わけて君の如き好奇漢が騒ぎ出すと自分の面白半分で何を仕出來すか知れないから危険だよ』『ハ、、、、どうしても僕は昔から下手な謀反人に見られてるやうだな、しかし君、こいつア此まゝに治らないぜ』『それ、そこが君の下手な謀反氣を起す基だ、悪い癖だよ、治るか治らないか、まだ知れもしないに、まして倉橋だ君よりは由來の實例に於て失策のない男だから、氣を揉まずに安心して居れさ、あんまり君が餘計な事を仕出すと倉橋のため、僕が引き摺り出しに來るぜ、引き摺り出して今度は川上の家だ、ハ、、、、過日も川上が言つて居たね、もし黒田が根岸の手に餘るやうなら連れて

来てくれ、乃公が一番、引き受ける、乃公が引き受けた以上は議論と腕力の兩刀で戦って見る決心だよ、どうだ二三日、試みに轉じないかね」「畜生、けしからん事を言ってるね、恐れ氣もなく僕に對つて、よし、さう吐しやア其うち潮合を規つて僕の方から逆寄の食客的に襲ひ込んでやるぞ、襲ひ込んで大に濫易さしてやる、なアに汐入村の昔時でも彼奴に讓る筈はないんだが、相撲でいふ苦手だね僕のため彼奴は、しかし今日の彼奴と僕とは互に呼吸も急所も違つてるから却つて恐るゝに足らない、敵は本能寺にありて先づ喉アを苛めてやるね由來この食客なるものは其家の喉アが一輩一笑に依つて苦樂を分つとしてあるが、僕は喉アを苛めて身の安泰を謀るの工夫ありだ、をりく、夫婦喧嘩をさしてやつて其機に乗ずれば流石の川上も閉口するに相違ないよ、しかも彼奴の喉は家付の内娘と來てるから猶更ら以て便利だ、ハ、、、しかし君の細君にやア僕も一言なかつたね、現在あれほどの大病を肉親の如

く介抱して貰つた大恩ある上に、足らぬ勝の世帯を一人で研り廻して養はれたのだから、おまけに君が辻占賣の參謀として大失敗を呈したのだから、黒田さんと呼ばれる毎に、ぎよつとしたね思はず、ハ、、、」「ハ、、、煙草の店番させられたにやア驚いたらう、しかし妻は今でも君の事を言つて心配してるよ、妾のやうな無遠慮に喧しい女が居らないから、暢氣でせうが却つて身の爲になるまいって、をかした事をいふやうだが第一、君の食物に不養生なる頗る氣にかけてるぜ、いくら癒つても、あれほどの病氣後まだ丸一年にならないと言つて」「感謝、感謝、よろしく傳へてくれ、その點に就いては僕も近來、わけて注意してるから、時に小兒は達者かね」「頭腦の中が僕に似ちやア困るが幸ひ體軀が乃父に類してるから至極壯健、いまだ曾て蟲氣もないね、願はくは將來あのまゝの無事で成長させたい、しかし君、君に子がなくつて實に幸福だぜ、もし最愛の妻を苦勞の果に失ひ其身は病氣に臥して深

夜啼兒の聲を聞くに至つちやア君、逆も助からないぞ、よし病氣が癒つたところで今ごろ食客的の暢氣ぢやア居られない、いはゆる乳貰ひの哀れを實地に演じるんだからね』眞實だ、その忘れ形見の哀れが無くつてさへ君、をり／＼思ひ出すもの、元來かくの如き僕が僕だから他人は勿論、川上でも倉橋でも、さのみに思ひもせず、また言ひも仕ないがね、亡妻を知るものは實に君一人だ、多年散々の艱難辛苦に投じて今日といふ一日の安心も得させず、その果が寒中の古拾一枚に破れ三味線を抱へて人の軒に立たしたんだもの君、しかも僕が九尺二間の裏長屋で今にも知れぬ大病、それを亡妻が身に代へての介抱、腸の九廻するたア君あの時のこつたぜ、竟に全く僕の身に代つて死んだのだからねエ』さうよ、ありやア自分の命數に果てたんでない、つまり君が殺したのだから、常に僕がいふ通り將來いかなる事情があつても、君は再び妻を迎ふべき身ではないぜ、あれだけの妻に實際あれだけの苦勞さして

殺したんだもの、もはや澤山だ、理に於て情に於て自然的の無妻主義だ、古風に言やア浮世を捨て、僧侶になるところだ、もし僕なら無常を觀するの餘り當世才子に冷笑一番せらるゝの愚を演じたかも知れない、しかし其事は僕の如き無用の愚物に於て始めて行はるべきもので、また死せし貞女の本意でないだから、君は宜しく奮勵して生前の苦勞を水泡に歸せしめず亡後の靈を慰めて大に報いなければなるまい、人の戀を面白半分で騒ぎ立てる時ぢやアなからう、どうだ黒田』一言なし、この目を見てくれ、僕が目からでも君、こんな水が、自然に湧いて出るよ』

其六

猿も衣裳といふ卑しき俗諺を浮世わたりの呼吸と心得て、おのれが生血を吸はるゝ高利貸に責められながら常綺羅を張つて白癡おどしの臭服三昧、さては立寄る大木の下といふ淺き言

葉を立身の基礎と定めて、廣き天地を同じ足場に立往生しながら、眼前の小蔭に生涯の風雨を防ぎ得たりとする徒輩のみ多き世の中に、新聞記者となつて唄はれたる噴々の名を打捨て官吏となつて持て囃されたる前途多望を抛ち、當年こゝに三十五の一書生、しかも殊更に社會と絶つて三年籠居の啞聾を學ばむとする倉橋幸藏、薩摩飛白の綿入羽織に例の日和下駄からころと響かして、馳せ來る車馬の砂塵埃を浴びつゝ、悠然と兩國の廣小路を歩みぬ、をりしも彼方よりシルクハットを時て、綱曳の車を飛ばし來るは我在官中の同僚、しかも案外の無學にて常務の外の事ある毎に人しれず我を内々の顧問に頼みしほどの男なれば、他よりも深く交りし間柄と、倉橋さらに立停りて慇懃に會釋すれば、彼また車を止めて其後の挨拶するかと思ひの外、帽子に手もかけず金縁の眼鏡越しに目禮せしのみ、車土傲然として砂塵を蹴立てつゝ、稻妻の如くに馳せ去りぬ、

倉橋おもはず見送りて冷かなる微笑を含みながら、憫れむべし今日なほ吏臭の病ひ深く膏肓に入りしもの、怪しむに足らず翻々たる當世輕薄の小人が常、もし彼奴がために推薦せられたる下級の小吏に逢はゞ車の輪にかけて倒すとも其まゝに馳せ去るべし、そもゞ彼等が苟も政府部内の一人として雷霆の如く叱咤奔走するの必要はいづくにかあると、今更ら東京見物に出でたる田舎漢の赤毛布を有難く拜する心地して、また日和下駄の音からころと濱町の方へ歩み出しぬ、

これもまた羽翼を縮め尾を垂れて屈するに似たれど、その實は今や將に大地を放れて飛ばむとする男、かの川上三吉と倉橋幸藏が奥庭の茶室に差對うて打解けながら、膝を進め聲を潜めつゝ頻りに物語りぬ、

「まづ大體は今いふ通りの始末だがね川上、また某女に與ふといふ其一文は、つまり僕の感想を寓したもので、こりやア誰にも見せず自分の草稿中に葬つて置く筈だつたのを、あの黒田の奴め、留守中に引き摺り出して讀んだも宜いが、さて其後の騒ぎが蒼蠅いよ、うるさいのみならず、彼奴が性の無鐵砲にして横著なる、興に乗するあまり奇を好んで何を仕出來すか分らないからね、實は其邊の恐れもあつて、かたぐ君へ相談に來たのさ、黒田を度外として、なほ他に上田あり吉田もあるが儲これを此處まで打明けて談するのは君だ、既に社會を絶つて三年籠居の讀書生たる今の僕に、いやしくも戀愛などといふ閑日月は夢にもない、よしあるにしたところで、實地に關すべき境遇でないから、木石の面を吹く一陣の春風、頑として動かなければ宜いやうなもん、現在しばぐ相手の押し掛けて來るには閉口だよ、それも尋常の女なら一言の下に叱咤して睨み歸す事も出來るがね、在官中の世話になつた

大臣の令嬢といひ、かの新聞一件で互に迷惑同士の間柄といひ、まさか君、胸邊を衝いて押し戻すことも出來ないところへ内には黒田といふ好奇な危険い奴が居るといふ始末、もし萬一このまゝ捨て、置いて、心にもない妙な工合で思はぬ事の成行から身を過るやうな馬鹿な目に逢つちやア、實に遺憾だからね」「むゝなるほど、よく分つた、つまり此一文で見ると實際のところ、あまり君は隨喜湯仰して居らんやうだね、文章の表面は兎も角、裏面に於ては聊か敬遠策を取つて在るやうに思はれるが、理が情に勝つて半面に感謝して在ながら半面に避けて在るといふ風かね、いはゆる有難迷惑だらう」「まづさうだね、ハ、、、」「しかし君、何を避けて在るんだ、その嬢の容貌か、その嬢の性質か、その嬢の身分か、但しは單に君が三年讀書のためか、或は俗にいふ毛嫌ひ、どこといふ點の打ちどころもないが何となく蟲が好かぬ、氣に入らないとの事かね」「その性質は深く知らないが、容貌と才氣の點、これ

を公平に見て先づ才色兩全とも稱すべきもんだらう、また毛嫌ひの蟲が好かないのと、いふでもないがね、避くる所以は三年讀書の我意を驚かさるゝと、一事は矢張り身分だ、大臣の令嬢といふだけが何となく他日の一身上、面白くないやうな感じがするね』『ちやア君、三年の間その讀書を妨げられずして三年の後また其父が大臣でなけりやア宜いといふのかね、ハ、ハ、ハ、あれがあのみまゝ寧ろ其日の衣食住に困らない程度の家で育つた女ならばといふんだらう、つまり君に情があつても戀がないんだ、もし君に戀があれば三年の讀書を犠牲に供して其大臣の令嬢たるも其乞食の娘たると擇ぶところでない筈だからねエ、ハ、ハ、ハ、兎に角この一件を僕に委さないか、差出がましいが一應、その嬢に僕が逢つて見たいから』『いや實は、それで君へ相談に來たのさ、どうか逢つた上で、つまり某女に與ふといふ此一文の意を圓滿に懇篤に遺憾なく通じて欲しいんだ、倉橋幸藏が名代とせず倉橋幸藏が兄としてね、

及ぶかぎり感謝の意を表して先方に満足を與へた後、願はくば僕ア妻に持ちたくない、敬して先方を遠ざくるでなく敬して僕の方から退きたいんだ、もし彼嬢を三年の後に喜び迎へて過分の妻とするくらゐなら、今までのうちに僕は既に妻帯したかも知れないから、この邊を君、よく察してね、うまく遣つて來てくれ』『よし、承知した、たしかに承知した、決して先方の感情を害せず、また君の主意を誤らず品格を失はず、あくまで理と情とを盡して來るか、ら安心し給へ、しかし君、外の事と違つて、あとの怨恨はなからうね、しまつた、惜しい事をした、あゝいふ筈でなかつたなど、後日で僕を怨んでくれちやア困るよ、ハ、ハ、ハ、』『アに其時は彼嬢より更に數倍の佳人を君に強請るから宜いよ、ハ、ハ、ハ、』『をりしも下女が來りていふを聞けば、今しも黒田健次が玄關まで訪ひ來りしかど倉橋のありと聞いて其まゝ無言に立去りしとの事、倉橋おもはず眉を擡めながら、『僕が不在中は一切外

出無用と禁じてあるに、のこくと彼奴、こゝへ何しに來をッたか知らん、今日に限ッて出先を言はなかつたから、かしこし得たりで例の面白半分、君のところへ此一件でも荷ぎ込んで一場の坐興を貪りに來たンぢやアあるまいか、しかし僕が居ると聞いて聊か一驚を喫したらう、面が見たかつたね、ハ、ハ、ハ、上田の家へでも廻ッたかな』ハ、ハ、ハ、さうかも知れんぜ、奴のこつたから、第一いつまで彼奴を遊ばして置くなア宜しくないね、ろくな事を考へ出さないのみならず、病後の體軀を長く不規則に放任すると却ッて再發の恐れがあるもんだ全體、毎日々々何を仕てるね』悠々寛々、たゞぶらりと遊んでるなら君、まだしも蒼蠅くなくツて宜いが、朝ぬツと起きて夜ころりと寝るまで、終日べら／＼無用の駄辯を弄する體、實に奇だ、殆ど不思議だね彼奴の饒舌は、をり／＼寧ろ呆れて感心する事があるよ、もし世間俗物の前で喋々と饒舌したら詭辯百出の奇才、その舌鋒や當るべからずとでも稱す

べき男だらう』そりやア君、さうとも、我々こそ常に三文の價値もないやうにいふが、凡俗の前へ出しちやア全くの奇才だよ、否、凡俗でなくツても實際、彼奴の舌と膽とは多く得易からざるもんだぜ、まして外に對ツちやア多少の要害を構へて萬事に注意もするだらうからね、つまり我々の前では血の氣の分量を知られて臟腑の中まで見抜かれて居るから、逆も無効だと觀念の極、自棄ツ糞に惡戯るのさ、ハ、ハ、ハ、見りやア小面が憎いが深く考へりやア可哀さうなところもあるよ、最愛の妻を失ひ失敗また失敗の餘り、病餘なほ一年を経ざるの今日だもの、たゞの奴なら意氣銷沈して凋れ返る筈だが、まだ終日の駄辯を弄して寸隙なき屁理窟を比べながら人を人とも思はざるの勇氣は寧ろ愛すべしだ、落著く先は山にあらず川にあらず紅塵百尺の眞ツ只中にありといふ一片の立退狀を壁に張ッて汐入村を飛び出した當時の勢ひを思やア、今昔の感、うた、懷舊の涙、今日こゝに食客的となッて我々が一飯を

「一切、たのむぜ、うまく遣ッてくれたところで、さらに効果もないコツたがね」『なアに却ッて面白いわ、これが世間一般の媒介口として儀式的の使者に行くでなし、嫌といふのを無理に乞うて是非とも貰ひたいといふでなし、身に餘る情の露に濡れて飽くまで感謝の意を表しながら、其間に犯すべからざるの意氣軒昂、ピンと拗ねた男振を御覽に入れるんだからね、なか／＼趣味があつて氣概があつて一篇の戀愛論を實地に演ずるが如きところもあるからねエ、しかも相手が面白い、ハ、ハ、ハ、』『まア君、さうでも思ッて往ッてくれ、端書のあり次第、様子を聞きに来るからね』『いや僕から出よう、すぐその足で根岸へ廻るから、ついでに黒田を一翻弄してくれう、あんまり天下太平で置くと却ッて餘計な謀反氣を出す奴だから、ハ、ハ、ハ、』

世間當流の才子は何とか思ふ、門外寸刻を争ふ今日の社會を抛ッて我に三年籠居の愚を守るの馬鹿さ加減あり、奔走花影を逐ふ今日の風流を捨て、我に三年木石の頑を守るの野暮さ加減ありと、笑を含んで濱町の川上が許を立出でながら、藥研堀の玩具屋に入りて巾着を探りつゝ、犬張子と風花車を買ひ求め、兩國橋を渡りて河岸傳ひに百本杭を過ぎ、あはれ上田力ほどの男が浮世に住み詫びし涙の宿、煙草の小賣店を門口より差覗けば、これも良人に連れ添ふ妻のお清が我子を膝上に抱き上げ乳房を含ませながら客を待つ體、かくなるまでの事情の仔細を知る目には一篇の哀史を讀むが如し、

『上田は在ますかね、いつも相變らず骨が折れますな、さアこれを、おい坊や、ハ、ハ、ハ、一所懸命に吸ひ付いてるわい、ちよいと顔を見せないか』『おや、有難う御坐います、まア綺麗な玩具を、これ御覽よ、しかし貴方そこは店頭で、どうか奥へお通り下さいまし、生憎今朝

から出まして居りませんが、さやうで御坐います何處へとも申さないで、たゞぶらりと、もし貴方へでも、しかし濱町ですか』『いや拙者が今まで川上の家に居ったのです、ちやア根岸へでも出掛けたかな、なアに別に用もない、ついでに立寄ったので、時に黒出は來ませんでしたかね』『いえ入らっしゃいませんよ、しかし貴方、ちよいとでも、お通り下さいませぬ』
 『また出直して來ますからそのまゝ、起つに及ばない』
 『だつて貴方、あまり失禮で御坐いますもの』
 『なアに失禮も何もあるもんですか、手が掛る最中の子持で其上これだけの店を構へて、おまけに二十貫目の大男を年中の背負ひ切りぢやア實に堪りますまい、よくまア一人で出来るこつてすよ、全く上田は僥倖者だ、上田が僥倖だけ苦勞の多い理由だから猶更、お氣の毒ですが、まア堪忍してやつて下さい』
 『ホ、ホ、ホ、ホ、とんだ賞讃に預つて恐れ入ります』
 『いや實際のところをいふので、お世辭なざア倉橋の柄にないですよ、しかし其う

ち、また更めて來ませう、小兒を大事になさいよ、もう子の出來た以上は少々上田を粗末にしたつて構ひませんから、氣に入らなきやア叱りつけておやんなさい、散々お世話を掛けつ放しにした横著な黒田なかと違つて、その段は上田ですよ、道理の前には一言もない立派な男ですからなア、ハ、ハ、ハ、ハ、』
 『しかし倉橋さんをりくは妙な無理を並べて困りますよ、どういふもんで和女は乃公の唄アになつたことの、なぜ子を産んだのと』
 『ハ、ハ、ハ、ハ、上田なるかな、さて上田なるかな、ハ、ハ、ハ、ハ、』

家に歸りて我を迎ふべきものは、廣からねど幾年の風雨に寂びたる庭の景色と、萬巻を積まねど古今東西の智識を集めたる有用の書籍と、いづれも今の我ために人しれぬ無上の快樂を備へて待ちつゝありと、吾妻橋を渡りて馬道より土堤八丁に出で、をりしも夕暮の戀に急か

れて魂魄脱殻の五體を載せたる車の矢聲に追ひ拂はれながら、家も庫も音なく流れ込むべき
 大門口を左に見て、生命の削り場所と聞えたる花里の裏路を歸りしは一入興ありて呵し、
 我のありしとも知らで、のこくと出て来るや否、其ま、踵を返して立去りし黒田奴、まだ
 か、はや既に歸りしかと思ひつゝ、家内に入りて其部屋を差覗けば、例の煙草すばくと天
 井に吹き上げて眩を枕の横になりぬ、

『おい黒田、歸つたよ今』『やアお歸りなさい、婆さん主人公が歸られたぜ、兎も角お茶を入
 れて持つて來な、夕飯の用意は宜いかね、乾してあつた坐蒲團を取り入れたかね、書齋ヘラ
 ンプを點けろよ』『おいく、せめて其うちの一事ぐらゐる貴様が手傳つて遣つちやアどうだ、
 いやに今日は氣が付くぢやアないか』『おい來た、ランプは僕が點ける、ついでに茶も入れる、
 さア大變々々婆さん何處だ、マッチと土瓶は』『この横著漢、吐鳴つてばかり居たつて』『や

アなるほど身體の動くのを忘れて居た、ハ、ハ、ハ、』

片手にランプ片手に土瓶、やう／＼持ち來りし黒田の顔、じつと見詰めて思はず吹き出しな
 がら、『おい黒田、今日、川上の家へ何しに來たんだ』『いや別段、お取調べに相成るほどの義
 でもないがね、ハ、ハ、ハ、知らなんだよ君が居るたア』『居たつて宜いぢやないか、なぜ上ら
 ずに歸つたのだ』『なアに上るほどの必要がないからさ、實は今日、あまり無沙汰をして上田
 は兎も角あの妻に濟まないと思つて、出掛けた序に、ちよいと川上へも寄つて見たのさ』『む
 々さうか、上田ア何をして居たね』『憫れむべし浮世なればこそだ、堂々たる偉丈夫も嗚アが
 一言の下に屈して、達磨の如き面を物陰から差出しながら小賣煙草の店番たア慘憺だね、し
 かも今朝こゝへ坐つたまゝ一寸も動く事を許されないといふ始末よ、無論、嗚ア殿は今日中、
 裏の井戸端に陣を構へて洗濯物に忙しい理由だがね、もし僕が居れば必ず店番の交代もしく

ば相役を仰せ付けらるゝ筈のところ、幸ひ今は君の厄介になつてゐるから安樂だよ、あの鼻ア
氣に毒がなくって性質は善いが元來の働き手で加之も男勝りといふ方だから食客的などには
大の暗劍殺だ、なか／＼喧しいからな、しかし君に宜しくって傳言して居たぜ、上田も二三
日のうちに來るとさ、ハ、ハ、ハ、』や、どうも呆れ返つて物がいはれない、この虚言家め、虚
偽も虚偽、御丁寧に念が届いて行き渡つた虚偽だから恐しい、今日もし僕が行か無きやア全
く眞實に受けるよ』『えッ、君が立寄つたのか上田の家へ、そいつア少々驚いたな、失敬々々』
『いよく此方が驚くよ、づう／＼しさ加減に、これが失敬々々で済むかい、別に差支のな
いこつたから宜いやうなもの、もし必要の事實で人の名譽とか利害に關する事ででもあれ
ば君、どうする、いくら何でも少しは慎まんと不可んぜ、今これほど長たらしく饒舌つた虚
偽が現れたのだから、はッと思つて體裁わるく顔でも赤くすりやア、まだ幾分か優しいとこ

ろもあるが、どうだい其面は、酒ア／＼として實に憎いぜ君』『いや悪かつた、以後は心得る、
しかし面の小言をいはれちやア困るな、どうにも斯うにも君、生來で今更ら仕様がな
いもの、恥ぢて薄紅を呈せざるところは友達甲斐に喜怒顔色に現れずとも買つてくれ給へな、ハ
ハ、ハ、』『第一その、ハ、ハ、ハ、が不可よ君のハ、ハ、ハ、は嬉々として笑ふにあらず、しかも用
ゐるところが違つてゐるから全く人を嘲弄するに當るぜ』『こりやア驚いた、よほど今日は御機嫌
が悪いね、ハ、ハ、いや失敬、こりやア困つた、明りに笑つても不可んだね』『面白くつて笑ふ
なといふんぢやアない、人を馬鹿にして嘲り笑ふなといふのさ、今日から僕は君に對する方
針を變へて、さらに容赦なく會釋なく、たとひ多少の暇を潰しても徹頭徹尾、いち／＼喧し
く喝破する決心だ、かの鬼千疋に對ふといふ俗世界の小姑と一般、今までのやうに放任主義
の寛大に取扱つて居ちやア、奴さん宜い氣になつて何を仕出來すか知れやアしない、この虚

言家め』形勢いよく穩かならず、しかし寸陰を惜しむの君が多少の暇を潰してまでも現在この虚言野郎を訓戒せむとするの情誼、骨に刻し肝に銘じて』それ、そんな虚言家だ、今いふ口の下から、そもく君のやうな感覺の圖太い人間が、安價請負の碑文か石塔のやうに、すぐ骨に刻し肝に銘するが聞いて呆れるよ、ハ、ハ、ハ、といふなア此處らで使ふ笑ひ聲だ』

『さう急に更まつて手厳しく出られちやア殆ど僕の身の置きどころなしだ、どうか君、そろくと順を逐うて次第に責め付けてくれないか、急激は却つて事を破るの基、折角の思召が寧ろ徒勞に屬するの恐れもあるだらうから』

『そろくくだの順を逐うて次第のといふなア普通の人間に對する言だ、君の如きは疾風電霆、耳を掩ふに寸隙あらざるの勢ひで急激に事を破つた後、また更めて張り替へるのさ、ハ、ハ、ハ、また此邊で必要な笑聲だ』

『まるで僕ア太鼓だね』

『や、出來た、その一言こそ全く自己を知るの言だ、大きく重さうに見えても腹の中が空虚で案外に軽く、人が叩けば其手に従うて鳴るところ頗る似てるぜ、また君、ハ、ハ、ハ、だ』

『どうしたのか今日は平生の君でないやうだ、こりやア尋常事ぢやアない、は、ア川上と何か祕密の相談があつて、この黒田を』

『何か僕と川上が相談して、やられる覺えがあるのかね、ありさうだね、今日、のこくと遣つて來た様子ぢやア、そりやア兎も角、濱町まで行けば兩國橋を渡るばかりだ、眞實に上田を訪うてやらないと不可ンぜ君、君は我々より彼夫婦に對して訪ふべきの義理が多からう』

『いや一言なし、實ア今日も立寄る筈だ』

『たかね、川上の玄關で少々、ハ、ハ、ハ、まづかつたからねエ』

『何が君、まづかつたか知らないが、出るなら僕の家に入る時、晴れて出るが宜い、また少しの小遣錢ぐらゐる言へば直ぐ出すから、悠々として用事に出るが宜い、川上の玄關まで來て僕が居ると聞くや否、すぐ其ま、無言に引ッ歸すといふやうな事があるものか、君にも似合はない、第一に僕が川上の家族に對して面白

が空虚で案外に軽く、人が叩けば其手に従うて鳴るところ頗る似てるぜ、また君、ハ、ハ、ハ、だ』

『どうしたのか今日は平生の君でないやうだ、こりやア尋常事ぢやアない、は、ア川上と何か祕密の相談があつて、この黒田を』

『何か僕と川上が相談して、やられる覺えがあるのかね、ありさうだね、今日、のこくと遣つて來た様子ぢやア、そりやア兎も角、濱町まで行けば兩國橋を渡るばかりだ、眞實に上田を訪うてやらないと不可ンぜ君、君は我々より彼夫婦に對して訪ふべきの義理が多からう』

『いや一言なし、實ア今日も立寄る筈だ』

『たかね、川上の玄關で少々、ハ、ハ、ハ、まづかつたからねエ』

『何が君、まづかつたか知らないが、出るなら僕の家に入る時、晴れて出るが宜い、また少しの小遣錢ぐらゐる言へば直ぐ出すから、悠々として用事に出るが宜い、川上の玄關まで來て僕が居ると聞くや否、すぐ其ま、無言に引ッ歸すといふやうな事があるものか、君にも似合はない、第一に僕が川上の家族に對して面白

くないよ、家内は兎も角、門を出てまで食客的根性を持つてくれちやアなさけないぜ黒田、僕の家なればこそ食客もする男だらう、川上の玄關から去った事と橋一條を渡って上田を訪はなかつた事は、實に僕が恨むところだ、頗る氣に入らないね、外の事は儲おいて、這般の君にあるべからざる心細い淋しい妙な振舞は仕てくれるな』『ありがたい、よく分つた、かうまで君の氣を悪くする考量でもなかつたがね、なるほど僕が不節調だよ、川上も何とか言ッちやア仕なかつたかね』『川上が何と言ッても宜いさ、たゞこれに伴ふ家族は君、いくら良人や主人に従うて居ても他人だからね、我々同士の流では押し切れないよ、上田の如きは猶更いは、其妻が働いて一家を持してゐるんだから、上田のため蔭へ廻ッて其妻を勵まし慰めるやうに仕てやるのが眞實の友誼だ、おのゝ汐入村に居た時分たア違ッて浮世といふものを銘々に控へてるからね、君だッて、もし細君が生きて居れば、夫婦で此家へ來て縋縋を下けて

居たッて、僕ア決して食客的など、口へも出さないぜ、そツと寧ろ蔭から君に金を渡して、その金で買つた菓子折を細君の手より貰ひたいくらゐだ、かの世事に無頓著なる一癖の上田さへ、君が本所の吉岡町とかで病臥の時は常に細君へ金を運んで君の事を頼んだといふぢやアないか』『感泣、感泣、僕にいふべきの言葉はない、たゞ感佩々々』『ハ、ハ、ハ、どうか其調子で君、せめて半日だけ居て貰ひたいよ』『慚愧々々、たゞ我身を責むるのみだ』『しかし、流石の君も亡妻のためには全く斷腸の苦痛だツたと見えるね、綿々たる憾みが骨身に染み込んでるやうだね、いかなる事にも亡妻をさへ引き出せば殆ど容を改めて別人の觀があるもの君にして猶かつ然り、いや戀なるものゝ作用と執著力は實に恐るべしだな、戀といふなア少々單純で用語が事實に適せないやうだが、やはり戀だ、ハ、ハ、ハ、』

其七

木の葉に宿る一夜の露も滴りては十丈の幹を養ひ根を濕し、音もなき巖陰の苔よ、

雫、いつしか集りて麓の瀧津瀬となる、まして人の情の露雫、かりそめの思ひも積りて澁く淵となれば、我から身を投げ入れて浮きつ沈みつ、心の底を人に見られて笑はる、まで、人しれず袖に忍ぶは戀の風情あれど、まだどこやりに物を怖れて眞實の戀にはあらず、包めども包めども穂に現れてこそ、秘せども秘せども色に出で、こそ、戀は曲物に捉れたる身の一入さらに哀れ深し、

身は大匠の令嬢として人に册かれ、しかも才色の譽れ高根の花として世に囃されつゝ、二十歳の今日まで玉の肌に浮世の風も知らず、まして戀といふ文字、たゞ學びの窓の書にのみ心なく讀みて過せしに、おもひきや今ぞ我身を食まれて遣る瀬もなく、いつこに脱れ出づべき道もなしとは、

父が大臣の住居と定めし魏々たる洋館の屋後に、築山と泉水をめぐりて寸隙もなき植込の翠色を隔てつゝ、別に離れて建て増したる倭流の破風建築、古昔ならば西の對の屋とぞいふべきその端の別けて庭の景色に對ひし高縁の一室は、これぞ令嬢綾子が身に餘る此ごろの思情に堪へ兼ねて、夜なく獨り閨の枕に語るところ、軒をかすめて差出でたる松が枝に限なき月の宿る夜や如何に、寐られぬまゝの身に染む雨の音など一入さらに恨めしの種なるべし、

わが身に乳を與へし乳母の姪なりとて、十四の春より今年二十七の曉まで、十四年うちつゝいての奉公に一日も身邊を離さず離れねば、あけても暮れても此女なくばとの御意に衣は汗に至る玄關の書生も憚りて軽々しく下女呼ばはりをせず、嬢様お嫁入の荷物に生きて御飯を喰ふ化物が一個ありと、朋輩の女どもも恐れて萬事の機嫌とりん、その勢ひ邸宅中を我物

として令嬢を人質に取りしが如く、名は里といへど元來なかく甘からず、しかも浮世馴れ
て氣輕の伶俐女、今夜も何やらむ俄に召されて人しれず燈火の下に主従の私語、されど珍ら
しからねば耳敏つるものもなし、

『ねエ里や、今夜は、少し自分の思案に餘ることで、和女に相談するんだからね、よく聞いて
おくれよ、よつく聞いて、そして和女の料簡を借りるんだよ』『ホ、、、何で御坐います
か存じませんが、貴嬢の御思案に餘った事で婢の料簡なぞと、さやうな辻褃の合はない物の
道理が貴嬢』『いえ、あるんだよ、あるから和女に相談するのさ、しかし、わたしに打明けさ
して和女、笑ったり何かすると、きかないよ、眞實に、心から相談に乗ってくれるだらうね』
『あれ、まアお嬢様、外の女では御坐いません、恐れながら貴嬢、里で御坐いますよ、何事
か存じませんが、それほどまでの御言葉を勿體ない、お笑ひ申して濟みませうか』『それで

は、うちあけて、いふがね、和女、あの倉橋さんといふ方を知ってるだらうね、そら、一三二
年前から洋館の方へ、ちよいと、よく來臨したぢやないか、此ごろは、お見えなさらな
いが、先達の園遊會の時た、一人で木綿の羽織袴を着て在らっしゃった方だよ』『洋館の方で
は能く存じませんが、あの時、木綿の羽織袴と仰しやれば、なるほど、お色の淺黒い脊の高
い、あまり肥らなくって、いやに四角ばって眞面目くさい、皆様が御愛嬌の中で只お一人つ
んと澄まして在らっしゃった方で御坐いませう』『さう和女のやうに餘計な事を言はなくつても、
あの方と分れば宜いぢやないか、をりく、和女は無駄口を聞いて不可よ』『おや御免遊ばせ、
つい貴嬢、ホ、、、』『あの方は、あの中で一番、立派な方なんだよ、お父様でさへ譽めて
在らっしゃる方だよ、それに和女』『あら、さやうで御坐いますか、少しも存じませんで、御
免遊ばせ、ところで、あの方がどうかありませんでしたので御坐いますか』『どうも、なさらないん

だがね、いちく和女のやうにいふと、却ッて此方が分らなくなるよ、もう今夜は止して、また翌日の晩にでもしよう』『おや、何か、お氣に觸りまして御坐いますか、お嬢様、どうかさう仰しやらずに、御機嫌をお直し遊ばして、里の不束女は平生から能く御存じで在らっしゃるぢや御坐いませんか』『それなら和女、わたしの言ふ事を黙ッて聞いておいでよ』『はい、恐れ入ります、もう決して御機嫌を損じないやう心得ますから』『しかし何だか、妙に、言ひそ、くれて仕舞ッたよ、あんまり和女が口を出すので』『で御坐いますから、おわび致して居りますに』『外でもないがね里、あの倉橋さんといふ方がね里、ことに寄るとまだ分らないんだが、もし、事に寄れば、わたしの、何になるかも知れなんだよ、お父様の思召では』『おや、まア貴嬢、お嬢様、まアあの方が、で御坐いますか、いえ眞實で御坐いますか、お父様の御意が、第一そしてまた貴嬢の思召は如何で御坐います、まづ其事を伺ひたう御坐います、

お嫁入遊ばす御荷物の中には生きて御飯を戴く化物があると皆に貴嬢、化物扱ひまでされて居ります里で御坐いますもの、いくら御前が何と仰しやツても、こればかりは貴嬢、恐れながら婢がいえ御心配遊ばすに及びません、里が付いて居りますから』『あれさ、和女、また折角、しかけた談話の先を折るよ』『だッて貴嬢、お父様ばかり御自身お一人でいくらお極め遊ばしても』『まアお待ちといふに、わたしの事になると和女、すぐ狂氣のやうになツてくれるのは嬉しいが、まだ談話の順序を能くも聞かないでさ』『ホ、ホ、御免遊ばせ、しかしお嬢様外の事とは違ッて、御一生の大事で御坐いますよ』『わかッてるよ、だから和女に相談をするのさ、つまり里や、折角お父様が、大勢の人の來る中で折角お見立て遊ばした方だから、勿論、立派な方に相違なし、また、わたしに、委細はないんだがね、もし言ひ出してね里、萬々一、ひよツと嫌な返辭を聞くやうな事があッては、第一お父様の御心配、お顔にもかゝる

事、わたしだッて口惜しいよ、面目ないよ、ねエ里、外の事でないからねエ、實は今まで、和女に言はなかつたがね、あの倉橋さんの御住居へも、たび／＼伺った事はあるのさ』『いえ、よく分りました御坐います、實のところ先刻からの御談話を、恐れ入りますが、わざと婢が存じながら掻き廻しましたので、ホ、ホ、婢が狼狽へた風で、をり／＼呵しく、お吐りを蒙ればこそ貴嬢、こゝまで仰しやられたので御坐いますよ、もし婢が最初から眞面目で伺った時は、どうしても大事の御談話に御遠慮があつて、お心を悟り損ひますもの、いえよく分りました御坐います、この三四月以來、上根岸の、かう／＼いふところへ、といふ事も存じて居りましたが、あの園遊會に木綿の羽織袴で在らした方が其人とは、倉橋様とは夢にも、それだけには里も、少々驚きまして、まさか、あゝいふ方とは、しかし無教育な婢風情が目の届く理由が御坐いませんから』『だッて和女、先刻、何と言つたえ、いやに四角ばつて眞面目

くさいとか、つんと澄ましてるとか』『あれ、お嬢様、それは御無理で御坐いますよ、さッぱり存じませんもの、あの方が根岸に在らッしやる方で、倉橋様といふ事を、しかし貴嬢、殿達は御氣性たゞ一個が男振で、外に何も入つたもので御坐いませんよ、べら／＼と嫌味つたらしい變に様子ぶつた人はねエ貴嬢』『ホ、ホ、ホ、現金だよ里は、急に今更』『おや、始めてお嬢様お笑ひ遊ばしましたね、ホ、ホ、貴嬢こそ却ッて現金で在らッしやいますよ』『虚偽お言ひ、和女が俄に空お世辭をいふのだよ、四角ばつて澄ましても宜いぢやないか』『あれ、まだ根に持ッて在らッしやいます事、御免遊ばせと申し上げましたに、しかしお嬢様、それに就きまして里へ御相談と仰しやるのは、いかやうな事で御坐いますか』『今もいふ通りお父様の御顔にも關るし、また自分にもね、だから和女が根岸へ伺つて、餘所ながら、はつきりとした御心底を聞いて貰ひたいのだよ』『ホ、ホ、ホ、どんな大層な、むづかしい儀かと存じま

お菓子でも持つてね、餘所ながら、心底を探つて来て欲しいのだがね』で御坐いますか、しかし』『また和女、しかしなぞといふよ、嫌なら頼まないからね』『いえ貴嬢、決して、さやうな事は』『では和女、往つておくれよ、うかく外の者を遣れないところだから、萬事かう打明けて和女に頼むのだよ』『はい、心得まして御坐います、いつごろ伺ひまして宜しいものか其邊も』『いよく和女が、ゆくとなれば、また別に其時あらためて委しう、いふ事もあるがね、くれぐれも念を押して置くのは、あの倉橋さんを尋常の人と見ては不可よ、わざと立派な官吏を止めて今、あゝいふ境涯に在らつしやる方だから、決して、迂闊な失禮な言葉を出してはならないよ、つまり和女が伺ふでない、わたしの名代だから、及ぶだけ丁寧にして、わかつたかね、いづれ出がけに委細の事をいふから、もし和女の一料簡で不都合な事があつた時は、わたしが生涯の遺憾だからね』

一方よりは、身にあまる情の露に濡れて飽くまで感謝の意を表しながら其間に犯すべからざる意氣を含んで、ピンと拗ねたる男振を見せむがため川上三吉こゝに倉橋が名代となりつゝ、綾子の許を訪はむとし、一方よりは、かりそめの思ひ積りくゞて我から作りし戀の淵瀬に身を浮きつ沈みつ、果は堪へ兼ねて夜なく、獨り閨の枕に語り盡せし言の葉、それを繰り返して思ふ人の眞意を知らむがため十四年來召使はれたる腹心の下女が綾子の名代となりつゝ、倉橋の許を訪はむとす、あはれ戀や戀、いづれに向うて誰が手にや落ちむ、綾子がために下女の里が根岸に向ふの時、倉橋がために川上が麴町に向ふの時、世を忘れ人を断ちて三年籠居の讀書の窻の紙一枚に如何なる運命や宿る、世に時めき人に羨まれて富貴深窓の佳人が鬢の毛一筋に如何なる運命や宿る、

戀の神と運命の神とは、この名士佳人を弄んで、こゝに人間慘憺の底に沈めむとするか、さ
ては人生幸福の上に捧けむとするか、

倉橋幸藏續編

其一

縁の下に抛け込まれたる底ぬけの摺子鉢さへ、時には引き出されて雨落の飛沫を防ぐ用とな
り、たまく／＼蕃椒を植ゑられては淋しき晩酌の膳の上に罷り出で、一口ひり、と思はぬ功名
手柄を賞せられ、ちよいと年越の梅の挿枝は貧家の春を慰め、夏は朝貌が露の生命の置きど
ころ、秋は菊といふ隠君子の假の宿にも定められ、冬の雪には其まゝ伏せて眺めて昔は味噌
をするがの富士の山と唄はるゝ洒落もあり、盲目も二年の修業には掴み取の按摩となりて一
本の竹杖に闇の世を迷はず、鱧も三年たてば丸煮にせられずして下手な鰻の蒲焼に匹敵せむ
とするの美味、四年の木に生る桃栗は取って喰ふに足り五年六年の藪には笥を生じ、七年は

人間生涯の幾段を分つべき大切の一期、八年の赤松は床柱となり、九年面壁の達磨に悟道は開かずとも、苦海十年よく玉の輿に飛び乗る賣女さへある世の中に、いやしくも堂々たる男児が志を立て、苦學十年の曉、そもく何にかなる、

しかも人並すぐれて五尺八寸二十貫目の大男、その苦學は徒らに俗界を卑しむの種となりて當世に容れられず、あはれ多年の難行も空しく時流に反いて其日の衣食も豊ならず、あますところは人しれぬ一滴の涙、いづこの誰に對うて注がむ、たゞ我愚を歎じて眼前の妻子に謝せむのみと、例の上田力が柱に背を凭せて山の如く聳えし兩の肩も何とやら打濁めながら、神か佛か無心に睡れる我子の寢顔じつと見詰めて、おもはず絞り出す滿身の溜息ほつと漏らせば、ランプの影に餘念もなく良人の肌著を縫ひし妻のお清、俄に針の手を止めて眉を擧めつゝ見返りぬ、

「もう良人お寝みなすつたら宜いでせうに、よほど夜が更けて來ましたよ、妾も今、少しで止めますから」『なるほど、夜中このまゝ、鼻のやうに眼を圓くして起きて居たつて用はなし、何の役にも立たない場塞ぎの厄介物だからね、しかし、頑是もない乳呑子と蒼蠅の小賣店と足らず勝の貧乏世帯を一人で引ッ構へて一日寸隙もなく立働いた上、またこの厄介物の肌著を夜の目にかけて縫つてくれるかと思やア、いくら夫婦の間でも實は聊か遠慮の氣味ありだよ、いや全く遠慮すべきが當然だ、無學文盲の世間普通にすら及ばざること萬々、いはゆる夫婦共稼ぎの下司に對しても大に恥づべきことだからねエ、時に利あらず馬前まずとは古英雄の歎、糟糠の妻を堂より下さずとは志を遂げた奴の言、乃公は生涯の不運と不利で、鞭でども鞭でども奈何せむ瘦馬の立往生だから可憎ら貞節の和女を糠味憎桶に押し込んだまゝ、いつ救ひ上げるか分らないのが實に氣の毒だよ』『ホ、、、何ですよ、また呵しな妙な事を

つまらない愚癡を仰しやらずに早く良人お寐みなさいよ、馬が駈け出さなくツても牛が舞ひ戻ッても宜いぢやアありませんか、幸ひ泥の中に足を踏み込まないで毎日々々糠味憎桶に手を突ッ込めばこそ分相應、どうか斯うか妾に持てる世帯ですもの、ホ、ホ、ホ、』ハ、ハ、ハ、ハ、さう言ッてくれるから乃公も生きて在られるのさ、妻に對して良人の力なく子に對して父の效なく社會に對して一個の民たる資格なし、そもくこれが満都の輕薄華奢を嘲ッて月漏る汐入村の片廂に苦學十年の功を積んで來た男かと思やア、いよく何となく哀れを催して今昔の感に堪へずだ、また我みづから我愚に呆れて驚くの外た、浮世なるもの、影もなく聲もなくして襲ひ來る魔力の怖しきを知る、どうしても乃公は今日の人間界に時を得べからざる不適當な無用物だよ、全く當世の產物でないやうだ、ハ、ハ、ハ、笑ッちやア和女に濟まないがね、さりとて今更ら泣いても無効だ、逆も此分ぢやア無念ながら前途將來ますます覺束ない、ま

ア馬鹿で頑固で活動のない兄弟を仕方なしの食客に置いた氣か、但しは死に別れた亭主殿の遺子に厄介な無器用な大男の守護でも置いた氣か、乃至また店の賣溜を覗ふ盜賊の用心にでも召抱へた氣で居てくれ、乃公を友白髮の末まで連れ添ふ現在の良人と思やア腹が立ッて辛抱が出來まいから、ねエおい、徒らに言を設けて細君の機嫌を取る一場の口説にあらず、また空しく返らぬ我身の愚癡を並べて一時の不面目を塗抹せむとするの意にあらず、これが眞實の腸を吐いた乃公の本音だよ、良人といひ父といふも名のみあつて更に其實なき二十貫目の大男が、たゞ惘然と柱に凭れて楊枝一本も確實に削れぬ腕を拱きながら、すやくと何事も知らずに睡る我子の寐顔を見て其行末を思へば奈何ぞ涙なからむだ、また連れ添ふ甲斐もない良人の肌著を夜更けて後に縫ふ我妻の可憐に對しては轉た斷腸の苦痛ありだ、同じ布子一點寒曝して年が年中の空腹を抱へて苦學難行を仕て來た中でも、川上の智にして事に害

せられず物に滞らざる圓轉滑脱、倉橋の周到緻密にして言行一致の實をあぐるに勇なる、また吉田が年少の黙々孜孜として日夜の黽勉なるは儲置き、せめて彼の黒田が才氣の半分、いはゆる汐入村以來我黨一味の難物とせられ無鐵砲と稱せられ厄介物また油斷のならぬ横著漢として殆ど論外に置かれたる黒田が才氣の半分でも乃公にあれば、それこそ今日この境涯に甘んぜずして和女にも少しは世間の妻らしき妻とする事も出来るがね、悲しいかな持つて生れた天生の魯鈍愚直、つまり乃公の乃公たる所以は當世の社會に對して鏗一文の價値もない、思ふ事は悉く零に歸して爲す事また一切の無代價だ、我みづから我一个の上田としては時或は却つて其無代價に誇り其魯鈍愚直を潔しとするの勇もあるがね、嗚呼こゝに妻子ある浮世の上田力としては屑屋の籠に飛び込まむとしても買手なきを奈何せむ、たゞ和女のやうな妻を持つたのが人間外に在せる何者か我を憐れんで天いまだ此愚物を市井俗間の白癡瘋癲と

同一視せざるの賜物だ、ねえおい』「ホ、ホ、ホ、何を仰しやるんだか、さッぱり妾には分りませんよ、さア萬事このまゝ分らないにして寢て仕舞ひませう、ほッと臙けに分らないで持つた世の中、あんまり物事が判然と分り過ぎた夫婦は却つて葛藤の絶えない理窟同士で、また餘り足り過ぎた大世帯は良人、いつも却つて餘計な心配の種ですよ、入らざる世間を張るでなし苦しい外觀を飾るでなし、縁あつて連れ添うた夫婦の中に出来た子寶、是を何よりの娛樂にして、親子三人が病み煩ひもなく其日々々の御飯を喰べ、誰に氣兼ね遠慮も打明けた内證これツきりの天地で、分相應に渡れる浮世を渡れば良人、それで宜いぢやアありませんか、人間の慾をいへば此まゝ、神佛にもなりたし、まゝにならぬが世界の規則で、思つた事の外れるのは良人ばかりでない證據は、どこへ往つても間違ひと氣狂ひは絶えず世の中にありますもの、ホ、ホ、ホ、さア面倒臭い文句は禁物々々、早く妾の議論に負けて仕舞つて寢る事にな

さい、おや今お隣家の時計が鳴りますよ、あらもう十二時、宵の六時から考へてみると長いやうでも僅の時間よりないもんでね、しかし昨日よりも今日よりも翌日と、われ〜夫婦は時計の針に連れて連れて壽命が縮まつて行くもの、また坊は其割合に段々と大きくなるんですねエ』なるほど、乃公が十年の苦學こゝに屁を放つたほどの價値もない筈だ、べら〜と何の氣なしに饒舌つた今の和女が一言一句、殆ど浮世に對する觀念の哲理を含んでるよ、や、いよ〜閉口頓首、さらばまづ謹んで寝るとしよう』ホ、ホ、ホ、全體、良人は正直すぎて立派すぎて、つまらないこつても學問や理窟に引き當て、世の中を萬事むづかしく大層に見るから、いけませんよ、手輕に、ちよいと、あれはあんなもの、これはこんなものと、あつさり心易う見れば濟みますものを、たしか今年の夏ごろでしたか、良人が廚臺の下を頻りに覗き込んで首を捻りながら不思議さうに何を考へて在らつしやるかと、其後で妾が見れば、

ひよろ〜と薄白い鶏卵色に二寸ばかり長く伸びたもの、ありやア良人、こぼれて落ちた生の豆が工合よく漆喰の割れ目に挿まつて、お米の洗ひ流しが自然の肥料となり、其時の陽氣に連れ水氣を含んで思はず芽を出したのですよ、つまり狼狽へた浮氣な豆どんが、ちよいと欺された室にかゝつて、もやしといふ名に變へ姿を變へて出たのですよ、ホ、ホ、ホ、』ハ、ハ、さうかい、しかし其處まで委しい氏素性は和女でなくツちやア知れる筈がない、まして浮世に疎い乃公だもの、そんな意外に變挺なる珍説奇談を提けて道具外れを打たれては困るよ、ハ、ハ、さうかい、ありやア豆の奴が化けて出たのかい』ホ、ホ、まづ物の凡例をいふんですよ、あの時だつて良人、あんなに妙な顔をしてさ、いつまで首を捻つて考へ込まないでも、おい清こりやア何だと仰しやれば其場で直に分りますもの』なるほど、さうだね、いや以後は心得て、あんなに無用な役にも立たない馬鹿けた心配しまいよ、ぢやアまづ和女と

いふ心丈夫な浮世の鐵盾の蔭で今夜の枕を高くして寢よう』さうさう、さうなさい、どのの戦鬪でも大將の活働は敗れた最後の間際といひますもの、世帯の落城も女房が切つて廻る菜切庖丁の刃金が鈍つて質草の矢種も盡きて討死した後のこと、まづ當分は安心して在らつしやいよ、女の出過ぎた業ですが此ま、漕げる沖まで妾が一所懸命に漕いでみますから』時には甲鐵艦さへ覆る荒い浮世の浪風に對つて下手な手細工で繋ぎ合はした細材木の筏舟しかも櫓舵は竹棹一本で、どこといふ港灣の的もない渡海だから、わけて猶更ら心細く氣骨も折れるだらうが、乃公のやうな厄介物と乗り合はした和女の不運だ、あきらめて堪忍してくれよ』あれ、なさけない事を仰しやいますなよ、なアに良人、半分ぐらゐるは浮世のために瘦せて仕舞つたところで丁度、宜い鹽梅に世間並の女になれる肥つてうですもの、ホ、ホ、ホ、根の深い杉の大木を小刀で削るやうな氣になつて良人、いくらでも遠慮なく苦勞さして御覽なさ

いよ、どれだけ辛抱の出来る妾たか、自分では思ひの外、強い自信ですが、しかし妾の我武者に引き替へて良人は何だか此ごろ大變、急に弱くおなりなすつたやうですなエ、寒中に布子一枚の素肌で山のやうな肩を怒らして筑波嵐の北風に對ひながら吼えるのか呻るのか分らない地聲の遠鳴り、あれが上田さんの詩吟で尤も御機嫌の宜い時だと承つた頃の勢ひ、今でも目に見えるやうですよ、また夏の炎天に蓮の葉の帽子で汗染みた浴衣の背筋に地圖の形が出来て、薪雜木のやうなステッキを突き鳴らしながら、おいこら誰か居らんかと濱町の玄關へ破鐘聲で吐鳴り込んだ當時の勢ひは、どこへ消えて仕舞つたのでせう、少しも今ありませんよ、ホ、ホ、ホ、やい家鴨め苟も天下の豪傑この乃公に對つて恐れ氣もなく勿體ない、ふざけ奉るな畜生め下々の下々女めと頭上から噛み付きさうな權幕で妾を人間外のやうに仰しやつた時は、いくら妾でも少々むつとして腹も立ちましたが、今では結局あの時分の事が何

だか妙に懐しいやうですわ、人の氣といふものは變なもんで、また夫婦の縁も不思議なもんですねエ、ホ、ホ、ホ、『馬鹿、つまらない事をいふない、あの時の上田と今の上田たア難易軽重、こゝが所謂る恐るべき浮世の理だよ、ハ、ハ、ハ、しかし思へば今昔の感、随分この乃公も氣樂蜻蛉だツたねエ、あゝ其時の婢、清なるもの今は我ために浮世の羅針盤ともいふべく指南車とも稱すべき貞淑温良なる大切の妻、和女なるものか、良人あつての妻にあらず實に妻あつての良人だわい、憫れむべし世間の凡流もし一片皮相の汚れたる俗眼を以て我を見れば、或は男妾とやいふらむだ、しかし五尺八寸二十貫目で今戸焼の達磨に等しい男妾と來ちやア頗る奇だ殆ど滑稽だ、ハ、ハ、ハ、聞説、昔し安部の貞任は腰圍七尺にして荒れたる猛牛を搏にするの膂力ありながら花の如き十九の妻が閨怨に胸板を突かれて縁より顛け落ち、かの元龜天正に鬼神と唄はれたる福島正則は侍婢に戯れて鼻アに見付けられ跣足のま

ゝで門外へ遁け出したといふから、乃公のやうな奴が何といはれても宜い當然だ、寧ろ其間の消息に人しらぬ神聖の戀ぞ宿れりだ』おや、けしからん、誰が良人を、男妾なぞといひました』『いやさ、誰も言ツたンぢやアないがね、まア言ツたとしたところで和女』何ですよ、馬鹿々々しい、いやな事を仰しやるもんでない氣が悪くなりますから、それより早く良人お寐みなさいよ、あれ、もう一時ですよ、お隣家の時計が』『なるほど、一時だね、ぢやアいよゝゝ寐るとし、しかし今夜ア何となく宵から氣が鬱いで面白くなかつたが、いつの間にか和女の談話で一其の快を覺えたよ、とかく和女は物事に調和的の性を備へて言外に人を慰藉するの徳があるやうだ、實際かう夫婦にならない前でも顔を見りやア互に毒を吐き合ツて喧嘩しながら、さのみ意に介して腹が立たなかつたもの、ハ、ハ、ハ、』『およしなさいよ、また妙に昔談話の端緒を引き出してさ、蒼蠅い事ね、さア萬事は翌日として、寐ること寐る

こと、もう良人うつゝに坊が眼を覺して乳を探る時分ですから』さうだ、この馬鹿親父め叨りに自己が興に乗って濟まなかつた、さア早く寢てやれ、かはいさうに、第一和女が悪いよぐづくと今ごろまで、つまらない、早く寢る馬鹿』おやまア酷いこと、良人ア妾に對つて氣の毒なほど優しい代り、坊の事といへば直に眼色を變へてさ、まるで邪慳な姑が嫁を叱るやうに、ホ、、、』『和女ばかりに小言をいふぢやアない、この馬鹿親父めと我みづから我をも吐してゐぢやないか、さア早く寢ろ』おやく、今度は反對に箭の催促ですわエ』『えゝまた何だつて和女、ぐるぐるソんなに幾條も腰ッ邊へ紐を巻き付けてるんだ面倒臭い、すほりと踏み脱いで早く寢ろといふに、そら眼を覺した様子だぜ馬鹿、子の急に應ずること疾風電霆の如しとは親たるものゝ情だ、義務だ、馬鹿め早く寢ろッ』『はいく、どうか御免下さいまし、ホ、、、』

家は貧しけれど互の心は賤しからず、身の境涯は淋しく夜具は薄けれど夫婦の情合いと濃かに暖く、其まゝ我子を中間に抱いて俗ながらも川といふ字の世諺、やうく枕に就きし折しも、隣家の軒下より何をか覗うて俄に吼え立つる犬の聲もろとも、我門口の戸を叩く音あり、

まだ寢入らぬまゝの夫婦が等しく耳を敏つれば、流石に冬の夜深を憚りてや俄に高からねど絶えず頻りに戸を叩く音、をりく脚をあけて吠え付く犬を蹴るが如く滿板を踏みしが、果は石を拾うて抛けし物音に靴音たてゝ來りしは巡查と覺しく、何をか一言二言いひ交せしうち、おもはず高く笑ひしは正しく例の黒田健次が聲、進退に度なく出入に時なき奴なれど嚴格周到なる倉橋が許に食客的となつて以來、その實は

殆ど禁足せられし筈の黒田が冬の夜更けし今ごろ何の用あつてぞ、戸の割るゝほど音高く叩き得ざりしは珍事出来にあらざる證據ながら、彼奴の横著なる犬に吠え立てられし立腹まぎれ巡査を嘲弄して如何なる面倒を惹き起すやらと、褻衣のまゝ飛び起きて枕頭の手ランプを提げながら門の戸を引き開ければ、固より怪しからねど散々の過言無禮に巡査も今は意地となつたる體、此奴このまゝ交番所まで引き摺り行きて霜夜の立往生に一泡吹かしてやらむとの勢ひ、黒田は例の横車を押し出して冷かに笑ひつゝ碌々たる公等が知るところにあらずといふの顔色、いよく氣焰を吐いて屈せざる勢ひに、上田おもはず中間を隔て、手ランプを雙方の鼻頭に差出しながら、「おい何だ今ごろ、兎も角も警官に對して貴様が善くない、わるいよ貴様が、控へろ、控へろといふに、なアに貴官こりやア私の友達ですが仕様のない香助で、少しでも酒の氣が付くと忽ち方角の分らなくなる奴ですから何卒、いや決して別條御坐いま

せん、おい黒田、早く一禮して這入れ馬鹿、いつまで何を貴様、ぐづぐづしてるんだ早く願け込んで寝るなら寝ろツ」元來の大力そのまゝ手を執つて小兒の如く引き摺り入れ、なほ巡査に對うて陳謝辨解さまぐくに言葉を盡しながら、やう／＼戸を閉ちて見返れば、何事やらと驚いて起き出でたる妻の面前に飢ゑたる猿の如く坐して頻りに會釋の體、

は、ア偕は彼奴いよく倉橋に追ひ出されたる夜中の狼狽、されど巡査に對ひ我に對うての勇氣もなく俄に妻に對うての殊勝さ、あれほどの奴も浮世の籠は流石に怖しきものかと上田おもはず哀れを催しぬ、

『今ごろ黒田、何の用で來たんだ、第一また餘計な面倒を掛けるぢやアないか、巡査と争つたりして馬鹿な、まるで田舎から駈け出した生意氣の法學生と一般の初心だ、見苦しい』『いやはや何とも濟まない、しかし君あの巡査め』『巡査なんざア何うでも宜い、全體、何の用で

来たんだ』『ハ、問はれて今更ら何とやらで、聊か閉口だね、ともかく君、細君に寝て貰
ツてくれ、この寒いに夜中わざ／＼起きて居られちやア氣の毒だ、やア坊が能く寝てるぞ、小
兒の寝顔は可愛いもんだな、さア細君どうか寝て下さい、今ごろ唐突に手土産も提げず飄然
と押し掛けて来た化物ですから、どうせ碌なことてないですよ、ハ、ハ、ハ、勝手をいふや
うですが實のところ、あまり聞かれて面白くない次第、願はくば氣兼ねしに上田と對坐で私
語低聲、なアに寢床なンゴア入りませぬ、このまゝ、曉に徹しても宜い覺悟、ついでに翌日の
朝は水の一桶ぐらゐ汲み込んで置きますさ』『ホ、ハ、ハ、ハ、黒田さんは相變らず暢氣で在らッ
しやるよ、いつも氣樂な事ばかり仰しやツて、しかし御勝手とあれば失禮ながら妾の方も勝
手に御免蒙ります、第一この通りの子持で夜は猶更ら人様に、ねエ良人まだ水鉢に火が御坐
いませうから、ちよいと掻き起して炭を、鐵瓶の湯も冷め切つては居ますまいよ、お菓子か

何かあれば宜しいにねエ』『なアに和女、ラツちやツとけよ、のこ／＼今ごろ人の家を叩き起
してさ、美味さうに巡査の權突を喰ふ好奇漢だもの、茶も湯も入るものか、飲みたきやア水
甕の水でも浴せるさ、かまはずに寢て仕舞へ、優しくすりやア、どこまで附け入るか知れな
い奴だから、さア黒田、二階へ上れ、がや／＼と枕頭で此夜深に理由も分らない事を饒舌ら
れちやア第一、小兒の邪魔になるから、そら手ランプと座蒲團を持って行け、火鉢は乃公が
提げるよ、ちよツ面倒臭い奴だなア今ごろ、せめて翌日の朝でも來れば宜いに』『まア君、さ
う言ツてくれるない、時あツて窮達消長は人生の免るべからざるところだ、かはいさうに
天下の奇才も夜中ま／＼して此家より外に霜を防ぐの的がないんだから、ハ、ハ、ハ、』
黒田は手ランプと座蒲團を抱へて上田は火鉢に鐵瓶を載せたるまゝ、前後して二階に上り行
きつゝ相對うて今更に顔を見合はせながら、互に始めて落著いたる體、親に氣を兼ねて打語

らふ兄弟の如し、

『おい黒田、いよく追ひ出されたんだな、出すもの出さるゝもの其いづれか仔細を問ふに及ばない、斷じて君が悪いのだ、世間普通の男と違つて倉橋だからね相手が、まして此夜深に實際よく／＼のこつたらうさ』いや、さう頭上ごなしに斷案を下されちやア少々酷だが、なるほど僕が善くなかつたかも知れない、しかしまた強ち悪いとも思はない一片の理由があるのさ、つまり平生の僕が僕で、あまり謹嚴正直の名を得て居らない方だからね、まして彼れ倉橋に對しては猶更ら信用が薄いもんだから、眞實こゝに倉橋を思つて彼が爲に苦心慘愴の友誼も、豈圖らむや却つて今夜の結果、出て行け、おん出てやるといふ始末で、ハ、ハ、ハ、ついで怒つた事のない奴が君、眞赤になつてね、しかし僕が疊を蹴立て、起つた時、どつちが悪いか兎も角も上田に聞いて見ると叫んだ一言、ハ、ア儲は彼奴の情誼に篤き猶いま

だ心中に我を得捨てず、舅があつて婿養子同然の川上を今ごろ叩き起して迷惑させるより、先づ氣兼ねのない心易い君の家へ行けといふことだと思つてさ、實は聊か氣の毒だつたよ』

『や、いよく貴様が悪い、それほど分つて居ながら、あの倉橋を怒らすたア言語道斷、けしからんこつた、乃公の家だつて少しは唄アの手前を思へよ、まだ始めてなら宜いが、さうざ病氣の介抱まで入念の世話を掛けた上唐突に夜夜中、食客的の突き戻されなざア、元來の氣の宜い女だから別段、さして構はないやうなもんだが、第一この乃公に浮世といふ働きのない貧乏世帯だもの、いくら何でも聊か辛いところがあるよ』『いや其邊さらには辨へざるにあらず、だから夜が明ければ翌朝すぐ出て行くよ』『え、出るるといふンぢやない、しかし出て行くつて何處へ行くんだ』『ハ、ハ、ハ、また倉橋の許へ逆戻りさ、つまり今夜のところは折角

あの倉橋が十餘年來にないこと始めて怒ったんだから、まさか僕も例の調子で蛙面馬耳の横著を構へて彼が憤怒に恐れざるは禮にあらすと心得たがため、ちよいと洒落に一夜だけ追ひ出されて見たのさ、勿論、翌朝は君を煩はして、いはゆる放蕩息子が伯父御に連れられて親の前へ謝罪に出る形容さ、さうしないと倉橋が呼び戻したくつても呼び戻す機会がないからねエ君、これもまた却って氣の毒だよ、ハ、ハ、ハ、ハ、『いやはや、何といふこつた、どうも呆れ返って物が言はれない、彼が折角の憤怒に恐れざるは禮にあらすと心得て出たに至つちやア實に論外の沙汰だ、誰が貴様のやうな厄介物を呼び戻したいもんか、ハ、ハ、ハ、ハ、づうぐししさも其處まで修行が積めば大丈夫、世の中に苦勞も心配もなくって大悟徹底したと同じこつた、いはゞ千古の遺憾あれほどの妻を喪つて後、殆ど命數の極あれほどの大病を煩ひながら、ひよこくと癒つて今こゝに復それだけの毒を吐いて蠻勇的言語を逞しうするんだもの、

迎も尋常一般の弱點を備へて世間普通の義理人情を辨へた人でないね、君は正しく虎狼の再生にあらずンば大禪大悟の哲人が遺種だらう、ハ、ハ、ハ、ハ、ある篤學の老僧が三冬嚴寒の夜に橋を渡つて乞食の臥せるを憐れみ衣を脱いで與へし時、乞食さらに喜ぶ體もなく其まゝ無言に引き被いで寢返りせし體いかにも憎ければ、老僧その背を撫して、汝は人に物を貰うて嬉しくないかと問へば乞食おもむろに答へていふ、咄野狐禪、おのれは人に物を與へて嬉しくないかと、倉橋に對する君が今夜の振舞、或は似てるかも知れないね、ハ、ハ、ハ、ハ、『ハ、ハ、ハ、ハ、さう最眞に引き倒されて糞譽めに譽め殺されちやア堪らないよ、しかし翌朝は是非とも君が附き添つて何とか一言、その場を濁してくれないと困るぜ、出ろ出るとなつた此まゝぢやア互に變だからね』『仕方がない、外に出で、徒らに一身衣食の奴とならざるかぎり、どうしても今さしあつて君が身を託すべき適當のところは倉橋だ、附いて往つてやるがね、全體

何が原因だ、今夜の追ひ出されは』さ、そこだ、強ち僕が悪いばかりでないといふ一片の理由は、例の大臣の娘ね、いづぞや君が来て玄關で出逢った令嬢ね、あれさ、あの一件が即ち今夜の退去命令で、竟に食客的謝絶の強硬手段を喰ったのだから、實は僕も可哀さうだよ、いは、雙方のため戀の橋普請をする心算で思はず出過ぎた杭を撃たれたのさ、ハ、ハ、ハ、』何だ馬鹿な、あの時も乃公が言ッたぢやアないか、倉橋の倉橋たる所以を知らざるものは、或は羨み或は疑ひ或は危むだらうが、事々物々に周到緻密なる天性しかも動かすべからざる主義と自信とを持つてる男が、生涯の苦樂を俱にすべき大切のこつたから、捨て、置いても大丈夫、なまじツか餘計な口や手を出しちやア却ッて不可んと言ッたに、また例の面白半分で、くだらない有害無益の駄世話を焼いたんだな』いや決して僕は有害無益とは思はない、外の事と違ッて、苟も人事の大切に關することだもの、いくら僕だッて、まさか自分の愚弄に遣

ツた理由ぢやアないが、あの無愛嬌にして四角張ツたる不融通の野暮漢め、叨りに僕を僕として』『さアその僕を僕とせられるのが君の悪い證據だ、一事が萬事といふからね平生が大切だよ、實際また叨りに僕を僕として扱はれる君でも全くの眞情から出た言行なら、決して怒るべき倉橋でない筈だが、やはり君が不可んに相違ない』『や、君にまで、さう出られちやア我々獨り清めりて屈原の出來損ひを學ぶより外に仕方はないがね、實のところ斯うだ、あとで君も聞いて知ッてる通り、曾て例の新聞で倉橋が彼令嬢のため飛んでもない迷惑を蒙ッて以來、いはゆる嘘から出た誠と意地から出た情と氣の毒に堪へない心と實際目撃の出處進退とに就いて現在の境遇に感歎のあまり、いつしか全くの戀となつて竟に惚れ込んで仕舞つたのさ、令嬢綾子なる今年二十歳の美人がよ、ね、ところで君、しばし根岸の奥の草叢にダイヤモンドの指環が輝いて襲ひ來るといふ始末さ、官を捨て社會と絶ッて三年こゝに籠居と定

めたる讀書の窻も、をりく得ならぬ紅粉の香に驚かされて流石の先生も頗る閉口の體、し
 かし元來木石ならねばで、まさか垣の外から悪太郎に馬の糞を抛け付けられた心地もすまい
 よ、否、竹細工か團子細工で作った男でない以上、その閉口の體も迷惑の様子も實は何等か
 のために彩られたる人間外面の假相で、もし腹の底を叩けば豈それ嬉しからざるを得むやだ、
 美人で伶俐で教育があつて身分が賤しからぬ才色兩全の尤物だもの、しかし蓼を食ふ蟲も
 あつて人の性には毛嫌ひといふ一種の妙な論外もあるこつたから、いまだ以上の事實を以て
 僕は倉橋の人事生涯に關すべき大切を速断しない、こゝに動かすべからざる證據は、かれ倉
 橋の秘せる草稿中に君、某女に與ふと題せる一文あつてね、つまり倉橋が綾子嬢に對する戀
 の觀念だ、實際に與へずと雖も自己が胸中を打ち明した一札依而如件といふ戀の證文を
 見ると、果して先生なかく大に意ありだ、たゞ三年の後を待つてくれといふところ少々ま

た、灰汁は脱けないが、こりやア先方が先方で倉橋が倉橋だから、ちやア直に今夜からといふ
 理由にも行かないだらうよ、ね、是に於て僕は既に此戀を鮑の貝にあらざるものと認定した、
 爾來をりく倉橋に對つて促すが如く戯るゝが如く勸めて見るがね、先生なほ頑として固く
 冷かに耳を傾けざるの體、實は呵しいよ、ところが戀その頂上に達すれば男よりも女の方
 が武者振ひするもので、昨日の朝の八時ごろ、例に依つて倉橋が上野の圖書館へ出掛けた不
 在中、かの令嬢綾子が戀の使者として多年腹心の侍婢と覺しき「十六七の女、その名を里と
 いふ女がね、やつて來てさ、なかく氣輕に如才なく浮世馴れた調子で、倉橋の歸家を待つ
 間まづ僕を相手にして言葉を巧みに探りかけたね、つまり簡單に露骨にいへば、妾の主人が
 心情は斯うですが倉橋さんの思召は如何でせうといふ工合に持つて來たから、なアに萬一も
 し違つた曉は僕の責任にする決心で、加之も本人同士といふぢやアなし、互に武者の

一騎討だ、まして悪いこつてないと思つて、僕は言つて仕舞つたのさ、いはゆる草稿中の某女に與ふ一文そのまゝの意味を猶よく演義註釋して、すると先方の使者め、頗る満足の體で倉橋の歸るも待たず俄に立去つた勢ひ、まるで鬼の首でも取つたやうだつたから、こいつ聊か饒舌り過ぎたかとも思つたがね、もはや仕方がない、あと追ッかけて取消も出来ないし、まさか驚を鴉と言つた理由でもないと落著いて居たところが、おい上田、當世流の學校教育をうけた女は處女でも何でも油斷がならないぜ、しかも大臣の令嬢と來て交際場裡にも馴れた歐洲的の才女で、恥かしさ一ぱいの顔に袖屏風といふ倭風が乏しいから、まして戀は神聖とか生命の露とか天の人に賜はる最大無上な幸福とか都合の宜い理窟詰で勝手な道理の手傳つた惚れやうだから堪らない、昨日の今日、午後五時ごろ、本尊の綾子嬢より倉橋に宛て、直接の一封、殆ど誰でも披いて清き愛の神の命ずるところに従ひし我心の虚飾なき文字を拜

み奉れといはンばかりの勢ひ下ね、自分が常に指して居た小豆粒ほどのダイヤモンドの指環を添へて君、楽しく三年の後を待つとの返事を持たして來たのさ、倉橋かくと見るや否、くわつと顔色を變へて僕を呼び付けながら恰も守錢奴が倉庫の隅で盜賊を見付け出した如く、さア貴様どうする、此まゝでは濟まさないといふ騷動で、僕も少々辨解の料簡で争つたのが竟に一大議論となつてね、凡そ三時間あまり、なるほど段々と聞いてみりやア倉橋が怒るのも無理はない、單に僕が草稿中の文意を漏らしたばかりでなく、實は君、此事に就いて川上を使者とし、しかも今夜、先方へ感謝的の敬遠策に遣る手筈であつたとは案外また案外、流石の僕も啞然として只ボンヤリと驚愕の外なしさ』『それ見ろ、僕が言はない事か、だから役にも立たない餘計な馬鹿な白癡企謀の差出口をするなど言つたに、小人間居して不善をなすたア全く貴様のこつた、實に倉橋のため氣の毒千萬なこつた、して其善後策を貴様、どうす

る決心だ、第一、本人の倉橋ばかりか、川上にも意外な不面目をさすぢやアないか」「いや、すぐに倉橋が委細の手紙を書いて近處の車夫を川上へ走らしたところが實に間一髪、つまり僕の僥倖で、もし二三十分も遅けりやア既に先方へ出掛けるところだツたさうだ、その川上の返事に曰くさ、もはや致方もなし今夜は此ま、差控へて熟考の上、明朝あらためて委細の相談に行くが、ともかくも膝下の狗鼠あの黒田の奴を叩き出すべしと書いてあつたから堪らない、すぐに其場で退去命令、しかし川上も酷いよ、出せなら出せで宜い膝下の狗鼠あの黒田の奴たア實に酷だね、しかも狗鼠といふ字と叩き出せといふ字に御丁寧な圈點を施してあつたからな」「知れたこつた、當然だ、まだ君子風のある倉橋だから貴様、まづ無事に追ひ出されたんだぞ、もし外の血氣者で、もあれば手輕いところで鐵拳の五個六個、その素頭に時ならぬ岡丘を現じて差當り膏藥代にも窮すべき筈だ、さるを倉橋の寛大なる火のやうになつ

て怒りながら、どツちが悪いか上田に聞いて來いとの一言、實に感泣すべき意味を含んでるぞ、ぢやア兎も角、翌朝は川上の行かないうちに乃公が連れて行くから、恐惶謹慎あらためて倉橋の面前で謝罪するんだ、宜いかね、しかし困つた事を仕出來したもんだな、倉橋は倉橋で別に思ふところあつて、わざわざ川上を感謝的敬遠策の使者に遣らうとしたところへまた先方から戀の使者として念を押しに來るたア、しかも其處へ貴様のやうな猪鼻助が洒々り出て餘計な駄辯を弄したから斯の如き失策を演じたのだ、それも先方が世間たゞ一應の女流ならば宜いが、いやしくも倉橋が在官中の恩をうけた大臣の令嬢として、名實ともに輕からぬ相手と來ちやア随分むづかしいわい、善後策なか／＼面倒だわい、もし倉橋が所信を枉けて事實その戀を歓迎すれば一も二もないがね、さて勝軍蔓の細く弱いやうで實際の自信力は鍊鐵の如き男だからな、ともかく貴様、つまらない事を仕てくれたよ、どうなるにした

ところが倉橋の生涯に拭ふべからざる一點の何等かを附けて仕舞つたぜ、事に窮して理に通ずる川上が居るから別段さして心配もないやうなもんだが』「なアに君、今更ら僕が自分勝手な理窟をいふんぢやアないがね、この大失策それ或は他日の大得意になるならむやだ、例を引くやうだが、曾て汐入村の昔、現在あの川上の妻は誰が過誤の功名で纏めた良縁か考へて見給へ、つまり富田の令嬢芳子が川上を慕つて戀の手が、りに扇子を書いて貰ひたいため、かの吉田に強制的の使者を命じた時、まだ浮世馴れない吉田が川上には一言の下に吐られ芳子には否應なしに迫られて進退こゝに谷ツた折しも、不意に横合から飛び出して菓子折を宙取の上、その扇子へ會釋もなく偽筆をしたなア君だらう、そいつが露顯して汐入村に吐鳴り込んだのは君、今の君が細君いはゆる當時お清大明神なるものぢやアないか、しかも偽筆で横奪した不正の菓子折を開いて、上野の山の中で共喰の罪を犯したのは誰だ、倉橋だらう、

して見れば君、いづれも身に多少の覚えある方々で、さのみ今この僕一人を苛めて餘り立派な大口を開ける御人體でもあるまいに、ハ、ハ、ハ、とかく僕は今昔ともに一味の中の憎まれもんだからなア、もし翌日、川上が妙な事を言ひ出したら畜生、すぐ一本まるツてやらなきやアならない』「よせ、馬鹿な、そゝそれが貴様の流で不可ンのだ、ありやアあの時のこツて、いはゆる已むを得ざる場合で臨機應變より出でたる自然的の滑稽だ、かねてより面白半分にて企てた貴様の失策たア似て非なるもんだ、もし翌日また變な屁理窟を並べ出すと困るぜ、宜いか、つまらない馬鹿議論を持ち出す心算なら僕は斷じて關しないから』「ハ、ハ、ハ、なさいけないね食客的の身ぢやア、まるで言論の自由を奪はれてるやうなもんだ』「さア大分に夜が更けて來たぞ、もう二時過ぎだらう、ぐづぐづいはすと階下へ降りて寝ろ、萬事は翌朝のこツた、また今ごろ床を敷き直すのも面倒だから毛布を被ツて夜具の裾から逆に藻潛り込め、

その代り少々ぐらゐ寢相が悪くツても僕が兩の脚で胸中を挟んで居りやア大丈夫、貧乏搖ぎもさすこつちやアない』ハ、、、こりやア驚いた、寢床の夜具まで食客的待遇と来たね、しかも夫婦が枕を並べて川といふ字に御寢相成るべき裾邊の一端を借り奉って、少々閉口だね、まして君が蠻勇の大力で胸中を逆に挿まれたまゝ身動きもならず寢るに至つちやア頗る心細い、實は危険だよ、もし寢返りの拍子、うつゝに力でも入れられて見ろ、大變だよ君、どうか胸挟みの責苦だけは許してくれ、おとなしく謹んで寢るから』ハ、、、しかし裾の方で寢相が悪くツちやア坊が驚いて目を覺すからだ、それくらゐの辛抱はしろ、この寒中の夜深に叩き出されて凍えもせず、屋の棟の下で無事に寢られりやア結構だ、ありがたく思へ』ハ、、、その實は坊が驚いて目を覺すの恐るるにあらず、あやまって細君を驚かすの事あらむかと』ば馬鹿ツ、早く寢ろ』

其二

だしぬけの退去命令に根岸の奥より追ひ出され、霜の夜途を草臥れ歩いて弱り果てたる後、夫婦が枕を並べし夜具の裾に毛布を被って藻漕り込みしのみか、山門の丸柱に等しき上田が大力の脚に胸中を挿まれて、流石の横著漢ぐうの音も出さず其まゝ曉まで一睡も得せず、をりゝ加之も横槌のやうなる重き踵を胸邊に載せらるゝ苦しきまぎれ、東天の鴉の聲を聞くや否、飛び起きて勝手覺えし臺所へ逃げ込み、がたゝと何やら俄の物音に、妻のお清まづ驚いて起き出でつゝ差覗けば、片手に水甕の柄杓を持って立往生の黒田おもはず苦笑ひしながら、『やア細君お早う、前夜は失敬しました、時に嗽水盥は何處にあるんですかねエ』おやまア黒田さん、いつにないこと何故かう今朝に限って、お早インですか、も少し寢て在らッしやれば宜しいに、貴方まだ火も何も出来て在ませんもの』いや火も何も入りません、どういふ

もんか前夜は何だか變に妙な工合で、ハ、、、少しも寢られなかつたからですよ、まだ上田は覺めませんなかな』「ホ、、、實は貴方、お氣の毒でね、勿論以前に貴方が在らっしゃる時分の夜具は解いて仕舞ッてさ、其まゝ御存じの通り引き續いての貧乏世帯で別に用意も御坐いませんが、なアに都合して敷き直せば、どうか斯うか一人分は出来るんです、それぢやア却ッて黒田のためにならないッて貴方、良人が無理にね、あゝいふ御不自由を、お氣の毒で妾は夜中、碌に睡られないんですもの、相變らず頑固な變人ですから困りますよ、あの氣性を御存じの貴方なにかは宜しう御坐いますが、さぞ寒くッて窮屈で御難儀をなさいましたらう』「ハ、、、何だか妙に生暖かい毛脛で夜中絞め付けられて居たんですから、別に寒くはなかつたですが、をり／＼痛くッてね、よほど心得て用心しないと危険ですよ、第一あの力ですもの、いやはや實のところは閉口、寒中の野宿も遣ッて見た事はありますが、前夜よ

り安心して寢られるから却ッて樂です、ハ、、、』「全く濟みませんでしたね、その代り今朝の御飯に何か妾が御馳走いたしませう』「いや、別に御馳走は恐れ入りますよ、なアに構はずに置いて下さい、どこの方角へ立廻ッても此ごろは無勢力の食客的ですから、もはや腹の蟲が粗食に馴れて仕舞ッたです、しかし久しぶりで折角の思召を無にするも何となく、ぢやア手数のかゝらなくッて滋養になる生鶏卵でも戴きませうかね、炊立の飯に味噌汁に乃至また焼海苔に添へても、ちよいと朝の腹加減に乙なモンですからなア』
をりしも寢床のうちより破鐘の如き上田が聲、「おいこら黒田貴様そこで何を饒舌ッてるんだ朝飯なンぞア喰はなくッても宜いぞ、前夜の約束、今朝は早く川上に先を越されないうち根岸へ出掛ける筈だ、まして腹加減が宜くなると氣が無精になッて動けないのが貴様の癖だから、そのまゝ水で面を洗ッて直に出掛ける仕度しろ、乃公も起きて此まゝ行くぞ、おい清、

うかく其奴に構つてちやア不可ンよ、それ坊が眼を覺した早く来てやれ、あれ泣き出し、
 ぜ、早く、夜中に叩き出されの食客的分際で前夜の寢工合が悪かつたの朝の生鶏卵が滋
 養で乙だのと、けしからん事をいふ奴だ勿體ない、さア乃公も起きたぞ、また出掛けた途中
 で腹が減つて歩けないの人車など、贅澤千萬な事を吐して見ろ』
 中間に立って妻のお清は眉うち顰めつゝ氣の毒けに堪へ兼ねたる體、黒田は水甕の柄杓を片
 手に持つたるまゝ思はず首を縮めて聲なく笑ひぬ、されど嬉しくて笑ひしにあらす満面に物
 の哀れを催して半泣きの苦笑ひ、下手な畫工が描き損ねたる貧乏戎に似たり、

四通八達の巷に田舎芝居の大道具めいたる張り抜き山の山を築き上げむとするもの、都下百萬
 の耳を貫いて手細工の法螺貝を吹き立てむとするもの、十年苦學の曉よりも一夜の巧言令色

に依つて身を立て、百年先見の明よりも一瞬の輕薄詔諛に依つて家を起し、いづれも白日晴
 天の下に百鬼横行の快を見て羨む世の中なれど、また殊更に眼前の功名利達を捨て、車馬の
 通はざる片蔭の草叢に閉ぢ籠りつゝ、わざと世に反き人に反いて三年讀書の一寒生たる倉橋
 幸藏そもく愚か狂か、我みづから我愚を守りて斜めに當世を見渡しつゝいふ、到るところ
 智者と才子と鼻突き合はして日夜絶え間なく争ふ今日の社會に最後の勝利を占むるものは誰
 ぞ、三年の後に門を出で、智慧負の馬鹿勝なる滑稽を演ずるも亦一快事として、靜なること石
 の如く冷かなること水の如し、

しかも此石や頑として固く大象を繋ぐの美人が黒髪にも曳かれず、しかも此水や寂として寒
 く春風こゝに吹き送る落花の情にも流れず、出で、は當世に馳驅するの境涯また取るに容易
 の身を持ちながら、手織木綿の羽織袴に日和下駄からころと響かせ、入つては一家團樂の快

樂たのしみまた早く迎むかふべき身みを持ちながら三十五歳さんじゅうごさいの今いまなほ寂然せきぜんたる一書生しよせい、此奴こいつこのまゝ死しんで仕舞しまへば聊いささか哀あはれなりとて、倉橋幸藏くらはしきうざうをりく庭にはの夕陽ゆふひに我影わがかげを顧かへりみて人ひとしれず微笑えいみを含ふくみぬ、

汐入村しほいりむらの古巢ふるすを出いで、筆ふでを執とれば忽たちまち噴き々くたる新聞記者しんぶんきしやの名なを唄うたはれ、その筆ふでと名なとを捨すて官海くわんかいに入いれば忽たちまち前途多望ぜんとたぼうをもて稱しやうせられながら、また官くわんを去きつて根岸ねぎしの奥おくの此草庵このくさあんに三年讀書ねんとくしよの一寒生かんせいとなりし心こころのうち、既すでに取るの易やすきを知しつて更さらに大おほいに取とらむがための用意ようい、既すでに與くみし易やすきを知しつて更さらに大おほいに戦たたかはむがための籠城ろうじやう、一度ひとたびすでに伸のびて屈くつするは、更さらに屈くつして再び伸のびむがための今いまこゝに、そもく何物なにものの襲おそひ來きたりて我觀念わがくわんねんの定坐ぢやうざを窺うかがはむとぞする、社會しやくわいの名利めいりか、外ほかは勇ゆうにして内うちは怯けふなる當世たうせいの才子さいしを學まなばざれば眼前がんぜんの功名利達こうみやうりたつに迫せまら

れて狂奔きやうほんするの煩勞わづらひなく、浮世うきよの貧ひんか、門外もんがい一時いちじの華奢くわしやに誇ほこりて一家朝夕かてうせきの生計せいけいに苦くるむ今日こんに日の策士さくしを學まなばざれば人ひとしれぬ涙なみだを呑のんで卑いやしき黄金わうこんの前に屈くつするの憂患うれひなく、三年讀書ねんとくしよの資力しりきと三年籠居ねんろくきよの米鹽まいえんとを貯たくへて身みも心こころも一日いちにちは一日いちにちの長ちやうを加くはへつゝ、いはゆる慌あわてずして歩あゆみ走はしらずして急いそがむとする我われには、軒のきを渡わたる木枯こがらしの淋さびしさも微妙びまうの音樂おんがくとなり、窓まどを叩たたく夜よるの雨あめも故人こじんの訪とひ來くるが如ごとく、一穗いっすゐの燈下とうかに書しよを讀よんで得意とくいの時ときは理想りきやうの帝王ていわうとなり、東しの天のの鴉からすに誘さそはれて曉あかつきの枕まくらを歛そはつる時は無邪氣むじやきの小兒せうにとなり、食後しょくごの散步さんぽに庭にはを歩あゆみながら垣かきを隔へだて、一步いっほの門外もんがいを見る時ときには、おもむろに今日こんにちの社會しやくわいを睥睨へいげいして乃公だいこうこゝにあるを知らずやの概がいあり、

されど惡魔あくまの私語しごくが如ごとく今いまこの倉橋幸藏くらはしきうざうをして人ひとしれず心に怖おそれしむるものは、色香いろかも深ふかき情なさけの露つゆを運びくる戀こひの綾子嬢あやこじやうなり、また飼猫かひねこの惡洒落わるじやれに狂くるふが如ごとく今いまこの倉橋幸藏くらはしきうざうをして

思はず耳を掩ひ眉を擧めしむるものは、づうづうしき野面のツペりと追へども拂へども始末に終へぬ食客的の黒田健次なり、彼は油の如く流れ來りて拭ふに易からず、これは藕の如く粘り著いて去るに難し、

身に餘る情の露と思へば嬉しからぬにあらねど、我前途を思へば強ひて迎ふるに足らざるの戀、此ま、清く穩かに其人に返さむとせし計畫も、例の黒田が入らざる差出口に破られたる立腹まぎれ、大喝一聲の下に追ひ出せしまゝ、ゆうべ一夜は流石に善後策の思案とり、まどろみもせぬ今朝は入さらに早く起き出でつゝ、やうく夜具を疊み書齋を掃うて机に對ひながら、新聞を手に取るも何とやら面白からぬ折しも、はや濱町よりの川上三吉が訪ひ來りぬ、

「やア遠路わざわざ、しかも大變に早く來てくれたね、僕はやうく今、起きたばかりさ、おい婆や火が出來たら直にね、湯が湧いたら兎も角も茶を出してくれよ」「いや構はないでも宜い、時に黒田の馬鹿奴、とんでもない事をして仕舞ったな、どうも彼奴の猪鼻助には困るよ、いよく叩き出したかね前夜」「全く困りもんだよ彼奴は、人の事でも何でも例の自己が馬鹿一流の突飛漢で、くだらない餘計な眞似をするから實に迷惑だ、思ひもよらぬ意外な間違ひを仕出來すからね、盗賊猫を飼つてると一般、油断も寸隙もなる奴ぢやアない」「しかし流石の横著物も、よくく悪いと思へばこそ、夜の夜中に追ひ出されて君、すごく出て往ったんだぜ、ハ、ハ、ハ、その時の顔が見たかッたね、また上田でも叩き起して、さんざ自分勝手の不平を並べながら饒舌り草臥れて寢込んだのだらう、どこへ往つても迷惑をかける奴だ」「いや多少は悪いと思つたらうが、例の屁理窟を並べて彼奴、なか／＼容易に出ない

で困ったよ、しかし前夜は僕も全く腹が立ったから、何と言っても聞かない、とうとう追ひ出してやっただ、なるほど前夜は定めし上田が迷惑したらう、ところで君、差當つての善後策だ、どうしたもんだらうね、まづ君の意見を聞きたいと思つて、實は今朝、待ち兼ねて居つたのさ』『いや別段、僕に意見も何も無いがね、兎も角このまゝ捨て、置く譯にはゆくまい、つまり先方の感觸を害せないやうに再び出直しの策を講じて矢張り飽くまで君が初志を貫くか、但しまた今この境遇と前途の目的とに差支のないかぎり、ねえ君、いはゞ君に對うて堪へ難き情緒纏綿の芳心だもの、あらためて心機一轉、寧ろ歡迎するか、以上兩様の外に論のないこつた、取捨は固より君の勝手次第、しかし奇だよ、ねえ僕が君の代理として感謝的敬遠策に出掛けむとするところへ、一步を先んじて先方の使者が遣つて來るた實に奇だぜ、しかも其間に黒田の如き突飛な奴があつて餘計な業を仕出來した結果、先方では既に事なれ

りといふ扑舞雀躍、此方では南無三寶と聊か閉口狼狽の體、かの嘘から出た誠と一般の理で、こりやア物の間違ひから出來上る自然の縁で人力の外に於ける一種の約束事かも知れないぜハ、ハ、ハ、ハ、どうだ意を翻して迎へちやア、しかし殊更に所信を枉けて人事の大切を輕々しく決するにも及ばない、もし猶いまだ君が心に嫌焉たらば、敢て辭せないよ、僕が眼前の迷惑や多少の面倒を排して再び出掛けるぐらゐのこたア、すぐ今日これからでも使者に立つさ』『なるほど、いや有難い、有難いがね、やはり僕は此ところ無情漢となつて當世の才子肌に冷笑せらるゝ決心だ、實は前夜も寝ながら自問自答、いろくゝに考へてみたがね、結果、然ゆるが如き情は氷の如き理に負けて仕舞つたよ、いづれ迎ふべき妻で、その妻なるものに對する注文も寧ろ世間の人よりは簡易に思つてる僕が、あの才色を以て不足とする筈はない、また其父の大臣たるがため他日我前途に便宜幸運を喜ぶやうな卑怯賤劣な氣もない代り、ま

た其父の大臣たるがため他日我手腕に幾何の眞價を殺がるゝかといふ、そんな穿ち過ぎた窮屈千萬な料簡も持たない、たゞ今日の都合土かの嬢を迎へられないんだ、つまり彼嬢のために三年讀書の此草庵を捨てる事が出来ない、否、捨てずとも其まゝで宜い三年の後を清く楽しく待つといふだらうが、黒田が失策の結果、現に待つと誓つて来たが、歐洲的教育を受けて大臣の娘に育ち加之も伶俐にして才女にして交際場裡の華とまで稱せらるゝ嬢が、果して三年この草叢に閉居せる一寒生を清く潔く守り得らるゝや否、その保證は彼嬢を生んだ親にあらず彼嬢を彩れる才色にもあらずして、たゞ彼嬢に宿れる一點の心にあるんだ、ね君、ところで彼嬢に宿れる一點の心なるものを保證に立て、三年の我意を安んずる程までに僕の戀愛は進んで居ない、また更に言を換へていは、倉橋幸藏こゝに交際場裡の華と稱せらる大臣の娘に三年の後に清く潔く待たしむるだけの名望地位はまだ來らず、固より天生の風

采もなく監督の面倒も出來ず手数の違もない、既に夫婦となつて生別死別ともに寡居の操を守る女はあるが、いまだ伉儷の實をあげずして交際場裡の華に三年の操を守るは小説か淨瑠璃の文句にあるばかり、今日の事實として多くないやうだ、もし誤つて其間に何等かの云々あれば、我あるがため彼嬢に傷つけ、彼嬢あるがため我品位を損するの恐れありだ、つまり僕は今日の人、いや今日の社會から産み出されたる戀なるものに信を置き得ない、まして一時の新聞紙上に誤られて一片の意地から湧いて出たやうな根柢の薄弱なる戀には猶更ら信を置き難い、既に信ぜざる戀のために他を縛し我を縛せらるゝが如きは自ら求めて荆棘を潛ると一般、實に馬鹿けてるからなア、ハ、ハ、ハ、理窟を言へば君、さつと先づ斯の如しだよ、僕が草稿中の某女へ與へし一文、いづれに往くも約せざる戀は清し、乞ふ我ために空しく三年の色香を費す勿れといふ文字の意味も亦こゝだよ、さるを黒田の如き生嚙りの猪鼻助奴が、

「一見みだりに自己が早合點で、竟に斯んな失策を仕出來すから閉口するよ、ハ、ハ、ハ、ハ、」
「いや實に君の君たるどころだ、ちやア矢張り更めて感謝的の敬遠策に出直すとせう、しかし君、
一應こゝは君に念を押すが、もし先方で君が信を置けるだけの條件を具備して出たら君、ど
うする、黒田の失策ない以前なら、たゞ僕とした朦朧的の敬遠主義で遁け出しても濟まうが
ね、既に先方ちやア半以上の目的を達した料簡で在るんだから、もし悪く取れば翻弄された
やうに思ふところだから、その意に應じられない理由として多少の君が持論を吐かなけりや
アならん、しかし君が持論に寧ろ却つて先方の感歎を求むる道理で、いよく敬慕の念を増
し戀愛の熱度を高めて竟に戀の犠牲となるの覺悟で、嫌でなければ貰うて下さい、疑はしく
ば疑ひの晴れる注文をして下さいといふ理窟、もし大業にいへば少々古風だが死ぬとまで出
られた時は君、どうする、いはゆる彼嬢の戀に信を置くだけの要求條件を持ち出さねばなる

まい、もはや今日の場合、たゞ單に嫌だ不可ぢやア濟むまいよ、どうだね倉橋、また此まゝ
捨て、置いては君が是認したになるから、せめて出來ない無理な注文でも拵へて行かざアな
るまい」
「實は川上、實のところね川上、こりやア今まで夢にも考へなかつた事だが、前夜、
黒田奴が失策の善後策に就いて、一睡もせず千思萬考の曉、その注文を、いはゆる要求條
件を備へて見たよ、しかし其注文がね、僕の今、君に陳べた議論も主義も其要求のためにせ
しが如き結果となつて、かの凡俗の輕薄才子に等しい觀があるから頗る躊躇してゐるのさ、そ
こで僕は此事に就いて第一義と第二義とを備へて君に託したい、つまり第一義は初志を貫く
敬遠策の實行で、第二義は要求條件で、いはゞ已むを得ざる義理人情に迫られて避くべから
ざる場合を巧みに利用せむとするもの、ちと言ひ悪いが打明さうかね」
「ハ、ハ、ハ、ハ、何だよ
今更、僕に對して、倉橋幸藏が川上三吉に對して打明すも明さないもあるものか、言へよ、

言ッて仕舞へ」「川上、願はくば根岸の奥の草深い此讀書室を歐羅巴の中央へ移して欲しい、
 金だ、金が欲しい、少くとも五萬圓」「や、出来た倉橋、面白い、實は僕の考案と一致だ、
 前夜その邊の事を考へて今朝こゝへ説きに來たところだ、しかし餘り君が議論の堂々たるに
 避易して差控へて居つたのさ、更に一步を進めて第一義と第二義の前後を轉じろ、思ひきッ
 て遣れ、肉體の交をなさざれば、事實に於て彼も清し我も清し、有名無實の戀が三年五年のう
 ちに君、どうなつても宜いぢやアないか、たとひ間違つて他へ嫁くにしたところが、萬里の
 波濤を越えて君に何の不面目やある、よし不面目とするも名あつて實なき不面目を五萬圓た
 ア面白いぜ、さのみ損はないぜ、もしまた君が學なり業を遂げて歸朝の曉、彼嬢が戀の神聖
 を保ちて嬉しさの涙と共に埠頭に迎へ出た時は、君また満身の愛を捧けて生涯友白髮の伉儷
 を契るべしだ、事に於て理に於て何の疚しきところやある、案を拍つて決せよ、移すべし大

に移すべし、車馬の音響も遠く垣根に野狐の糞やあるかと疑ふ此草庵を歐羅巴の中央に轉宅
 さすたア實に快だ、よく言つた、その五萬圓を乃公が掴んで來る、みごと必ず取つて來る」
 『いや君なればこそ、この倉橋を戀と慾との兩道かけたる俗流の賤奴と見ずして、その一言、
 知己とは眞實これを言ふんだ、新聞記者となり官吏となつて社會に鼎の輕重を問ふの傍ら三
 年讀書の資力を貯へたのも、理は同じこつた、しかも五萬圓、もし我に得らるゝ曉は其うち
 の二萬圓を兎も角も彼嬢の衣食料として舊の穴に返し、別に一萬圓を三分して、あの哀れな
 る上田夫婦がため、あの横著なる黒田奴がため、あの孜々たる眼學の吉田がため、おのゝ願
 けてやつた後、残る二萬圓が實に僕の資料、これを君に託して置いて五年間おもふまゝの修
 業がしてみたいよ、しかし此要求にして遂げざるも亦、可なりだ、敢て乞ふの意にあらず、
 此まゝ野狐の糞に伴うて三年の讀書なほかつ出で、戦ふに足る覺悟だからね君』「なるほど、

いよく、倉橋なりけりだ、周到緻密、五萬金のうち二萬金を返して他日かの嬢に文句なからしめ、別に一萬金を三分するに至っては實に君だよ、しかし事こゝに決した以上は寧ろ急ぐに及ばない、あくまで慎重の態度を取って悠々と出掛けよう、ところで彼嬢から送って来たといふ手紙とダイヤモンドの指環は僕が預らう、かつまた此一件は成就するまで黒田の奴には猶更の事、便宜上、あの上田にも秘して置く方が宜からう、質朴剛直なる天性、餘計な心配さすばかりか或は單純な頭腦で眉を擧めるかも知れない』實際だ、ちやア君と僕との外、天機を漏らすべからずと仕て置かう、しかし此秘密を黒田の奴が知ったら、どうだらうな、それこそ彼奴、まるで狂氣だぜ、さア何故この乃公を夜の夜中に叩き出した、乃公が臨機應變の智を以て中間に策を施せばこそ事こゝに至ったのだから、勘くとも五萬兩の半分は乃公の分だ、天下いづれかコンミッションのあらざるところなしの勢ひで箭も楯も堪るまいぜ、ハ

ハ、ハ、ハ、『いや眞實だ、あんまり狂氣じみた空騒動で、ぶち毀すに相違ないね彼奴は、ハ、ハ、ハ、時に上田が來さうなもんだね、黒田め何を吐いたか知らないが君に對して其言を信する筈がないから、上田の性として今朝は早く是非とも何とか、しかし流石の横著漢も夜の夜中に妻子のある上田を叩き兼ねて、あの吉田が本郷の下宿屋へでも押し掛けたかな、もしそれだと君、何とかして呼び戻さないぢやア不可ね、あの野郎、吉田の小心翼々として年少後輩の與みし易きに乗じ、いかなる我まゝを働いて迷惑かけるか知れたもんでない、第一が吉田に黒田は親しく交らしたくない、同じ正直一片でも上田は黒田を眼中に置かずして頭上ごなしに遣ッつけるし、悪く動けば片手で捻ぢ伏せるが、まさか吉田は彼奴に對して、さうは出來ないからね』いや、しかし上田の方だらう、實は其邊の恐れもあつて氣が付いたからね、追ひ出す時、どっちが悪いか上田に聞いてみると殊更に吐鳴ッてやツたよ、ハ、ハ、ハ、

ハ』『萬事の周到、全く君の性だ』

例の飯炊婆が汲み出せし番茶を飲んで、膝を交へ額を鳩めつ、時に私語低聲、また談笑呵々互に打解けて何の隔意もなく語る折しも、上田力、果して山の如き兩肩を動かして悠々と入り来りぬ、

『やア濱町から早いこつたね、時に今日は主人公へ聊か願意の筋があつて来たのさ、實のところ川上と宇治川の先登を争ふ心算で出掛けたんだが南無三寶、竟に後れて梶原となりけりだ、ハ、、、、』『この川上を佐々木として、ハ、ア黒田のために来たんだな』『何だね僕に願意の筋とは、やはり黒田のために君、食客的の逆戻り談判を持ち込んて来たらしいね、しかし前夜は定めし迷惑したらう、なアに追ひ出せば必ず君の迷惑になる事と思つたがね、あまり彼奴の所爲が不埒千萬で、實に僕も堪へられなかつたからさ、いづれ今朝は君が何と

か彼がために来るだらう、来れば幸ひ』『しッ、しッ、實ア連れて来たんだ、しかし流石に少々閉口したと見えて、そツと忍んで臺所へ逃げ込んてるから、あまり大きな聲で君、そんな甘い言葉を聞くと彼奴また俄に勢ひを得るよ、つまり今日は兩兄うち揃つた面前で徹頭徹尾ぎうぐいさはさないと不可ん、僕は前夜さうさ苛めて置いたから先づ今朝は仲裁人の格だ』『ちやア倉橋、すぐ此席へ引き出して僕と共に左右から火撃に仕てやらうちやないか、汐人村の昔なら一時間も蒲團蒸の刑に行うて二日ぐらゐの斷食に處する奴だが、互に、ハ、、、誰も他人が居るでなし思ひきつて罵詈謗、あらゆる隙もなく彼奴を罵倒するのさ、つまり宜い加減のところの上甘、黒田め腕力沙汰で暴れる奴なら却つて始末は宜いが、いつく八文字に開いて毒を吐く奴だから寧ろ困るよ、今日』

暴を制するの流で、まづ僕が先登第一に舌戦を試みて

だね、やはり今日の挨拶人兼護送者たる上田に引き摺り

らず當分まづ黒田の事に就いては萬事、面倒の起る毎に上田の

も上田には別して特殊の恩義あるのみならず、いざといふ時、彼が

制御するより外はないから、幸ひの怪力で、いはゆる目に物みせるには頗る

倉橋、ハ、ハ、ハ、ハ、『ハ、ハ、ハ、ハ、さう彼奴を僕一人の責任にされちやア困るよ、しかし兎も角

こゝへ連れ出さう、いやはや厄介な奴だわい』

倉橋と川上と上田の三人が書齋に膝を交へつゝ、をりく何をか頻りに高笑ひの聞ゆるは、

いづれ我身の上と思へども、例の黒田が蛙の面に馬の耳、石地藏の頭を蚊の螫すほどにも感

ぜず、たゞ眼前の身に徹へて堪へ難く感ずるは、ゆうべ一夜を胸挿みの責苦に達はされて苦

しまぎれに飛び起きつゝ、久しぶりの生鶏卵に有り付かむとせし間一髪を吐鳴られ、朝飯も喰

はずに兩國より此家まで上田の大腿に飛ぶが如く引き摺られしかば、半泣きの澁面に空腹を

抱へて臺所の隅に蹲踞りながら、底光りの眼を据ゑて飯炊婆に對ひつゝ、『おい婆さん、とも

かく乃公に何か喰はしてくれないか、實は前夜あの喧嘩で夕飯も喰はずに飛び出したまゝ今

朝また都合が悪くツてね、しかも一夜まじりともせず前後二度とも喰ひ外れて往返三四里

の草臥れ儲け、ハ、ハ、ハ、ハ、少々閉口の體だ、時と場合で仕方がない冷飯の茶漬でも堪忍する

から』『ホ、ハ、ハ、ハ、しかし貴方、まだ旦那様さへ今朝は御飯を召上りませんから』『宜いちや

アないか、倉橋が喰はなくツたツて、何も倉橋より乃公が前に喰へない理窟がなからう、あ

の三人の奴等ア自分の勝手に時刻を外して喰はないんだ、乃公は時刻を外さず喰はうと思ツ

て喰ひ損ツたから氣の毒だと思へよ、さア婆さん、すぐに出してくれ飢ゑたるものは食を擇

ばすだ何でも宜い』『だッて貴方、前夜の今朝で御坐いますから、いやに更ッよ事を申すやうですが、旦那様からの御一言ないうちは奉公人の料簡に計ひかねます』『何だ、倉橋の一言ないうちは喰はさないといふんか、ハ、ア乃公を世間一般の所謂の食客的、行き場所のない叩き出されの舞ひ戻りと見たな、おい婆、人間浮世の定命を越えた宜い年を仕ッて汝、そんな料簡ちやア逆も無効だ死際は宜くないぞ、そもく乃公の倉橋に於ける關係は主客いづれにあるか一朝一夕の故でない、實は置いて貰ッたんでない來て遣ッたんだ、前夜の如きも追ひ出されたんでなく、此方から尻に帆かけて忽然おん出て遣ッたんだ、しかし其ま、ちやア物事に角が立ッて倉橋が心配するから兎も角、もとの鞘に治ッてくれといふ上田や川上が挨拶で、やうく意を枉けて戻ッて來たんだぞ、現に今あの書齋で三人の奴が談話も將來あらためて倉橋が乃公に對する待遇の相談最中だ、然るに汝こそ行き場所のない召使ひの分際で

乃公の一飯を躊躇するたア奇怪千萬けしからんこッた、さア出せ、強ひて掛まば臺所の瓦落くた道具を片ッ端から叩き毀すぞ』『ホ、ホ、ホ、いえ前夜あんまり旦那様に對して憎らしい事を仰しやツたから、ちよいと御主人のため復仇を仕てあげたんですよ、世間普通の御厄介でない事は存じて居りますさ、さア召上れ、しかし黒田さん、貴方のやうな御立派な方が朝御飯の出す出さないで居直り強盜の恐喝文句に似た事を仰しやるかと思へば、何だか妙に寛れッほくて、おいとしう御坐いますよ、さア御遠慮なく存分に召上れ、もし貴方が婆の子でもあれば泣くところですよ、ホ、ホ、ホ、』『え、馬鹿、いやな事を吐すない、瓜の蔓には瓜だ、かりにも恐れ多い汝のやうな俗腹に乃公のやうな男が宿ッて堪るか、また古今東西の豪傑も英雄も腹の減る時は減るに極ッたもんだ、登山の釋迦は修業の傍ら牧畜を營んで牛の乳を呑み面壁の達磨には竊に蛇の蒲焼を運ぶ弟子があッて九年の觀念を遂けたといふこッた、し

かし婆さん空腹の膳に對うて小言をいふでもないが、今日の味噌汁は嫌に上澄みがして平生より薄いやうだぜ、煮過ぎた葱が水底の亂抗に等しく横たはつて申譯の味噌汁が僅に濁れる體、鮎か鯉が釣れさうだな、朝の汁は宿屋の儀式的にあらず、全體また味噌といふ奴は腹に溜つて飯を助けるから寧ろ濃くする方が經濟だぜ』『ホ、、、よくまア、いちく、貴方のやうに理窟が言へますことね、お氣に召さずば、お止しなさいよ』『いや喰ふ、是でも空腹にやア不味くない、二等米の飯が最上飛び切りの鮮米に等しだ、ハ、、、時に三人の奴等アぐづく何を饒舌つてるか、いづれも悟道の開けない野暮漢だから困るよ、大聲は里耳に入らず、定めし乃公を悪く吐してゐるんだらう、横槌に目鼻を付けて驚き挿槌に耳を生して立騒ぐ人間は談せないよ、ねエ婆さん、とかく油斷のならない世の中なもの、乃公なんかア平生の度胸が据つてるから、庭の石燈籠が不意に手を出して招かうが、鬨が舌を出して足の裏を

舐めようが、悠々寛々びくともする男でないさ、ハ、、、』『おやく、まるで化物屋敷の講釋を聞くやうで御坐いますね』『化物さ、今の夜の中ア化物の寄合だ、どこに當然の人間らしい奴が居るものか、天下いたるところ皆これ怪だ、婆さんなかも花を欺く昔の姿が化けたのさ、あの倉橋の如きは石地藏の化けたので、川上は鰻の天上し損つた奴、上田は其母が曾て奈良の大佛に臍の穴を舐められたと夢みて、あつと驚く拍子に孕んだから、あの通り無様な滑稽的に馬鹿大きく出來たのさ、乃公か、乃公は某年某月某日の曉、天の一方に微妙の音楽が聞ゆると共に生れたから、こんなに優しく高尚で加之も割合に陽氣の性を含んでるのさ、ハ、、、』

をりしも背後に大喝一聲、この馬鹿野郎と叫ぶ聲に驚いて振り返れば、奥の書齋にありと思ひの外の上田力、のツそりと山の如く立ちぬ、『此奴め何だ、ぶうくしく平氣で飯なんか喰

ツて、さア奥へ来い、三人で貴様に言ふ事があるから」『やア失敬々々、今すぐに行くよ、あ
ンまり君、腹が減り過ぎちやア身の毒だと思つてね、ハ、ハ、ハ、もう一椀で仕舞だから、す
ぐに罷り出るよ』『やア失敬もないもんだ、貴様のこつて三人が心配してるに、飯も宜いが石
地藏だの饅頭の化けたのと、奈良の大佛に臍の穴を舐められて誰が出来たんだ、此猪鼻助め、微
妙の音楽に連れて優しく高尚に生れたなんて、よくまア氣恥かしくもなく吐すよ此奴』『ハ
ハ、ハ、聞いて在たンかい、そいつア少々まるツたな、しかし石地藏は萬事に手固い男、饅
頭は喰ひ占めて美味のある男、まして奈良の大佛は天下の名物男と稱揚した眞意さ、豈敢て友
を讒するの我ならむやだ、ねエ婆さん汝が證人だらう』『馬鹿、どうでも宜いから早く来い、
けふは倉橋だつて川上だつて貴様また平生の流で横著に出ると不可ンぞ、川上は借置き、僕
は兎も角、よほど倉橋は怒つてるから、實際、もう黒田とは十餘來來の情誼を捨て、絶交す

るとまで決心して居つたのを、やうく我々二人が辨解的に説いたところだ、うかくする
と生涯また再び得べからざる益友を失つて仕舞ふぜ宜いか、あとで後悔しても無効だぞ』『そ
りやア聊か驚いたね、眞實か君、ぢやア俗間の小人原と一般、そツと忍んで立聞きでも仕て
やる筈だつたに、光風霽月さらに君等を疑はずして赤子の慈母に於けるが如きで在たなア失
策だつた、をりく僕は餘り罪が無さ過ぎて困るよ、將來は力めて嫉妬偏執猜忌、なるべ
く女々しく振舞うて執念深く疑ひ、以て刎頸の友に對する猶かつ敵に對するが如く要害堅固
たるべしだ、あ、已んぬる哉、嗚呼なさないかな、もはや一個人の食客的を脱して更に大
に社會の食客的たるべき時節到來だ、ねエ君、倉橋が斷然さういふ決心、たとひ君等が辨解
に依つて僅に實行せずと雖も、彼にして一旦その心あらば僕また殊更に意を枉けて屈しない
から、思ふだけの事を言つた上、あらためて出すなら出す、出るなら出ると男らしく決しよ

う」「え、今更ら引かれもの、小唄めいた事を吐すに及ばない、早く来い、しかし今日は乃公に對しても倉橋の手前、くだらない屁理窟を並べると聞かンぞ」「君に對しては並べないさ、しかし倉橋の手前、もはや遠慮すべき場合でないからねエ」「どうも困った奴だな此奴は、あゝいへば斯ういふと腸が逆に糾れて根性魂が横に曲ッてる奴だから」

流石の上田も呆れて其顔じツと見詰めしまゝ、持て餘して立往生の折しも川上三吉また來りて斯くと聞くや否、冷かなる微笑を浮かべながら黒田の頭上より見下しぬ、「おい、上田、いち、此奴のいふ事を正當に受けて居ちやア不可ンよ、こりやア君、咽喉の調子で絶えず無意味の熱を吹く一種の蓄音器だよ、言論不用だ、幸ひ君の大力で首ツ玉のところ、ちよいと手輕に捻んで往ッてくれ、汚れた襦袢と猫と横著野郎は捻み出すに限るよ、ぐづく言葉を交へると面倒だ」「ちやア川上、聊か可哀さうだが捻み出さうかね、どうだ黒田、少しやア痛

いかも知れないぜ」「えッ止せ、ふざけるない、行くよ、無事に歩める脚が二本も揃ッてるんだ馬鹿々々しい、とかく何事に付けても乃公ばかりを餘計な厄介視するから、をりく癪に觸ッて知れきつた事でも態と文句を並べてやるんだ」「ハ、、、こいつア呵しい、よほど自分ちやア厄介視されざる要素を備へてる覺悟だね、しかし不幸にして我々の見るところ、どうしても君を無くて叶はぬ必要の人間たア思へないよ、ハ、、、」「ところが何ぞ知らむ、づうぐしき鐵面、蓄音器に似たる駄辯、呆れ返る横著、度し難い素根性、始末に終へぬ難物、餘計な厄介者、入らざる猪鼻助、此奴この馬鹿野郎など、君等が常に僕を度外視して言ふところの罵詈雑言は、他日また事實の上より元利取揃へて返済の時機もあらうよ」「いや無利息にして置くから生涯のうちに元金だけ返してくれ、せめて半金でも宜いよ、ねエ上田しかし覺束ないもんだな、この様子ちやア棺桶の中へ證文を巻いて入れざアなるまい、逆も

返して貰ふ見込がないぜ、相手が此先生だもの、ハ、、、、『いや言うたな、吐したね、よく言ツた、よく吐した、面白い、今の一言だけは川上、あらためて他人行儀だぜ、一場の坐談にやア仕ないぞ、おい上田、證人になツてくれ、宜いか川上』ハ、、、、願はくば君がため、今の一言をして無意味の坐興に了らしたくないね、どうか飽くまで他人行儀として忘れざらむことを祈るよ、兎角君は萬事を坐興がツて忘れたがツて困るさ、しかし死んだ貞節の島女が事を坐興がらす、まだ黒田健次といふ自己の名を忘れないのが感心だ』『や、いよ／＼啗くわい、畜生々々』『誰のこツた、僕を罵るの言か、將また君みづから君を稱するの言かね』『え、何とでも言へ、大物たまく、時あツて小物に譲るの奇あり、つまりは元利返濟の曉だ、ハツハツへツへ、、、、』『何だか不思議な妙な笑聲ぢやアないか、聊か人間を遠ざかつた鶴に類してゐるやうだぜ』『いや君の耳にやア、不思議に妙に物珍しく聞えるかも知れない、こり

やア時を得ざるの英傑が憤慨の情に餘ツて臍腑の底から絞り出す笑ひ聲だ、へツへツへツ、どうだ聞いた事がなからう、伯樂にあらすんば千里の駒の嘶きを知らず、ものゝ不思議と珍しさは多く無智と無識より来る、また鶴といふが鶴は我國に於て傳へ聞く源三位頼政の時代たゞ一度より出た事のないもんだ、その聲の凡鳥卑禽に類せずして俗人に怪しまるゝは當然さ、へツへツへツ』『おい上田、いよ／＼こりやア癡狂院もんだ、よほど間違ツてるよ、ハ、ハ、、さア早く捻み出さう、際限がない、倉橋が待ツてるだらう』『倉橋め、御大層に乃公を呼び付けて何事をか言はむとする、手なし坊の馬鹿殿様ぢやアあるまいし、猫の額のやうな家のうちで、わざ／＼君等二人を使者めかしてさ、滑稽の極、臍茶の至りだ、前夜この乃公を追ひ出してから絲目の切れた奴胤、ふは／＼と上ツたな、ハ、、、しかし、いかう、飯が濟んだら用のない臺所だ、此まゝ居れと言ツても居るもんか、お座敷へ出るのが當然の

御人體だ、さるを叨りに食食的待遇、實ア今まで喰ツた飯を吐き出せるもンかね、しかし上から吐かずとも下からの差引勘定、およそ其四分の一乃至五分の一ぐらゐは質を變へて髓に返濟してゐる心算だよ、何も丸ツきり僕が、ハ、、、』

其三

我ひとり人しれぬ片思ひの戀に亂れて惱みしころは、宛ら矢竹に早る初陣武者の戰場に對ふが如く、まして時めく大臣の令嬢として今年二十歳の曉、しかも交際場裡に馴れたる身は、元來の蓮葉ならねど心の習慣おのづから際立ちて絶え入るばかりの涙に打沈む風情もなく、をりくは根岸の奥に通うて讀書の窓を驚かせしかど、さて其人に送りし情の文も後證の梅環も其まゝ戀しき手より還らぬ今となりては、ほつと一息うれしさの餘りに却つて何とやら、さすがに顔うち守らるゝ心地して俄に恥かし、

されどまた闇の夜の梅が香、たゞ香のみ床しく身に染みくゝと戀ひわたりつゝ、いづこにありとも知らず迷ひし其人の心根を、けふは朧ながらも春の夜の月影、さては其處かと手に取る思ひ一入の懐しさに、氣も心も勇み立ちて俄に我身を振り返りぬ、もしや人に見られて問はるゝかと、あはれ今更に心弱し、

父は大臣中の有福者と稱せられ、其身は令嬢中の美人と囃されて、富貴權勢の家に生れ當世教育の文物に育ちつゝ、しかも才色兩全の名花といはるゝ身なれば、我から一人の戀に亂れずとも蝶蟻の甘きに寄り來る萬人の戀を見渡して、思ふがまゝ富も才も名も地位も男振さへ心のまゝの選取にすべき身を持ちながら、勳位爵祿の家に生れし幾多の美男を取らずして俗物の目を驚かす提燈に釣鐘の世諺、根岸の奥の草叢に傾く軒を宿として讀書の窓は野狐

てまだ、どれといふところもない、いはゆる世諺にいふ長し短しでの』『でも、お父様の思召では、官吏で御坐いますか、また實業家その他、どういふ方がお氣に召しませうか』『ハ、ハ、取るところの業は何でも構はない、また富の程度も一家を維持するに困るやうでは不都合が、ともかく和女の不幸は只その人物にあるこつた、たとひ學力と地位と財産とが揃つて居ても、人間に缺點があつては頼むに足らん、むしろ人間が満足でさへあれば學問と地位と財産とに多少の不足があつても宜いくらゐるだ、つまり今日までは世の中が不調子で、往々無學の馬鹿堅い奴が金を持つて當座に如才のない輕薄才子が地位を作るやうであつたが、もはや社會の風潮が一刷新の時代で、地位も財力も只その人物に應ずべき自然の調和時代が来たから、猶更ら以て能く其人間を選ばないと不可憚い』『生意氣な事を申すやうで御坐いますが、實は、妾も、さやうに存じて居ります』『さうなくては叶はない、ところで、それ

に就いての和女の其人はないかね』『はい、別に』『急ぐやうなものゝ外の事と違つて今が今差當り、和女の方になれば、乃公が其うち見立て、やらう、時に綾、をりく、和女は、あの倉橋のところへ往つたさうだな、根岸に居る倉橋幸藏よ』『はい、さう度々もまゐりませうが、あの新聞で、あんな事を書かれました時、お父様の御許容をうけて、また園遊會の後ほんの二三度ばかり』『どうだね、倉橋は、いつも何を仕て居る』『生活むき萬端その外も一切、すべて官吏をして居りました時分と違つて、全くの書生で、一所懸命に勉強いたして居るやうで御坐います、また、まゐりまする毎に、お父様の御恩を深く、妾にまで』『む、彼奴は當世の若手中で、なか／＼一種の氣概と主義とを持つた男だ、随分、前途に見込のある人間だが、惜しむらくは少々、ある一事に熱して、ある一物に傾き過ぎるやうだわい、事物に間違ひのない代り、いは、自己の主義に偏し易くて物を容るゝ量に乏しいかと思はれる邊もある、

しかし比較的まづ人物としては宜い方だらう、缺點のない方だらう、ねエ綾、和女は何と考へるな、腹藏なく言ツて見るが宜い』『ホ、、、、妾に、お父様、人物なぞといふ、むづかしい事の見える筈は御坐いませんが、もし、あの倉橋さんのやうな人に、相應の地位と財産が御坐いますれば、どうか斯うか、お父様の御意に召すかと存じまして』『いや乃公よりも和女の料簡を聞くのだ、今もいふ通り地位と財産とは人に依ツて生ずる別問題として、まづ倉橋の人間が和女の氣に入るか、どうかといふのさ』『いえ妾は、お父様さへ宜からうと仰しやれば』『別に乃公は倉橋を殊更に宜いともいはないが、暫く使ツて見て、その人物も知ツて居るのみならず、一朝あの官を抛ツて三年讀書の一寒生となつたところが少々、面白いかと思ふのさ、また彼新聞紙上で突然あんな意外の迷惑を蒙りながら、さらに平然として耳目の一端も動かさなかつた持重の態度は、當世の若手連中に多く得難いかと思はれるのさ、ところでも

し和女にさへ異存なくば一應、倉橋を呼んだ上で、ねエ綾、それとはなしに彼が意中を聞いて見ようかと考へて居るがな、しかし彼奴、妙な男で、官を罷めてからは一切あの園遊會後さらに來ないものを、わざと招いで此方から言ひ出すも變なもので、また彼奴どういふ返事をするか分らないからねエ』『しかし、お父様が直接お招きになれば、まるらない事は御坐いますまい、きつと、伺ひませうと存じます』『む、それでは兎も角も呼んで見よう、呼んだ上で、なほ彼が目的その他の事を委し、聞き取つた後、もし乃公が宜いと認めた以上は和女に異存なからうね、人間大切の事だから念を押して置くのだ』『決して妾に、お父様さへ思召に叶へば、どう致して、妾に異存が御坐いませう』『それでは五六日のうち、都合の宜い時を見て、ハ、、、、實はね、近來、諸方よりの申込中、乃公と同等の地位あるもの、子息で、一二軒から強ての所望するがね、既に出來上つた父の後を保たむとする男より、むし

る響めていへば草莽の遺器、もいふべき倉橋の如き奴を引き上げた方が面白いのみか、時勢にも適し世間へ對しても、第一は本人の和女が身に取つても行末のために宜からうと考へるのさ、あの倉橋を如何に見下しても、世に出れば必ず相應の地位を得て、また一家を安全に支持する事の出来ない男でないから、却つて將來に失ふの恐れあるものよりは確乎だらう、とにかく和女にさへ異存がなければ乃公に任して置くが宜い』『たゞ萬事お父様に、妾には、決して』『よし、時に倉橋は、たしか三十五だつたな』『さやうで御坐いますか、その邊は』『いや三十五だつたよ、しかし三十五の今日まで、當世の若手に似合はず、よく品行を保つて居つたばかりか、今後なほ暫く獨身で以て更に大に書を讀まうといふ志節、まづ珍しい男だ、たとひ多少の缺點があるにしても面白い男だ、すでに官を捨てた後の彼、よし其主義と目的とが乃公の意に満たなくつても、和女の良人として其目的と主義の差支ないかぎりは、

やはり彼は彼としての人物たるを失はざる道理だからね』『勿體ない、それほどまでの思召を承りました上は、お父様、もう妾は何も申し上げる事は御坐いませんから』『ハ、、、、よし、子のために生涯の幸福を祈る父だから安心して居れ』

おもひに餘りて送りし文も指環も、其まゝ戀しき人の手に宿りて我心の通ぜしのみか、父が言葉にも其人こそと思ひ給へる嬉しさに、今は霽れたる空に月みる心地して、胸にかゝれる雲もなし、

たとひ我を生み給ひし父の仰せなりとて、我身の生涯を託すべき品定めには、世間なみくの教育をうけし二十歳の今、よしや一時の御意に反くとも末長き一家の幸福を祈らむと、宛ら名を得たる弓取の剛弓を絞るが如く、こゝそ一期の大事と張り詰めし氣も心も、さては、

これかとばかり其的を鼻の前に突き付けられて射るべき箭もなく、あまりの嬉しさに夢うつつ、たゞ差俯いて俄に恥かしく、今更ながら斯くまで深き親の慈悲かと涙さしくみぬ、
 さても其夜の人なき闇に何をか思ひし、心や勇み胸や躍りて寝られぬまゝの終夜、をりしも降り出でし雨の音に誘はれて、憎や我を弄ぶかと思はず夜具の袖に隠れしが、身に餘る嬉しさの夢心地を眼前、曉までの枕と共に語りしか、やうく雨も已みて幽に軒端を渡る風さへも、戀や無常を我には吹き送らじと微笑みつゝ、起き出でし朝ほらけの美容は名筆の畫も及ばず、これや文士のいふなる美の神の化身かと疑はれぬ、

圓滿なる戀は瀨死の人にも生命を與へ、眞實なき戀は智徳の人の生命をも奪ふ、しかも心に遂けて身に遂げざる戀の一瞬は百年の娛樂に優り、身に遂けて後の心に遂げざる戀の百年は

一瞬の娛樂に劣る、

新婚の一夜前、貴賤ともに女は正にこれ愛の神なり、されど夫婦となりて後の女、いづれか愛の神ぞ、不幸にして多く世の諺これを暴れ出す山の神ともいふ、
 新婚の一夜前、賢愚ともに男は正にこれ情の宿なり、されど夫婦となりて後の男、いづれか情の宿ぞ、不幸にして多く世の諺これを雨漏る只の宿六ともいふ、
 されど身は一國の大臣が令嬢として才色兩全といはれたる綾子の戀や、百年に優る一瞬の娛樂を其まゝ長く保ちて、姫御前のあられもなく山の神と呼べる、恐れもなかるべく、これが情の宿たる倉橋幸藏また徒らに只の宿六ならずして、あはれ友白髪末まで戀の圓滿を伴ふべき幸福の男たるべきか、これを戀の神に問へど答へず、強ひて問へば夫婦となりて浮世に支配せらるゝ人間のあづかり知るべからざるところぞといふ、

これかとはかり其的を目鼻の前に突き付けられて射るべき箭もなく、あまりの嬉しさに夢うつ、たゞ差俯いて俄に恥かしく、今更ながら斯くまで深き親の慈悲かと涙さしぐみぬ、
 さても其夜の人なき闇に何をか思ひし、心や勇み胸や躍りて寢られぬまゝの終夜、をりしも降り出でし雨の音に誘はれて、憎や我を弄ぶかと思はず夜具の袖に隠れしが、身に餘る嬉しさの夢心地を眼前、曉までの枕と共に語りしか、やうく雨も己みて幽に軒端を渡る風さへも、戀や無常を我には吹き送らじと微笑みつゝ、起き出でし朝ほらけの美容は名筆の畫も及ばず、これや文士のいふなる美の神の化身かと疑はれぬ、

圓滿なる戀は瀕死の人にも生命を與へ、眞實なき戀は智徳の人の生命をも奪ふ、しかも心に遂けて身に遂げざる戀の一瞬は百年の娛樂に優り、身に遂けて後の心に遂げざる戀の百年は

一瞬の娛樂に劣る、

新婚の一夜前、貴賤ともに女は正にこれ愛の神なり、されど夫婦となりて後の女、いづれか愛の神ぞ、不幸にして多く世の諺これを暴れ出す山の神ともいふ、
 新婚の一夜前、賢愚ともに男は正にこれ情の宿なり、されど夫婦となりて後の男、いづれか情の宿ぞ、不幸にして多く世の諺これを雨漏る只の宿六ともいふ、
 されど身は一國の大臣が令嬢として才色兩全といはれたる綾子の戀や、百年に優る一瞬の娛樂を其まゝ長く保ちて、姫御前のあられもなく山の神と呼ぶる、恐れもなかるべく、これが情の宿たる倉橋幸藏また徒らに只の宿六ならずして、あはれ友白髪のためまで戀の圓滿を伴ふべき幸福の男たるべきか、これを戀の神に問へど答へず、強ひて問へば夫婦となりて浮世に支配せらるゝ人間のあづかり知るべからざるところぞといふ、

玄關の書生には令嬢の腰巾著お傍御用人といはれ、朋輩の陰言には生きて御飯をいたゞくお嬢様の御手道具、お嫁入の時には箆笥長持に先立って行く筈のお荷物とまでいはるゝ例のお里が、他手にかけてぬ日夜一切の受持役、もはや朝の五時半お枕頭へ御用を伺ふころと、いそぐ何心なく入り來りて俄に打驚いたる顔色、

『あれまアお嬢様、どう遊ばしましたの今朝は、貴嬢まだ五時半で御坐いますよ、平常よりは一時間の餘も、お早いに、ちやんと御召物までお著替へ遊ばして、どちらへ往らッしやいますんで御坐います、また誰がまるって、お夜具などを疊みましたか』『ホ、ホ、ホ、わたしは早く起きれば何故さう不思議だらう、一人だつて著物も著替へ夜具ぐらゐるは疊めるよ里』『おや御免遊ばせ、さう申し上げた譯では御坐いませんが、あまり、お早いで、そして今

朝は、どちらへ、もしあの根岸へでも、お越し遊ばすなら是非お伴を願ひます、過日お使者にまるって、萬事よく勝手も存じて居りますし、第一あの方の御兄弟同様に仕て在らッしやるお友達で黒田さんといふ方、實に面白い方で御坐いますよ、ホ、ホ、ホ、それは其事として置いて、また別に和女と乃公が夫婦約束の内相談でも取極めた上、あつと倉橋を驚かしてやりたいなぞと、全く氣輕に捌けた呵しい方で御坐いますよ、ホ、ホ、ホ、是非お伴を、妾だつて貴嬢、過日お使者の時は、生憎御本人の御不在で、しみくお顔も拜見いたしませんから今日こそ、ねえお嬢様』『あれ、いやな里だよ、まだ何處へ往くともいはないにさ、そして和女戲談にも黒田さんと、そんな事を、始めて、お目にかゝつたばかりで在ながら、お憤みよ失禮な』『いえ貴嬢、妾が申したンぢや御坐いません、黒田さんの方から』『たとひ黒田さんが仰しやつたつて和女が悪いよ、女のくせに始めて伺つた殿達の前で、不安心だよ和女のやう

なものを使者に出すと、勝手に自分の面白いことばかり談話して、わたしの用なにか、どうしたか分りやアしない』『あれお嬢様、酷い事を仰しやいますこと、いくら不來な妾でも、御主人の御用を疎遠には』『だって和女、過日の、お返事も、指環も其まゝで、まだ』『いえ貴嬢、お文の御返事は御坐いませすとも、あゝいふ御立派な指環を其まゝ、お返しにならないのが即ち御返事も同様で御坐いますよ、ホ、ホ、ホ、しかしお嬢様へ、いや眩いの眼が悪くなるの否あれが一個あれば田舎へ歸つて田地を買つて好きな人と生涯安樂に暮すのと、家中の婢女が皆、存じて居ります其お指環が急に無くなつた事を何とか變に、思ひは致しますまいか、貴嬢の事さへ申せば、お襦袢の袖口に絲屑が附いて居りまして、妾を眼の敵のやうにして蒼蠅く尋ねますから』『何だよ召使ひの癖に、入らざる事を差出がましい、和女さう言つておやり、お嬢様へ直接に伺つて見るが宜いと、第一この事は、わたしの一料簡でない、お

父様も御承知の上で在らつしやる事だから、和女だつて妙に、變に思つて、わたしを見積ると里、きかないよ』『どう致しまして貴嬢、妾がさやうな勿體ない、たゞ一日も早く、思召し通りになります事を陰ながら、お祈り申し上げて居りますくらゐで』『それでも和女、始めてわたしが、あの方の事を談した時、いやに澄まして四角ばつた手織木綿の何とか斯とか、悪く言つたでないか』『まアお嬢様の執念深、う仰しやること、あの園遊會の時はまだ何も妾が存じませんもの、たゞ御風俗を申したばかりで、ホ、ホ、ホ、御免遊ばせ、萬事この里が悪う御坐いましたから、きつと以後は心得ます、ホ、ホ、ホ、』『さう何も別に更めて謝るには及ばないよ、また和女、謝るなら笑はずに謝るもんだよ』『あれまア、どう致したら宜しう御坐いますか、大變に今朝は御機嫌のお悪いこと、何か里に、不調法でも御坐いましたか知らん、いえ眼の覺めましたのは五時前で御坐いますが、やはり平生の時間に、お起き遊ばす事と存じ

まして、つい貴嬢、御免遊ばせ』「ホ、、、呵しい里だよ、いちく、謝ッてばかり在るよ、和女の御免遊ばせは欠伸と同じで、いつも長談話のうちには絶えず自然に出るんだね、まるで龜の子の居る池の水の泡沫のやうだよ、ホ、、、」『あらお嬢様、御機嫌がお悪いかと思ひの外、何か今朝は、お嬉しい事があッてお喜びの自烈ッたさに、この里が貴嬢お戯弄ひ遊ばすンで御坐いますね、道理で今朝は』「道理で今朝は、どうしたの』「御免遊ばせ』「あれまた御免遊ばせを出すよ』「ホ、、、、だッて貴嬢、召使ひが御主人に對ッて、何か申し上げる毎に、いちく、謝ッてさへ居れば間違ひが御坐いませんもの』「それと女は直接さういふ大膽な氣で居るから、わたしを何とも思はないんだよ』「あ、申せば斯う、かう申し上げればあゝと貴嬢、この里が全體どう致せば御意に召しますの、どう御返事を致せば御氣に入りますか、さッぱり分りませんから思召し通り、さアお嬢様、ホ、、、、お指圖次第で死ねと仰し

やれば死んで御覽に入れますよ』「さうだよ、わたしを困らせれば和女の氣が済むんだから、何とでも言ふが宜いよ、どうせ、わたしは此家に長く在ない決心だから、どッか外へ往ッて仕舞ふ身體だもの』「何故まア貴嬢、今朝に限ッて、さう御無理ばかり仰しやるンで御坐いますか、もう此上この里には御機嫌を伺ひ兼ねますから、誰か更めて外のを御相手に差上げませう』「しかしね里や、わたしの無理は和女に通らなくッても、また外に、どッか通して下さるところがあるかも知れないから、さのみ心細くもないのよ、ホ、、、、』「あれまア、長年の間これほどまでに思ッて影身にお付き添ひ申し上げた里へ、俄に可愛さうな、急に憎らしい、お氣強い事を仰しやいますよ、ホ、、、、ですから妾は、いつまでも其まゝのお嬢様が結構、あの奥様といふ御名前が出来かゝると何だか、頼りなくなッて嬉しいうちに腹も立つやうな氣がして、え、もう貴嬢この里は全體どう致せば宜しいので御坐いますか、いッ

そ先駈して根岸へでも御奉公いたしませうか、ホ、、、』『ホ、、、、嘘だよ里、わたしの怒ったのは戯談だよ里、今更ら何處へ和女を遣るものかね、實はね、前夜お父様が、ちよいと耳をお貸しよ』『いつにないほど今朝お早くて御自身お夜具まで、お覺み遊ばしたのみか、何だか急に清々とした御様子で御召替の色艶と申し、ホ、、、、實のところ、大體お察し申し上げて居りました、しかし差當つての御用は耳ばかりで宜しう御坐いませうか、どうせ貴嬢、一手に拵へた附物で俄に離すことも出来ませんから、ホ、、、、この肥つてうの身體も御一處に、お使ひ下さいますやう願ひます』『いえ折角の事だがね、まづ今のところは耳ばかりで宜いのよ、ホ、、、、』

雪には宮殿も薬屋も同じ眞白さ、戀には智者も賢者も愚者も貧者もなくて同じ愛情の下半

おもひのまゝの春に逢はゞ身も骨も溶けて流れて水に等しとぞいふ、
まして女は平生の要害深く胸裡に忍んで色にも穂にも出でざれど、人しれぬ閨のうち、月さへ窺はぬ枕の邊り、さては心を許せし深窓の下に打解けては、さすがに取亂して我ながら愚に返りつゝ、これぞ情の眞實、やまと種の蔓に咲きし花一輪の風に吹かるゝが如く、葉末に彩りし歐洲的の理窟めいたる學問も教育も三文の價値なし、

其四

ふしぎに同年同月の出生ながち、たゞ日數に僅の相違ありて倉橋より七日以前この世に出でしがため、汐入村の昔も今も兄分として立てらるゝのみか、由來の識見度量また一日の長ありとて萬事の兄分にせられたる川上三吉、されば今日このごろ倉橋が生涯の幸不幸を自己の一身に引き受けて人しれぬ心を碎きつゝ、いはゞ戀の參謀となり心の幃帳に參じて沈思默考

の末、あはれ貧にして學に深く身は孤獨にして志の遠大なる友のため、聊か其間に策を施すが如きも願はくば戀の神よ、この目的をして手段を辨解せしめよ、おのれやれ五萬金に代へて根岸の奥の草の菴を歐羅巴の中央に移しつゝ、世界の檜舞臺を踏ましめむと、なれば傑物に等しき一快事、ならずば小人に似たるの結果、刎頸の友をして最後の大物たらしむるも眼前の小人たらしむるも、一瞬の吉凶は我三寸の舌端にかゝりて彼が生涯の禍福また茲にありと、宛ら其身の死活問題に逢ひしが如く腸を絞つて日夜の腦を惱しぬ、

今こそ餘所に思へど戀や戀、誰が上にもあることか、我も昔は情の露に濡れて生涯の禍福と吉凶を判せし身の、こゝにまた繰り返して友のために同じ心を碎くかと、何とやら今昔の感に堪へず戀や戀、

夜更け人定まりて後、はや寐床を敷き並べながら其間の枕頭に火鉢を引き寄せて差對ひつゝ互に打解けて語る夫婦の心に紙一枚の隔意もなく、おそろしき浮世の風さへ通ひ來て吹き分くる寸隙もなし、

「ねエ芳、もう夜も更けたから寐て話さうと思つたがね、寐物語りぢやア石佛に對うて談判するやうなもんだから、今、暫くだ、起きて居てくれ、あすの朝寐は少々ばかり黙許するからね、ハ、、、『あれ良人、いくら妾が寐坊だつて石佛は酷う御坐いますね、御用があれば此ま、夜明しても致しますが良人こそ怪しいもんですよ、ホ、、、『なアに乃公が怪しいもんか、前夜も和女、つい向河岸の本所の火事で、あれほど喧しい三撃鐘でさへ、ぐうぐう寐込で起きなかつたぢやアないか、ハ、、、しかし、そりやア兎も角、今夜はね、和女に折入つて頼みがあるんさ、つまり生涯に一度といふ大役を首尾よく仕遂けて貰ひたいんだ

が「おやまア良人、唐突に大變な事、妾にですか、どんな事か存じませんが生涯に一度といふやうな大役が、どうして妾のやうなものに」いや和女に限るんだ、實はね、倉橋の一身上に就いてさ」「猶更ら御免を蒙ります、もし良人の事では是非とも妾に限ると仰しやれば、いくら不束でも一所懸命になつて見ませうが、倉橋さんの事を妾が、どうせ満足に出来る筈がないんですもの、最初から判然と、お謝絶していたゞきたう御坐いますわ」「なるほど一應は道理だがね、こりやア倉橋が直接、和女に頼む理由でなく乃公が倉橋から引き受けて和女に頼むのさ、簡單にいへば戀の取持で、いはゆる愛情の橋渡しさ、しかし上田と清の媒介をしたのとは違つて、その兩方の岸が聊か高いため橋の渡し工合に少々面倒な事があるんだよ」

「おや、そんな事で御坐いますか、あまり良人が更まつて大層なやうに仰しやるから、實は驚愕いたしましたよ、ホ、ホ、ホ、お目出たい事、倉橋さんが、まアどういふ女を」「それが和

女、縁といふものは妙なものでね、そら一時あの新聞紙上で飛んでもない無根の冤を捏造せられて倉橋が大變に迷惑をした相手の本尊、いはゆる大臣の令嬢さ、それが和女、世間へ對して口惜しまぎれの意地から出たものか但しは嘘から出た眞實といふものか、兎も角、今は新聞に唄はれた反對の事實が持ち上つて、いよく倉橋に惚れ込んで仕舞つたのさ」「おやまア、さうで御坐いますか、しかし倉橋さんは、お幸福な方、嘸お嬢しいでせうね、早く其お嬢様を見たいこと、今年お幾歳」「二十歳ださうだ、しかも才色兩全の名聞があつて、なか／＼美だといふこつた、ところでね、また父の大臣が確乎に承知したか仕ないか其邊は分らないが、新聞の當時わざ／＼倉橋を招いて園遊會を催し、また其後しばらく、本人が公然と馬車を驅つて根岸へ襲つた事實から考へると、どうやら内心に娘の意を汲んで黙許してるやうだ、のみならず、現に過日は、思ひに堪へ兼ねた本人から倉橋に對うて直接、乞ふが如

く促すが如き一片の艶書が来てね、それに小豆粒ほどのダイヤモンドを粧飾した立派な指環が添へてあるのさ、つまり西洋風に婚を求めて愛を運ぶ後日の證左だね』『あら倉橋さんは急に大した色男、お目にかゝって御祝儀かたぐ、さんざ苛めて上げねばなりませんね、ホ、ホ、』しかし、この色男なかくの變物でね、嫌だといふんだよ、あんな女を欲しくないと行って、寧ろ大に迷惑してるのさ』『嘘ですよ良人、いくら物固い一癖のある倉橋さんだつて木や石で御坐いますまいし、さういふ立派な御身分で美人で教育のある女が、それほどまで一所懸命に思ひ込んで在らつしやるものを、嬉しくない嫌だなぞと、しらなくしい、勿體ない、ホ、ホ、ホ、男ほど意地の悪い憎いものは御坐いませよ眞實、妾だつて覺えがありまますから其お嬢様の御心を察して猶更ら倉橋さんが憎らしく思ひますよ』『そいつア油断がならない、始めて聞いて驚いたよ、いつ和女、誰に對つて、そんな覺えがあるんだ、他人事

ぢやアない大變々々』『ホ、ホ、ホ、誰に對つてか良人お心に問うて御覽なさい、今でこそ昔の夢ですが、最初、妾が、その時分の良人の猛勢、やうくくの思情で頼んだ、あの吉田さんを打たないばかりに叱り飛ばしたり、上田さんの妻になつてる、あの清を惡魔の使者か何そのやうに』『ハ、ホ、ホ、馬鹿な今そんな事を言つたつて和女』『しかし同じ事で御坐いますよ、それも妾のやうな不束な女なら兎も角、かりにも大臣の令嬢として才色の揃つた女を倉橋さんが良人、どこに不足あつて、何が氣に入らないで、そんな贅澤な事を仰しやるんです、ほんとに喰ひ付いてあけたう御坐いますよ』『ハ、ホ、ホ、ホ、さう方角違ひで和女が怒つちやア困るよ、しかしね、こゝに倉橋の倉橋たる所以、また俄に喜んで應じ難い理由もあるのさ、なれど先方の熱度が大變で倉橋の倉橋たる所以も應じ難い理由も押し破つて襲ひ來らむとするほどの勢ひだ、ところが此方もまた前途に大志を抱いてるから一朝その戀のために我の我た

る所以と應じ難い理由とを捨てることが出来ないといふので、つまり相手を嫌ふ譯では決してないんだが、もし戀の分量から論ずれば先方に九分九厘まであつて倉橋には一分よりない、その一分を以て九分九厘と交換するには和女、何等か倉橋の方に要求の條件があるだらうね、片思ひの戀を背負つて其まゝ苦しむなら兎も角、戀なるものを圓滿に遂げて成就さすには男女が雙方から二人で一個の嬉しい魂物を拵へるのさ、それに和女、一個一錢のものを九厘と出し合つちやア勘定が出来ないよ、つまり一厘のものより九厘のものへ何等か供して満足を與へなければならん、ハ、ハ、ハ、かういふと神聖なる戀を卑近なる算盤珠にかけるやうだがね、實は、倉橋の要求として五萬圓、さア驚くのは道理だ、和女でなくつても今日の世間まづ大抵の奴は驚愕して呆れるさ、いやしくも大臣の娘で才色雙絶の名を取つた者の戀を當時一寒生の美男でもない倉橋が鼻息に吹き飛ばして、その戀が五萬圓を持つて來るなら貰は

う嫌なら止せといふのだから、づうくしさと大膽さは殆ど物の度に外れてるやうだがね、つまりと、その五萬圓のうち我最愛の妻となるべき女の衣食料として二萬圓を元の鞘に納めて別に一萬圓を上田と黒田と吉田の三人に分ち、自己は残る二萬圓で洋行したいといふ目的さ、そもく大臣ともいはるゝ身分で可愛い娘の戀婚が前途發達のため、二三萬の金を出さうと思へば必ず出せる筈で、こりやア實際、さのみ難事でも難題でもあるまいと考へるのさ、もし應ぜざれば應じなくつても宜いが、もし應ずれば倉橋が生涯に取つて大飛躍の一階段、宜しく促して要求すべきところだ、また此一件は倉橋のため乃公が身に引き受けて必ず仕遂げる決心だがね、いろく今朝から千思萬考の結果、乃公は二陣に差控へて女武者同士の一騎討、まづ和女が先方の本尊と逢つた上、そろく柔和に如才なく春の風と風とが誘ひ合つて通ふが如くね、おもむろに窺つて見て欲しいのさ、最初から乃公が飛び出しちやア餘

り露骨で事が角張ッて少々、まづいからなア、どうだ和女の考へは、第一に倉橋のため、從うて外の三人がため、やッて見てくれないか、生涯に一度の大役といふなア此事だよ』『なるほど、よく分りましたが、どうで御坐いませう、妾に出来ませうか』『出来ないものは乃公が出たッて誰が出たッて出来ないさ、しかし、こりやア十中の七八、確乎に成就すると見込でるのだ、只その方法と手段を圓滑ならしむるための便宜上、乃公が大臣に當る前、和女が本尊の意を確めて置いて、いは、中途で崩れないやうに家を建てる地ならしをするのさ、またその地ならしに付いての萬事は、別に和女へ乃公が教へるからねエ』『それさへ委しく教へていたゞけば、及ばずながら、兎も角、其お嬢様に逢ッて見ませう』『しかし、この事は一切あの上田にも黒田は勿論、祕密だからね、その心算で、また送ッて来た文も指環も實は乃公の手に預ッてあるから、あらためて和女に渡さう、かつ當分のうち和女が先方へ行く事も

内々で、倉橋に知れるまで隠して置く方が萬事の都合だ、つまり倉橋の名代が乃公で、乃公の名代が和女さ、このところ夫婦俱稼ぎの大活動、首尾よく仕遂けたいもんだねエ』『もし出来ました時は、どんなに心持が宜う御坐いませう、御本人同士より却ッてねエ良人、しかし妾等夫婦で骨折甲斐のあつた曉、あの上田さんに對して何だか氣の毒なやうな氣がして、今から苦になりますよ、倉橋さんには大臣の令嬢で加之も大金を添へてまで、それに引き替へ上田さんには妾が召使ッた下女の清を、押し付け業のやうにしたばかりか、親子三人あつたり足らぬ勝の世帯ですから、縁とはいふもの、申譯が御坐いませんよ、しかも良人と妾が今日の原因も、上田さんですもの』『なるほど、さう言へば全然さうだがね、そんな卑しい料簡で嫉妬を起すやうな腸の腐ッた上田でないよ、ありやア立派な君子だ、洒々落落たる心と玲瓏たる珠玉の如き性に至ッては乃公も倉橋も遠く企て及ばざる人物だよ、しかも其間に自

己を知るの明と一種自得の安心立命を知ッてるから、垣を隔て、隣屋の花を羨むやうな事はない、また倉橋が一身の幸福を壟斷せずして、乃公を除くの外、其のうちの一萬金を三人に分與せむとするの芳志、既に盡せりだ、別に和女が心配するに及ばない、もしそれでも氣が濟まなけりやア所謂一萬金に乃公も首を突ッ込んで、平等に四分したうちの二人分を上田に贈ッても宜いさ、しかし上田は受けないよ、三分一を受けるかも知れないが自己一人で四分二は斷じて受けないぜ』さうでせうか、だッて良人、外の人達には子といふものが御坐いませんから、是非とも上田さんに子の分を、もしそれでも達て辭退なされば、良人の分を妾に下さい、妾は清に遣りたう御坐いますわ』ハ、、、和女さう膝を乗り出したッて、まだ現在の金が手に這入ッた譯ちやアないよ』ホ、、、あれまア嫌な事、もし他人の前でもあれば、ホ、、、しかし上田さんの事は忘れないやうに良人、宜しう御坐いますか、是非お

願ひ申しますよ、あの上田さんばかりは萬事、外の方と違ッてるんですもの、清が居るため何も妾が最負するので御坐いませんが、實際ねエ良人』分ッてるよ、承知してるよ、上田と黒田と比較にならない事は乃公も倉橋も知ッてるんだから、安心して居れさ、なるほど赤心を以て人を動かすとは實に彼の事だ、あ、棺を閉ぢて最後の長は五人の中、そもく誰に歸するだらうか、面白い問題だ』

其五

迎も覺束なき山仕事に耳を欬て、自己の本業を忘れ、木に餅のなる夢物語を逐ッて狂氣の如く飛び廻りつ、日夜に空中の樓閣を築き朝夕に黄金の釜を掘り出さむとする徒輩の目よりは、父が大臣で娘が美人で加之も飽くまで命かけて惚れ込まれたのみか、五萬圓の金ぶらりと眼前へ絲瓜のやうに吊り下るといふ今日、もはや起ッても坐ッても居られず嬉しさが咽

喉元に込み上げて三度の食も通るまじと思へども、こゝに倉橋幸藏は例に依つて例の如く更に肩毛の一端も動かさず、朝は五時半、夜は十二時、孜孜として机に對ひ兀々として讀書の外に餘念なき體、ならば急ち疾風電霆の如く此草庵を飛び出さむとすれど、ならざれば雨蛙一疋が庭の水溜りを飛び損ねたるほどにも感ぜざるが如し、

我ひとり世に生れいで、我ひとり世を去るべき人間の一身、その間に我を守り我を扶けて我を導くものは我心と我力とのみ、まして浮世の萬事は手に執つてこそ始めて我物なれ、もし手に執らざれば眼前に落ちたる絲屑も我物ならずと、事に當つて迫らず物に逢うて急がず悠々として著々その歩武を進めむとする倉橋に引き換へて、これはまた闇雲飛び乗りの横紙破り、他の物も我物と心得て年中の鼻唄に人生行路の難を屁とも思はず、時には菩薩の素頭も張り歪め地獄の釜の底にも手を突ツ込んで探らむとするほどの黒田健次、宛ら黒白の色を分

ち方圓の器を重ねたるが如し、

されど此黒白は其色を異にしながら十餘年來の出入進退さらに害せず妨げず、この方圓の器は其形を異にしながら十餘年來の交友情誼さらに破らず傷つけず、たま／＼口を極めて互に毒は吐けども心に悪まず、をり／＼仇の如くに争うて罵れども敢て怨まず含まず、さては倉橋の寛大にして宏量なる黒田を恕して容るゝがためか、さては黒田の放逸にして無頓著なる倉橋を無にして容れらるゝがためか、

朝に主義の一致を求め夕に性格の同類と與みしながら、時の利害に依つて忽ち反目し身の盛衰に依りて忽ち離散するが如き當世輕薄の才子に比すれば、この黒白と方圓とは寧ろ同根の枝葉に出でたる長短曲直に等しく、俗にいふ前世の約束また退くに退かれぬ理外の腐れ縁ともいふべし、

例の失策より夜の夜中に追ひ出されて、その翌朝やうく上田に送り返されしまゝ、またもや倉橋が許に食客的となりし當坐は、流石の横著漢も何とやら浮世の風に身に染みまゝと吹き入りしが如く、俄に打濁れて物の無常を觀せし體なりしが、世諺にいふ三日坊主の空念佛、忽ち例に依つて例の如き黒田健次の正體を現しぬ。

四通八達の巷は夜の九時十時まだ立騒ぐ宵ながら、上野の森に車馬の音響を隔てし根岸の里、しかも奥深き片蔭の住居は一入さらに物淋しく、垣根の外の迷ひ犬さへ狐狸の歩むかと思はるゝころ、いざや氣も心も澄み渡る我世界この二三時間は終日の讀書に勝れりと、宛ら禪僧の瞑目せるが如く餘念もなき倉橋が机の前、ぱつと俄にランプの火影を遮りしは例の黒田、ほんやりとして坐しぬ。

「おい退かンか、何だ今ごろ唐突に、用がありやア明朝にしろ、邪魔になるから、闇い、退けといふに」「いや長く邪魔はしない、暫時だ、ちよいと君に相談があつて、實は今、お先へ御免蒙つて寝かけたんだがね、ふいと俄に感ずるところあつて」「お先へ御免蒙つてくれ、不意に今ごろ相談を仕かけられたり感じられちやア困るよ、ちよいとでも暫時でも不可ン、そこ退いた」「さう君、蒼蠅がらなくつても宜からうに、ほんの十五分か二十分の間」「不可といふに」「しかし君、いつもの流で、夢に屁を踏んだやうな談話でない、今夜こそ實際、大に感ずるところあつて僕の一身上、いはゆる將來に於ける人生の行路問題だから」「しかし君だの、時に君だのといふ漠然たる冒頭ちやア逆も二十分や三十分で済まないから翌朝にしろ、翌朝は例の屁を踏んだ事でも宜い君のために一時間の耳を貸さう、まして將來の一身上などといふ重大な問題は今こゝで聴けない」「聞いてくれなきやア動かないぜ、いつまで此まゝ動

かないよ、いやしくも君を以て聊か語るに足ると思へばこそ、僕が一身上の前途をあけて相談しようとするに、蒼蠅いから翌朝にしろたア酷いね、冷かなること氷の如しだ、君が今、二三十分間の讀書と十餘年來の交友が前途に於ける出處進退と、いづれか重き、いづれか輕き、さらに一考を煩はしたい』『そろく、また始つたな、つい過日、追ひ出されて舞ひ戻つたばかりぢやないか、どうか斯うか通常の人間らしくかつたのは其當座二三日、もはや無効だ、破戸漢と一般の口吻、だッ子だね君は、まるで一種の狂氣だぜ』『破戸漢、だッ子、狂氣實は仰せの名稱を脱せむがための相談だ、いはゆる追ひ出されたり舞ひ戻つたり仕ないための相談だがね』『ハ、、、、いッそ罪のない馬鹿か白癡なら宜いが、いやに君は間違つた屁理窟の聯環法を知つてるから困るよ、ぢやア簡單に言ふが宜い、つまり大要の綱目だけを掲げて置いて、その委細は明朝のこつた、凡そ五分間より許さないぞ』『ハ、、、、まるで長距

離の電話だね』『つまり余計な事を言はずに早く要領だけを語るんだ、第一そこに居つちや聞くつて不可、横へ寄せ、横に寄せといふに』『宛然これ橋上の巡查と一般、横へ寄せ横へ寄せ、いや心得た、時に倉橋、僕に金を呉れないか』『金を呉れ、この倉橋に金を呉れろつて、どこに金がある馬鹿な、それこそ狼狽へて橋の上の巡查に叱られるやうな事いふな』『しかし君、單に金とは言はない、今こゝに食客的黑田が身分相應一介の書生を甘んずる君が身分相應、出来る相談だ、まさか一萬兩を出せともいふもんか、つまり二百圓乃至五百圓くらゐで宜い、もし叶はずんば百圓でも辛抱するが、百圓以下ぢやア少々ばかり困るがね』『ハ、、、、梢を睨んで鯛の刺身を求むるの愚、その二百圓乃至五百圓どこにあるんだ、百圓で辛抱するの、以下ぢやア困るのと、やはり夢に屁を踏む談話だ、全體また其金で何をす決心だ』『どこを詮議するにも及ばない、即ち君の手にあるのさ、在官中に溜め込んだ三年籠

城の矢玉、その内の幾分を乞はむとするのさ、放逸懶怠にして徒らに君が勉學の妨害をなす有害無益の食客の、いつまで米鹽を與へて義理ある人から貰った狗の子のやうに際限なく飼養するよりは、今こゝで勘當息子を追ひ拂ふが如く一時に涙金を呉れて叩き出す方が宜からうぜ、僕また其涙金を拜受して奮勵一番、さらに更めて久しぶりの社會へ飛び出したいのさ、實は相方お互の身の爲かと思はれるがね、どんなもんだらう君、勿論これを最後の恩として再び御迷惑御厄介を掛けないから、思ひきつて呉れよ、あるだらう二百圓ぐらゐる』あるさ、その金なら或銀行に千圓以上も預けてあるさ、しかし君に出す金は鑄一文もない、また際限なく君を養ふ料簡でもなし、食客として君に與へつゝある米鹽は則ち僕が朝夕の萬事を節して産み出すんだから、そのまゝ置いて俄に損なく今こゝに出して急に益なく、いはゆる差引勘定の一時金として別に呈するの必要を認めない』むゝさうかい、そいつア少々心算が違

つて困つたな、ぢやア君、つまり君が牛肉一斤のところを半斤とし魚類を菜ツ葉とし一等米を二等米若くは三等米として僕を養つてるんだね、殆ど場末に卸賣の駄菓子と一般、僕ア残飯で養はれてる理由だね、さう承ると何だか急に心細くなつて来たよ、道理で君は僕の食客的を悠々寛々、さのみ苦しなと思つて居た』ハ、ハ、ハ、ハ、始めて分つたか、分つたら宜いから、さア約束だ、もう五分間を過ぎたぜ、早く去つて寐ろ、いくら權謀術數を用ゐても不節調にして粗大なる君が頭腦ぢやア僕の野暮にして頑たる愚に勝てないよ、ついでだから、もう二三分間を増して今度は僕が君に語るが、そもく百圓や百五十圓の端た金を一時に取つて全體どうする決心だ、社會といふが君の所謂飛び出す社會は何處だ、晝に描いた餅を壁に張つて睨んで居ても腹は大きくならないぜ、ハ、ハ、ハ、ハ、』や、逆撃だね、しかし君、金は數の多少に依つて事の成否に關せず、只その用と不用にあり巧拙の間にありだ、徒らに兵の

衆寡は戦鬪の勝敗にあらざるの理で、今こゝに僕は敗軍の残餘と雖も初陣の葉武者にあらずいは、既に戰場萬馬を馳驅し來れる古兵、そつと竊に浮世の間道を規うて僅に残れる旗下の近臣を提げ、時ならぬ風雨闇黒に乗じて奪地に敵の油斷の兇首』『おい、おい黒田、へほ軍談の種本を讀むやうに、何のこつた馬鹿々々しい、もはや今日、そんな僥倖的の狂言で萬一を成功する世の中ちやアないよ、第一また君のやうな狼狽者の鑄刀で兇首を渡す馬鹿があるもんか、浮世の間道を裏田甫の畦路と間違つて腐つた南瓜でも拾つて來るのが最後の手柄だらう、ハ、ハ、ハ、汐入村の立退狀一札で君の手腕は分つてるよ』『何、あの時は君まだ僕の、ありやア初陣だよ』『名ある勇士は初陣を以て知るに足る、初陣が大切だ、しかも君の初陣は頗る長かつたぜ、僕は初陣中に孫でも生むのかと思つたよ、だから深く兵を練り遠く謀を廻らして、まづ當分のうち、つまらない小戦争は止すが宜い満を持して放つ箭でなきやア

鐵的を射抜かれないぜ、全體、いつも君の箭には鐵がないやうだね』『こりやア驚いた、いつの間にか僕の要求事件が消えて仕舞つて、君の逆寄を防ぎかねたる體』『當然さ、もし君の要求が道理に叶つて實際の事實に出來ることなら、百圓二百圓を何ぞ惜しまむだ、僕が三年籠居の資を悉く呈しても宜いが、まづ白銅一枚を抛つての價値がないね、食客的なる哉、食客的なる哉、まづ暫時は殘飯を喰つて僕が許に食客的たるべしだ、今のところ呵しく妙に動き出しちやア却つて君の損だよ』『しかし僕だつて、いつまで此まゝの食客ちやア少々、惘然だからな、氣が利かないからな』『どうせ氣の利いたもんでないよ食客的は、なれど奈何せん、君が自業自得で今更ら急に仕様がないうちやアないか』『仕様がないうちから奮闘一番、さらに大に仕様あらむとして君に』『まア當分、仕様がないうちで居れさ、よく人は無聊で苦しむといふが、人間そもく、無聊で苦しむやうぢやア、いざ有用といふ時の役には立たないぜ、徒然は無用の

閑人が語だ、わづか百年に足らぬ生命が何の違あつて無聊に苦しみ徒然を慰めむとするのだ、閑暇があつて困る奴は繁忙しくつて目を舞はす奴だ、腦を休めて身を働かし身を休めて腦を働かせば其間に快樂の神は、絶えず守つてくれるよ、だから君も將來は例に依つて例の怠性を鞭ち無聊に苦しんだり徒然に惘然としない工夫が專一だ、寝てるのか起きてるのか分らないやうな夢うつ、で今日の世の中が渡れるもんかね』『段々の高説謹聴、ところで君、くどいやうだが、先刻の願意、どうしても御聞き届けになりませんかな、二百圓乃至百五十圓、せめて百圓』『だめだよ、いくら口説いてもそんな目腐れ金で押し通せる容易い社會なら君、いッそ赤裸のまま、這ひ出して何が掴むが宜い、もし其金で單に喰ふのみならば此まゝ、食客的に居るが宜い、同じ金を呉れるなら妙くとも三四千圓を遣らなければ君がために用をなさない、百や百五十は徒らに君をして討死さす基因だ』『や、申されたるかな妙くとも三四千圓とは、

大きいぞく、著實謹嚴なる君にして何ぞ法螺の貝に似たるの甚だしきや』『遣るなら三四千圓も遣りたいと思ふのさ、しかし遣る金がないから、遣れる百圓に對して白銅一枚も不可といふんだ、その間の理が分らないのか、つまり出るなら赤裸で飛び出せといふ結果になるんだよ、どこに法螺の音がする、理の當然だ』『この各野郎め同じ借りに来るなら五圓や十圓と吐さず思ひきつて一萬圓と言へ、しかし其一萬圓はないから五圓も嫌だといふ理窟だね、ハ、ハ、ハ、なかく面白、頗る大出来だ』『どうも困つた男だな萬事、すぐ、さう取るから物が間違つて不可、ところで今夜は、まづ間違つたまゝで寝るが宜い、うかくして一時間にもなつたらう、さア立退だ、退散々々』『寐るさ、起きて居て功のない以上は寐て不平を忘るゝより外に仕方がない、ともかく三四千圓を君に貰つた夢でも見て樂しまうよ、ハ、ハ、ハ、』『それが宜からう、夢に怪我はないから君のために安全の檜舞臺だ』『こいつも大出来

だ、罵り得て妙、時に明朝は平生より遅いよ、少々ばかり朝寐をするよ、いくら夢でも一時に三四千圓も貰へば君、いろ／＼費ひ途があつて自然に長くなるからねエ、ハ、ハ、ハ、ハ、憐れむべし今まで一所懸命に饒舌り續けて僅に得たところは朝寐の利益ばかりか、いやだ／＼ます／＼食客的は嫌になつた、どうかして一時も早く脱却しなければならん、殆ど名玉を人しれぬ草叢に捨てるが如しだ』『え、蒼蠅い、馬鹿な愚癡をいはずに早く寐ろ』『はッ、はッ』

其六

人間おのれ獨身が食うて著て其日を無事に渡るのみの業なれば、野末の末の小屋にさへ春は花咲く世の中、何を苦しんでか飼猫と一般の境遇に甘んじて他の米鹽を仰がむ、されど苟も男兒うまれて宿志ある上は時に取つて屈伸消長の理、空しく五尺の身體を持て餘して儉食の民たる所以にあらずとは、黒田が例の負け惜しみの食客的辨解に似たれど、その實また多少の

本音と物の哀れとを介みぬ、

されど元來の横著漢、固より叶はぬ事と知りながら、出来ぬを承知の横車、前夜ちよいと倉橋の前に曳き出して萬一を覗ひしかど、忽ち叩き碎かれたる立腹まぎれ、今朝は八時を過せど起き出でず、はや九時に近けれど夜具うちかぶりて手足を締め素頭を埋めしま、宛ら小娘の拗ねたる如く、わざと聞えまがしの壁訴訟、をり／＼鼻唄まじりの不平を漏らして何か頻りに呻りしが、この麻坊助、いつしかまた枕に吸ひ取られて其まゝ、とろ／＼と睡り入りぬ、

夢うつ、壁一重隣室の倉橋が書齋より、ハ、と高く笑ふ聲おもはず寐耳に入りて目を覺せばいつしか客の來りて頻りに語る體、しかも其聲の川上三吉と知るや否、やア面倒な奴が來をツたぞと、またもや頭を埋めて空廚、

されど彼奴は倉橋の寛厚さでは上田の質朴なるに似ずして何處やらに白刃の鋭い奴、いざ歸らむとする時、我を此まゝ無事に見通すべき男ならねば、洒落半分には耳を捻るか鼻を掴んで引き起した上、いづれ小癩に觸る文句を並べて冷笑ふべき顔色あり／＼と目に見るが如く、かつは今あの談話中にも我を何と吐すか、その言葉質を取って置いて逆寄せに一泡吹かせてやらむと、そろ／＼這ひ出して壁際に身を潛むれば、川上の聲として五萬圓は兎も角まつ三萬圓は大丈夫、倉橋が聲として僕は二萬圓で宜いのと聞くや否、黒田おもはず寐惚眼を見開いて鐵砲の筒先に對ひし猿の如く驚きぬ、

さアいよく珍事出来、そも／＼社會の縁を断ちし三年籠居の此草叢に突然として五萬圓の聲を聞くのみか、三萬圓は大丈夫と手に取るが如く、あの周到緻密にして寡黙謹嚴なる倉橋が口より、僕は二萬圓で宜いのと云ふ聲、しかも質朴剛直にして策略なき上田を交へず、

鬼でも蛇でも取って喰はむとする我朝寢坊を僥倖、彼奴等二人が膝突き合はして苟も五萬三萬といふ大金の相談、畜生め畜生め此まゝ捨て置くべき太平無事の件ならむや、前夜の倉橋奴が口吻、わづか百圓に對して白銅一枚も叶はぬといふ口の下より、三四千圓を何の苦もなく吐したる一言、平生の彼としては如何にも怪しく變に呵しく不思議と思ひしが、さては反謀隠居奴、腹の底に多少の塊固あつて思はずにらしたる本音の沙汰、いよく珍事出来、さア大變々々、徒らに鼻唄まじりの不平を漏らして龜の子の食客寢を食るべき場合にあらすと褻衣のまゝ、夜具の上に坐り直して兩腕を組みつゝ、小首を捻る折しも、前の障子がらりと開けて川上三吉が顔、冷かなる微笑を含んで差覗きぬ、

「おい黒田、感心に此ごろは早起だね、さう早起を仕ちやア却って倉橋が困るだらう、しかし何を仕てるんだ、褻衣のまゝで夜具の上に坐り込んで不節調な頭腦を頻りに傾けつゝ、何を

か思ふが如き體、まるで化け損った狸だな」「時には狗鼠の輩といはれ、今またこゝに狸と稱せらる、あゝ已ぬる哉」「ハ、、、いやに今朝は氣焔がないやうだね、或は例の駄辯器に破損でも出来たのかな、ちと僕の方へも饒舌りに来るが宜い、どうだ、これから同伴に來ないか」「まづ御免を蒙らう、さらぬだに今朝は少々ばかり御氣分の勝れない時だから猶更ら以て懷舊の種だ、よウ良人、ねエ良人などを無遠慮に見せられて堪るもンか、僕ア當分のうち夫婦もンの家へは行かない事に極めたのさ」「そりやア不自由なこつたね、しかし上田の家に長らく居つたぢやアないか、また倉橋にも過般來、しきりに獨身の不可を論じたぢやアないか」「憐れむべし上田夫婦は浮世に追はれて貧乏世帯に苦しんでるから、人をして懊惱せしむべき忌味を演ずるの暇がない、また倉橋の如きは寧ろ恥ぢて喃々たる情を祕密にする方だから宜いが、聞説、君の如きは頗る形勢の穩かならざる點があるさうだ、第一、君の噂アは小

伶俐で小面が美過ぎるよ、まして家娘の戀塔様と來ちやア齒が浮くよ、あんまり夫婦の和睦過ぎたのは却つて見苦しいもんだ、ちと叱り付けて控へさすが宜いぜ、馬鹿々々しい、遠路わざ／＼誰が拜みに行くもンか」「ハ、、、さす敵を措いて搦手の水門口から斬り込んだな、しかし僕の妻は君の見る如き場馴れた女でないよ、たゞもう今に至るも處女と一般、あど氣なくつて困るよ、根が世間しらすの一人娘で我まゝに育つた女だからなア、無論、褻衣のまゝで夜具の上に惘然と坐つて居ちやア風を引くとか何とか噓しく言つて背後から著物を著せるぐらゐの氣は付くがね」「早く歸つてくれよ、感情の動物だ、朝ツばらから變な事を聞くと其日一日の不祥だ」「もはや朝ツばらでないよ、また一日といふが其實は半日だ、しかし此邊で罷り歸らう、ハ、、、」「さうだ、早く罷り歸れ、僕が喜ぶのみならず嗅アも喜ぶだらう、もし此家に電話でもあれば朝夕たえず呼び出して、ハ、、、、蒼蠅く戲弄つてやるン

だが残念だ』『いや、自己に利あれば敵にも利ありだ、いちく僕の方から届け出るよ、ハ、ハ、時に戯談は俵置いて君、病氣なら仕方もないが、せめて朝だけなりと世間並に起きるが宜い、第一自分の身體が悪くなるぜ、倉橋に對しても少しは遠慮しろ、不羈磊落も程度のあるこつた、あんまり度を過ぎちやア何となく憎氣がさすもんだよ』『何となく憎氣どころの優しい事か、どういふもんか僕は汐入村以來、既に君等のために度外視されてるさ、勿論、其方で齒にかけないから此身でも牙にかけない理窟で、これまで無事に掴み合もせず濟んで来たがね、以後は聊か待遇を更めて欲しいもんだ』『ハ、ハ、ハ、まア兎も角その著物を著るが宜いちやアないか、野心勃勃で寒かアないと見えるな』『寒いのは一時のこつた、將來に於て待遇の冷かなるは長いこつた』『さう小理窟をいはずに君、よく自分の言行品位と今日の境涯とを願みる方が早道理だ、眞正に君の待遇を更めた日にやア上田もしくは倉橋に對して半

日の食客的も叶はないぜ、まだ此まゝで待遇を更められないから無事に居れるのさ、もしそれ掴み合はむと欲すれば先づ宜しく五尺八寸二十貫目の上田に對うて勝敗を試みるべしだ、なアに僕だつて随分とツ組んでみるぞ、苦學十年を捨て、一度は故山の山奥で猪猿を相手の獵師になつて来た男だ、論より證據、聊か兒戯に類するが汐入村の昔になつて坐り相撲でも取つて見ようかね、枯れて居ても幸ひ庭前に芝ツ原があるから立相撲でも宜い』『よせよ、馬鹿な眞似を、上田は兎も角、こゝに食客的となつて滋養分を斯くこと久しと雖も、嗚ア大事の君なんか負けるもんか、しかし個人の腕力は國と國との腕力と違つて野蠻蒙昧の極だ、角力取は一種の營業人、素人の力業は愚にして何の益かある、僕いまだ兒戯を學ぶの暇なしだ、ハ、ハ、ハ、』『年が年中ぶツ通して兒戯を學んでる人間だから、あらためて演ずるにも及ぶまい、なるほど名論だ、ちやアその名論を聞き終めとして歸らう、ハ、ハ、ハ、しかし妙だ、

いつも君に逢つて見ると何だか小癩に觸つて腹は立つが、さて後で考へると一種の滑稽を含んで呵しいよ、つまり主義に骨なく根據なく議論に一定の筋道がなくて浪の上の海月に等しいからだなア』『海月、海月とは怪しからん事をいふ、こりやア骨なく主義なきがためでない、即ち天性に自然の徳を備へて春風の如く徐ろに人を送迎するからだ』『ちやア僕も君の春風に吹き送られて歸らう、ハ、ハ、ハ、』『お宅の玄關に迎へ出らるゝ御春風にも宜しく』

川上が立歸りし後、倉橋また晝の早飯を急いで其まゝいづれへか立出でしかば、この機を失ふべからずと自己も茶漬を掻つ込んで飛び出しぬ、

出かけに臺所の飯炊婆を驚かして殆ど恐喝取財に得たる五十錢銀貨一枚、往返に膝栗毛の草臥もなしと辻車を呼んで厩橋まで急ぎしが、相手は質朴なる上田、おのれ食客的分際で憐

上過分の沙汰と吐鳴り付けらるゝを恐れ、橋際より車を降りて兩國の方に對ひつゝ、大川端を殊勝氣に歩みぬ、

をりしも上田は我子を抱いて何心なく門口に立ちしが、お藏橋の舟より引き摺り下駄の砂塵埃を立てながら懐手のまゝ、惘然として歩み來るは慥に黒田、そもく彼奴が今ごろ何のために来りし、また例の横著を構へ過ぎて二度目の叩き出されしか、時にも身にも應ぜぬ無用の癩癩を起して自己から飛び出せしか、いづれ目出たからぬ事、さても困つた奴とは思ひながら、憫れむべし多少の缺點はあれども順風に帆をあぐれば才氣横溢の一好漢、俗世界の一角を掴み崩して丸呑みにすべきほどの男も最愛の妻を喪ひ多年の志を失うて其身また瀕死の病痾にかゝりし結果、空しく浮世の落武者となつて徒らに舊友の食客的となり、夜の夜中に叩き出されて怒らず恨まず、曉まで厠挿みの責苦に逢うて送り返されながら拒まず含まず、

駄辯を弄して憎まれ口は聞けども此ごろの出處進退は親に放れし小兒の如く、事ある毎に曲折もなき無愛嬌の我を頼むのみか、あの横著漢が辻車にも得乗らず大道の砂塵埃を浴びて、のこくと遠路を歩み來る體、もし死せし貞女の妻に見せなば何といふやら、さても面憎く哀れの奴ぞと、上田おもはず鼻の如き兩眼より男泣きの涙を滾せば、抱ける我子の頬に滴りて俄に泣き出せしを、驚いて抱へ込みながら妻のお清に渡して、「さア乳だく、時に黒田の奴め今そこへ來るから、おい何か、何か喰はしてやつてくれ蕎麥でも宜いから、物を喰はして早く叩き出さないと蒼蠅いからよ」黒田さんなら別に蕎麥を取らなくつても宜いでせう、第一、まだ今日は店の方が、もし夕方まで在らつしやれば御飯を上げるとしませう、ねエ良人」なるほど、さうだな、ぢやアさうしてやらう、ちよつ、黒田の奴め、のこくと遣つて來ないでも宜いに今ごろ、どこへ往つても損な奴だ」

夫婦が物語れる折しも、ぬつと入り來りて廚を窺ふ猫の如くに店頭を差覗きながら、「やア細君、時に上田、ちよいと君に至急面談の要あつて、わざと來たんだが店ぢやア少々、なアに細君に憚るこつてもないがね、ハ、ハ、聊か祕密の方が好都合だな」君が至急面談だの祕密だのつてまた、例に依つて例の如く、ろくな事であるまい」「いや今日は大に、ろくなこつた、決して例の僕が失策より生じたる出來事ではないから、ちよいと奥へ」「蒼蠅い奴だな、ぢやア來い、しかし駄辯長坐は不可ぞ、單に要領のみだぜ」「よし心得た、要辯短坐、簡を以て實を明かにするから」

奥とはいへど店を除いて六疊の一室、その縁の端に相對うて上田まづ促せば、黒田おもはず聲を潜めて膝すり寄せ目を圓くしながら、「おい珍事出來だ、大變な事が持ち上つたよ、實は今朝、平生にないこと少々ばかり朝寢坊をしてね、ふと目を覺したところが隣室の書齋で倉

橋と川上の話し聲、それも宜いが君、驚いたよ、全く驚いたね」「何だよ何を驚いたのだ」「だって君、驚かざるを得むぢやアないか、いやしくも五萬圓たア、川上が三萬圓を大丈夫と吐すや否、あの物堅い倉橋が聲として、僕は二萬圓で宜いといふのさ」「しかし、それが君どうしたんだ、なるほど大金には相違ないが、まさか現金を前に置いての談話ぢやアあるまい」「無論、金が前にあつた様子でもなし、あるべき筈もなからうと思つてゐるがね、また強ち一場の坐談でもない様子だ、川上は兎も角、あの倉橋が口から」「ハ、ハ、ハ、ハ、たとひ倉橋が口からでも、ないものは無いんだ、もしそれ前途に就いて富といふ事を談ずれば彼等にして五萬圓十萬圓、これを空中の樓閣とするやうぢやア心細いよ、そりやア君、大慾の寢惚耳で現在その場にあるが如く聞えたんだぜ、つまり馬鹿な事で立騒ぐと君また飛んでもない失策を仕出來すよ、よしまた彼等二人が一場の坐談にあらずして現に近日その金を得るの相

談して居たところが、何も別に驚くこつてない」「や、どうも君の清廉にして無邪氣なるに至つては殆ど語れないよ、なるほど彼等二人で五萬圓十萬圓は宜いさ、宜いがね、いやしくも十餘年來の知己として骨肉に勝るの君や僕を度外視して一言の沙汰もなく、これを祕密に附して己等二人が明りに壘斷せむとするの冷淡酷薄なる、こゝは一番、何とかして責めてやらすばなるまい、ふざけた奴等だ、貧乏なるが故に君を退け食客的なるが故に僕を捨て、」「ハ、ハ、ハ、ハ、まるで織子根性だな、そも、我々が汐入村以來の交友情誼、そんな薄弱なこつて騒ぐやうな俗流に化しちやア困るぜ、貧富禍福は別問題だ、なさない賤しい淋しい氣を出すなよ、駄辯で横著で亂暴で不敵で始末に終へない難物といはれながら未だ我黨の男たるを失はざるは腹の底に厭ふべき俗流の卑劣心がないからだ、それに君、そんな下卑た嫉妬がましい根性を起して、少しは恥辱を知れ馬鹿」「さう君」「さう君も斯う君もあるもんか、耳の

汚穢だ、黙って歸れ、どうせ倉橋に内々そつと脱け出して來たんだらう、食客は食客らしくしろッ』

幸ひ同じ退物にされたる上田を味方に引き摺り込んで、ぐつと一文句を捻り出さむとせしが忽ち言下に喝破せられて蕎麥一杯の馳走にも得逢はず、其ま、拂ふが如くに追ひ出されたる黒田健次、すこくと厩橋を渡りながら、潔白は潔白なれど時世おくれの仙人め逆も度し難し、人間界の事を談ずるに足らずと呟きつゝ、淺草の廣小路へ出でむとする折しも、黒鴨仕立の矢聲激しく馳せ來りし車上の女は例の綾子嬢が戀の使者として根岸へ訪ひ來し侍婢の里なるもの、見るより黒田おもはず立止れば、彼方も車を止めて會釋しながら、『おや、どちらへ先日は伺ひまして』『やア思ひも寄らんところで逢ひましたな、ハ、ハ、ハ、ちよいと兩國まで

今これから歸りますが何か倉橋に御傳言はありませんかな』『有難う御坐います、いえ妾からは別段、しかし彼事件も追々と拂取りまして、ホ、ホ、ホ、お互に何よりで御坐いますよ、只今も向島の御別荘へ實は貴方、それこれの御用でね、今朝から御本邸の方に在らっしゃいますの、急に他の人が蒼蠅いと仰しやつてさ、妙なもんで御坐いますねエ、ホ、ホ、ホ、』『む、彼事件とは、例のこつてすか、令嬢と、倉橋の』『何ですよ、お恍惚なすつてさ、過日から一三度も川上さんと仰しやる方の奥様が、ホ、ホ、ホ、しかし途中で御坐いますから失禮いたします、いづれ其うち更めて』『いや、ちよいと、ちよいと待って下さい、あの川上の妻が二度も伺ひましたか、例の一件で』『今も貴方お嬢様が川上さんの奥様と向島の御別荘で何か、御相談して在らっしゃいますもの、いづれ此度の、お喜びに就いて御坐いませう』『む、さうですか、なるほど、む、さうかい、は、ア』『ホ、ホ、ホ、御戲談を人が笑ひますよ、し

かし御免遊ばせ、少し急ぎますから、また其うち伺ひます』
 馳せ去る車を見送りて黒田おもはず立ちながらの膝を打って舌鼓もろとも、さア化物の正體
 を見届けたぞ、畜生、いよ／＼けしからん奴等だ、そも／＼この一件に就いては由來この乃
 公が説を立て、勸めしのみか、倉橋がため近く眼前の幸福を祈り遠く他日の利益を認めて論
 議せし事も幾度か、今あの侍婢が戀の使者として訪ひ來し時も、巧みに辯を振って其間に今
 日の原因を開けばこそ、さるを一期の失策として夜の夜中に叩き出しながら、そつと人しれ
 ぬ裏路より抜け駆けの功名とは畜生め、しかも彼奴川上の狸野郎め、己れは外面に敬遠策を
 取りつゝ、鼻アを以て竊に談判の進行を圖るとは奇怪千萬、五萬三萬、僕は二萬で宜いと吐せ
 し根柢こゝにありけり、さては相手の内兜を見透して婚引出に取らむとの謀策、さらぬだに
 有福と聞えたる大臣の令嬢なれば定めし過分の荷物もあるべきを、あれほどの美人に持參金

なくて嫌とは太い奴かな、ことし三十五で世間並に劣つた野暮面を提げながら僕は二萬圓で
 宜いとは能くも吐した、いよ／＼謀反隠居の本音を戀にまで現したぞ、おのれ其まゝ其金を
 彼奴等二人に占めさすべきか、蛇の道は蛇も蛇、鱗に苔の生えたる我ありと知らざるか、こ
 れこゝに浮世の善惡を踏み抜いたる男一疋まかりありとぞ怒りぬ、
 されど今これを荒立て、は萬事の丸潰れ、また立戻つた化物の正體かくの如しと上田に談ず
 るも彼奴は仙人、つまりは飽くまで知らぬ顔の出し抜かれたる體にして、いざ間際といふ時
 に躍り出でくれむ、や、却つて面白いぞ、面白いぞ、

其七

胸に一物ありあけの月を睨んで演劇めいたる黒田健次、其後いよ／＼心を配りて窺へば、倉
 橋が朝夕の讀書さらに怠らず、進退舉動また平然として常に變れる風情もなく、山里の伯母

に黍園子一個を貰ひしほどの顔色さへなき體に、流石の黒田おもはず舌を巻いて驚きぬ、さてもく、外貌に寄らぬ案外の圖太い奴かな、今までは只いたづらに小心翼々の臆病より出でたる謹直家と思ひしに、のッそりとして大膽なる寡黙沈靜にして不敵なるところ、よく言へば以て大事を託するに足れど、わるく言へば油斷ならぬ罪深き男、喰はせもの、横著とは此奴が事、いよく組ンで其不意討を驚かすに齒應へあり力瘤ありとぞ面白がりぬ、

川上の妻女が良人の内意を承けて生涯一度の大役と思ひつゝ、竊に綾子を訪うて互に戀を知る身の女同士は猶更ら親睦も早く、二度は三度となり三度は四度となりし今日この頃、果は打解けて人しれぬ祕密まで語るほどになりしかば、こゝぞと一所懸命、そつと倉橋がため洋行費の一段を吹き込みしに流石は大臣の令嬢として二十歳の今日まで歐洲的の教育に仕立て

られたる才女、さらに驚ける體もなく、一入こゝに戀愛の色を増すが如き風情、あれほど前途多望といはれたる官を抛つて三年籠居の讀書生になるの人、素より斯ほどの大望なくて叶はぬ筈と、天晴れ其身の鑑定を誇られて、川上の妻女、ほつと溜息を漏らしながら胸撫で下しぬ、

されど父が手前、世間の手前、第一かの人のため、また我身のため、こゝは迂濶に言ひ出して心の底を見損じらるゝところにあらずと、はや良人に持ちしが如き氣兼氣苦勞、しきりに考慮を廻らして我から戀に促されつゝ、兎やせむ角やせむと胸裡を碎けば、川上三吉そつと背後より妻女に絲を曳いて、人しれず祕密の參謀に與らしめぬ、

こゝに上田は一喝の下に黒田を追ひ歸せし後、おもはず眉を擧めて腕を組みながら、なるほ

ど彼奴がいふところを事實とすれば聊か不可思議の一端、そもく倉橋と川上の間に何等の神算鬼謀やある、いまだ我に語らざるを我こゝに問ふの術なく、問へば黒田に與みして彼等を怪しむが如く妬むが如し、されど此まゝに打ち捨て置けば黒田の横著漢、また例の突飛たる野心勃勃いかなる馬鹿藝を演ずるやら、もし彼等二人の談は成就すべきものとすれば事を半途に破るの恐れあり、もし彼等二人の談を一片の坐興とすれば黒田を竟に誤るの恐れあり。いざや我この間に處して圓滿の道を講ぜざれば、十有餘年來の交友こゝに互の感情を害する恐れありと、上田力は昔ながらの上田力、あはれ其夜の夢も結ばず曉に徹しぬ、

きのふまでも今朝までも悠々寛々として更に眼色も變へざりし倉橋幸藏が、一日の夕暮、ふいと立出でしまゝ夜に入れども歸り來らぬのみか、はや例の飯炊婆が平氣に門の戸を閉さむ

とする體、さては此婆め委細を心得たりと、責めて問へども笑うて答へず、たゞ濱町の川上さんが許へ宿泊がけに行かれしとぞいひぬ、

せめて一夜の宿泊と思ひの外、二晝夜を過して飄然と立歸りし倉橋の體、また更に何の變れる風情もなく、其まゝ机に對うて讀書に餘念なければ、さすがの黒田も斬り込む隙もなく空しく眼を敬て、睨みぬ、

されど今に見よ、その眞面目なる野暮面に一驚を喫はしくれむと獨り心に笑を含んで睡りしが、曉方の我枕頭に何やら新聞紙の一封、はて不思議、ゆうべ置き忘れし覺えもなきに何心なく手に取って開けば、百圓紙幣三十五枚、あつと驚いて蝗の如く飛び起し時、倉橋幸藏しづかに入り來りて微笑を含みながら、「おい黒田、現在の百圓に對して白銅一枚を惜しんだ各野郎奴が夢を事實として三千五百圓、聊か君が社會の首途に呈するから、うまく怪

我のないやうに駈け出してくれ、僕も近々ちよいと遠方まで行く心算だ、ハ、ハ、ハ、まさか
嫌な氣持もするまいね寐惚面に降って湧いた三千五百圓、しかし活面を張り過ぎて忽ち木ツ
葉微塵と仕舞つちやア不可よ』

一時に名聲噴々たる新聞記者となりて獨り意に満たず、一朝に前途多望の官吏となりて自ら
心に安んぜず、其間の用を節して三年籠居の資を貯へ、殊更に社會の利害得失と絶つて車馬
も通はぬ根岸の奥の草叢に書を讀みしが、おもはぬ變愛の露に落葉寂寞の學窓を驚かされて
一步を誤らむとせしも、大象を引き戻すべき美人の黒髪は、この硬漢を動かすに足らず、果
は人間の生殺與奪を刹那の瞬間に司とるとぞいふ戀の神を我樂籠中の物として、華の如き
妻とは名のみ一夜の契も許さで取残しつゝ、たゞ三年の後を約しながら萬里の波濤を一足飛

びに飛び行かむとす、そもく戀愛に餘りし無情か有情か、さすがの戀も狼狽へ、取遁さむ
とするか、無言の答案は將に志を遂げて歸朝すべき埠頭の曉にあり、その解釋説明は花下
の感深き他國の春、さては月前に腸を斷つ客窓の夕より送り來る時々の文中にあるべし、

會ては隅田川の片邊り汐入村に雨漏る軒を宿として、年が年中の空腹を抱へながら夏は終夜
の蚊に責められ冬は布子一點寒晒しの苦學難行せし男、今は大臣の令嬢を妻として一夜の
契情もなく故國の空に残しながら一躍こゝに萬金を纏うて世界の檜舞臺に躍り出でむとす、
さても將來の半生は如何なる運命を以て倉橋幸藏を迎へむとぞする、

倉橋幸藏が根岸の草庵を閉ちて一大飛躍を試みるの曉、十餘年來の骨肉に等しき上田黒田吉

浪六全集第貳編
 田の三人に残せし置き土産は、また斯三人を促して一時に一生面を開きしが如く、おのく心の向ふところに力足を踏んで馳せ出さしめぬ。

浪六全集 (第二編)終

大正三年六月十日印刷
 大正三年六月十五日發行
 大正三年六月廿二日再版

大正三年七月一日三版
 大正三年九月十日四版
 大正三年十月十五日五版

浪六全集第貳編
 定價金壹圓參拾錢



著者 村上信
 發行者 青木恒三
 發賣者 加島虎吉
 印刷者 荻原勝次郎

所刷印館文博 所刷印

發賣所
 東京市日本橋區
 本町三丁目
 東京市日本橋區
 人形町通住吉町

電話本局長 三六六番 二一六七番
 振替貯金口座 東京一七四四番
 電話浪花 一九四九番
 振替貯金口座 東京一九八四二番

至誠堂書店
 至誠堂小賣部

刷縮

浪六全集

袖珍特製天金箱入美本
第一編、第二編、第三編、第六編
定價各金壹圓卅錢
郵稅各金八錢

各編收むるところ
悉く是れ浪六先生
が傑作中の傑作に
して天下の讀書界
を風靡したるもの
を飾るべし携上の
飾るべし携上の便
は旅行に携ふべし
幾回これを讀むも
飽く事知らざる
べし内容の豊富と
價格の至廉また他
に比類なかるべし

第一編目次	當世五人男
第二編目次	上田力川上三吉
第三編目次	同後篇
第四編	屋長軒八
第五編	屋長軒八
第六編目次	鬼あざみやまと心日本武士

刷縮

浪六全集

第四編、第五編
定價各金壹圓拾錢
郵稅各金八錢
印刷鮮明携帶至便

大町桂月先生著

軍國の少年一讀意氣衝天の感あらん 少年日本人の弓矢

四六判上製全一冊
定價金六十錢
郵稅金八錢

歐洲の列強や干戈を執つて起り、我日本亦之に加はれり、而して米國之に加はらば、
やがて全世界の戦争とならむとす。日本國民の憤慨鬱鬱として掛るべきは實に今日に在
り。朝には大隈伯若返つて首相となれるあり。野には天下第一品の文豪、青年指導の泰斗、
大町桂月先生亦若返つて此著あり。至誠天地を動かす、壯烈鬼神を泣かしむ。日本男兒
の粹なる大町先生、日本人の特色を發揮して餘蘊なし。滿天下少年諸君の好讀物として、
最適絶妙の快著なり。歐洲の風雲を睥睨する豪傑兒をして血躍り、骨鳴らしめむ。

東京日日新聞記者
松内冷洋先生著

世界大戦史

菊判美本全一冊
定價金八十五錢
郵稅金八錢

戦雲世界を蔽ひ壯烈の氣紙上に躍動す
世界未曾有の歐洲大戦亂は何故に起つたか、對戰國は如何にして雌雄を決せんとする
か、其複雑な關係を、最も分り易く、最も面白く、最も通俗的に書いたのが本書であ
る、興味と理解の兩方面から、この未曾有の大戦亂を説いたもの天下たゞ本書あるの
み家庭戦争に、社交戦争に、我が國民は是非一讀せらるべし。
全世界上に雄飛せんとする我が國民は是非一讀せらるべし。
東洋の覇權を掌握し、

大正著名文庫

杉村楚人冠先生著 口繪 六大書伯 六葉

へちまのかは

四六判特製美本 紙數四百五十頁 定價金壹圓貳拾錢

本書は現文壇の重鎮楚人冠先生が廿餘年の心血を凝がれたる力作なり。先生は文才氣煥發行く處として可ならざるなく、キビキビと齒切よく、個性のよく發揮せられたるもの、天下其の比を見ず、是れ先生一代の傑作集にして近來稀有の快著

世評一斑

時事新報曰く、著者二十十年間の波瀾ある生活を叙述せしもの氏の筆や斷じて他の模倣追隨を許さざるものあり、獨得の調子と奇想天外の落想とは必ず讀者を魅し去つて已まざるべし

「兎糞録」等に對せしむべし。日本曰く、著者生來の機智と英文脈より來るユーモアとは遺憾なく窺ふを得べく、何れも棄て難き小品計りである。好評續出

大日本著漢會より本書を普通教育振興の爲め大正三年五月全國各學生及青年の讀物として現代斬新文學の模範として審査選定せらる

大正著名文庫

村上浪六先生著

口繪及裝幀

著者自畫自書

罵倒録

第四編

四六判特製美本 紙數四百頁 定價金壹圓貳拾錢

世評一斑

●實業之世界曰く、本書は大正名著文庫の第四編であつて、其先出姉妹篇として既に和田垣博士の兎糞録、大町桂月氏の人の運、杉村楚人冠氏の「へちまのかは」等を出して居る……

罵倒する雄蝶雌蝶が人間の戀は偽りである、罵倒する氣障なハイカラに糞をひり掛けたら、罵倒する江戶の子と上方の解、罵倒する奇警な文學四方八項の多きに達して居る……

浪六先生曰く、あまり大膽なる露骨なる無遠慮に過ぎたれど實際是れが我輩近來に於ける快文字なりと！

大正著名文庫

第五編

法學博士 和田垣謙三先生著

川村清雄畫伯 齋藤松洲畫伯

插畫數葉

吐雲錄

四六判特製美裝全
紙數四百三十頁
定價金壹圓貳拾錢
郵稅內地金八錢
支那朝鮮各二十錢

世評一斑

●東京朝日曰く 著者前に兎糞録を出して其滑稽突梯に人の腹を解かしめしが本書は之が姉妹篇とも見做すべきもの就中英語の洒落に至りては眞に著者の獨得と云ふべし
●時事新報曰く 機智諧謔は其人の天才にして作らんとして作り得ず吐かんとして吐き得ず隨時隨所に發現する者博士の滑稽に突梯を以て江湖の第一人たるは已に世評あり況や學識の豊富多方面を加ふるに於て眞に鬼に金棒の觀あり本書は兎糞録以後の藪を集めたる者諷刺警語例によつて秋霜よりも鋭く氣焔の五彩滿紙に

大正著名文庫

浪六先生著

元祿四十七士

▲上篇 下篇 全二冊

四六判特製美本
紙數各四百頁
定價金壹圓貳錢
郵稅金八錢

●東京朝日曰く 浪六氏は年來熱心なる義士崇拝家なるが其才筆を揮つて考證に流れず小説に墮せざる眞の義士傳を平易に叙述せるもの本書にふりたるは浪六氏の男性的筆致は最も義人の面目を露きるに足るなり蓋し彼等の行為は精神にて見ても白きるに著者の雄筆を以て記述はなりこの義士傳を行動かすに著者の雄筆を以て記述はなりこの義士傳をまき入るに著者の雄筆を以て記述はなりこの義士傳を引締つた文字に大阪を放つた色合が見えらるるに著者の雄筆を以て記述はなりこの義士傳を緊張したる文字に大阪を放つた色合が見えらるるに著者の雄筆を以て記述はなりこの義士傳を

●時事新報曰く 未だ本書の如く義士の面目を描し得たるは無し讀み行く間に骨鳴り血躍るを覺ゆ武士道の精華を後代に傳ふるは本書か

大正著名文庫

第八編

文學博士 幸田露伴先生著

▲裝幀 川村清雄畫伯

洗心錄

四六判特製美裝全
紙數四百廿八頁
定價金壹圓廿錢
郵稅內地八錢
支那朝鮮各二十錢

世評一斑

◎

東京朝日曰く、露伴趣味を發揮せる隨筆的短編凡そ六十種を輯む風物に關する者修養に縁ある者史上の人物を評するもの消息を語る者文を談ずるもの悉く別天地の俗腸を洗ふ清涼劑「洗心錄」の名得たりと謂ふべし
●國民新聞曰く、幽遠なる哲理に入るありれば又日常茶飯事に亘りて説を行ふあり典雅清楚の文章誦すべし
●時事新報曰く、評論あり史傳あり感想あり小品あり適く所として佳ならざるなきは露伴氏の才識也短勁の文幽玄の想兩相喚發して讀過薰風自ら生ずるは露伴

氏の風懷也日月浮生の外乾坤大醉の間は悠々自適して飄々たる白雲の如きものは露伴氏の趣味なり即ち説く所宏遠にして高俗の趣味油然として心下に湧起する味清高の趣味油然として心下に湧起するを覺ゆ
●東京朝日曰く、近時出版界稀有の名著として吾人は本書を一般讀書家に推薦す
●學生曰く、樂地、苦境、以下五十七篇の小品に加ふるに附録三篇ある、露伴一流の氣の利いた洗練せられた、實のある、青年諸君の讀物として最も好適してゐる

◎萬朝報曰く、深玄幽妙なる人格の響を有する其想、字鍊句烹無縫の天衣を思はしむる其文、隨筆家として眞に著者は當代に傑出す

大正著名文庫

第九編

竹越三又先生著

▲裝幀 川村清雄畫伯

三又文存

四六判特製美裝全
紙數四百三十一頁
定價金壹圓廿錢
郵稅金八錢
支那朝鮮各十二錢

華麗の文莊重の辭高邁の見警拔の識、常に俗界に先んじて進み社會萬般の方面に木鐸となる者、今の世何人も竹越三又先生を推すべし。この編先生の文粹を拔けり教訓あり批評あり、譬喩あり
膠州灣占領論あり新戰國策あり軍國の宰相大隈伯を評し新宦官を論ず篇々皆得易からざるの大文字なり軍國の志士必ず一讀せざるべからず平和を愛する者も亦之を繙かざるべけんや

大正著名文庫

第十編 文學博士 前田慧雲先生著

活修養

▲裝幀 川村清雄畫伯

我國民性と佛教との契合は千有餘の星霜を閲し來つて深く且つ牢し我國國民性を高次にし深
刻にし充實せしむるには佛教を閉却すべけんや前田博士は佛敎界の權威なり今其博大的學
深淵の識を傾けて本書成る佛陀救世の慈悲泰西格物の學理とは博士の崇高なる人格を通じ
て完全に渾融せられ直ちに日本國民胸奥の琴線に觸る眞に現代の頹蕩を救ひ廿世紀文明に
適應すべき眞正の修養書として靈彩を放てり佛敎信徒は言ふも更なり國民一般の座右に一
本を備へて稀世の福音に接せざるべけんや

内容目次一斑

- 短氣の治療 ●我が好む處 ●境界の異 ●經驗の力 ●紫柏訓話 ●胸底の聲 ●羞恥の
- 念 ●青年と立志 ●苦勞の實驗 ●進歩 ●獨力 ●氣概節操 ●學問の本尊 ●羞恥の
- 權威 ●修養と娛樂 ●犬の教訓 ●精神の油斷 ●敵 ●修養と讀物 ●外物の変成 ●女子堅固の
- 観念 ●喜時と怒時 ●知られたる名聲 ●眞と實 ●超然たる ●永遠の ●廣告 ●不請の
- 精神の鏡 ●實業の思想 ●死後の要する ●夜航詩 ●信 ●勤 ●活 ●力 ●救 ●濟 ●年 ●頭
- 誠 ●忠 ●偉 ●人 ●の ●修 ●養 ●宗 ●教 ●と ●人 ●物 ●造 ●化 ●的 ●文 ●明 ●報 ●恩 ●の ●生 ●活 ●綠 ●蔭 ●清 ●話
- の ●所 ●感 ●人 ●の ●修 ●養 ●宗 ●教 ●と ●人 ●物 ●造 ●化 ●的 ●文 ●明 ●報 ●恩 ●の ●生 ●活 ●綠 ●蔭 ●清 ●話

四六版特製美本
紙數四百頁全
定價金壹圓貳拾錢
支那、朝鮮、武拾錢

大正著名文庫

加藤咄堂先生著

(近刊)

人の心

怪しきは人の心、解し難きは人情の機微、面に笑うて心に泣き、眼に怒りて腹に喜ぶ、理
に服して情に背き、愛の爲めには身をも抛ち、慾に迷うては義を顧みず、名に走りては私
をも棄つ。畢竟これ何物ぞ。此の怪しきものを捉へ來りて縦横に解剖し此の解し難きもの
を取つて自在に描寫す。人情看破の秘機、人心收攬の術策、或は之を史上の事實に徴し、
或は之を市井の傳説に採り、心靈の怪、靈魂の謎、之を高遠の學理に照し之を卑近の俚語
に推し、奇談は珍説と相繼ぎ、趣味は研究に伴ひ、自ら知り他を知る人心の秘奥、一卷の
本書説いて悉くさざるなし實にこれ著者最も得意の作。

四六判特製美裝
紙數四六頁全
定價金壹圓貳拾錢
支那、朝鮮各二十錢

第十編 文學博士 前田慧雲先生著

杖の跡

近刊

怪しきは人の心、解し難きは人情の機微、面に笑うて心に泣き、眼に怒りて腹に喜ぶ、理
に服して情に背き、愛の爲めには身をも抛ち、慾に迷うては義を顧みず、名に走りては私
をも棄つ。畢竟これ何物ぞ。此の怪しきものを捉へ來りて縦横に解剖し此の解し難きもの
を取つて自在に描寫す。人情看破の秘機、人心收攬の術策、或は之を史上の事實に徴し、
或は之を市井の傳説に採り、心靈の怪、靈魂の謎、之を高遠の學理に照し之を卑近の俚語
に推し、奇談は珍説と相繼ぎ、趣味は研究に伴ひ、自ら知り他を知る人心の秘奥、一卷の
本書説いて悉くさざるなし實にこれ著者最も得意の作。

編一第書叢文漢譯新

新譯 日本外史

大町桂月先生譯評 全貳拾貳卷縮刷全壹册 紙數壹千貳百頁 袖珍特製美本 特價金壹圓貳拾錢 定價金壹圓五十錢 小包料金八錢

編二第書叢文漢譯新

友田宜剛先生評 新譯 文章軌範

全七卷縮刷全壹册 紙數壹千壹百頁 袖珍總クローズ 正價金壹圓拾錢 小包料金八錢

編三第書叢文漢譯新

濱野三郎先生註解

新譯 孟子附索引

全四十卷縮刷全壹册 紙數八百頁 袖珍特製美本 正價金九拾錢 郵稅八錢

文章は奔放自由を極め英氣の潑瀾たる比喩の巧に豊富に實に不朽の天品世界の大文學書内容亦實

編四第書叢文漢譯新

山陽獨得の歴史詩尊の愛國の精神を活躍す!

新譯 日本樂府

大町桂月先生譯評 袖珍縮刷 全壹册 紙數三百五十頁 袖珍總クローズ 正價金五拾錢 天金箱入特製 郵稅金六錢

大町桂月先生校訂解題 (學生文庫の内) 史傳・修養・教訓・文藝・隨筆の古典名著
袖珍特製類美本 各冊金拾錢 郵稅各金四錢 五冊以上割引 郵稅不用

訂新 南朝史傳 全壹冊
神皇正統記吉野拾遺櫻雲記を收む皇統の由り
に來る處を論じ國家の治亂興亡を説き南朝の
正統を明かにす筆致筆々として正大也

訂新 源平盛衰記 全五冊
文章雄健にして而も事實の精細を極め源平二
氏が成敗の跡歴然として眼前に見るが如く興
味亦了津々たり

訂新 太平記 全四冊
楠公誠忠の輝ける歴史は國史中の一異彩也當
時の事蹟を總括せるは本書の外に求む可らず

訂新 曾我物語 全壹冊
其の文章の流麗なる其描寫の委曲を盡せる實
に七百年前に於ける富士山麓の復讐を目前に
勢驚せしむ

訂新 常山紀談 全壹冊
名將勇士の逸話逸事を蒐録し戰國時代の武士
が互に節を慎しみ義を守りし武士道の典型を
示せし常山慨世の名著也

訂新 先哲叢談 全壹冊
江戸時代前半の學者七十二人の人物性行を記
せし漢文を平易に假名交りに譯せるもの興味
津々として盡きず

訂新 心學道話 全壹冊
平易にしてまかも心理に透徹し英言戯語の中
に無上の教訓を含む修身齊家精神修養の良書

訂新 益軒十訓 全參冊
人倫五常の大意を説き父母を養ふに其の志と
體との二あるを示し義理と利養との輕重を調
し堪忍制欲の要動慎儉の徳を述ぶ

訂新 日本外史 全參冊
原文の妙味を知らんとする者は本書を讀み漢
文に句讀點送り假名を附して初學者に讀み
易からしむ校訂の嚴密なる印刷の精麗なる實
に本書の誇とする所なり

訂新 義經記 全壹冊
悲壯又慘憺英雄の末路人をして卒讀に堪へざ
らしむ吉野山の雪中の條の如きは世界有
数の快文字にして史跡の壯觀なり安宅の關の
條殊に慘憺を極む

訂新 論曲全集 全參冊
創作時代の論曲を基礎とし之に各流論方の相
違せるものは一々脚註し文章通じ難き者は細
かに其出典を究めて考證解説せり論曲文學を
味はんと欲する者は非本書に依らざる可らず

訂新 狂言記 全壹冊
狂言中の傑作八十番を選ぶ日本國民は快活也
無邪氣也天真爛漫也故に能く笑ふ狂言記は其
子の笑の發揮せられたる一文藝也一藝術也快男

訂新 一休諸國物語 全壹冊
機智滑稽の裡に萬斛の涙を含む所之一休の
面得の神秘也本書は彼が諸國雲遊物語の粹を
集めたるものにして内容の豊富なる從來其例
を見ざる所なり

訂新 太閤記 全五冊
大師は弘法の専有となり大開は秀吉の専有と
なる秀吉は實に我國史上に一頭地を拔きたる
大陸的英雄也競争激烈なる現代に活躍する者
は戰國時代の優勝者に學ぶ所あるべし

訂新 百人一首一夕話 全壹冊
かるたは日本特有の國民的遊戯也敏捷勇敢な
る國民性を發揮す百人一首の註解書は多けれ
ど能く戲を解き茶ねて作者に關する面白き材
料を集めたるは本書の右に出づる者なし附註
として「歌」たるた必勝法を添へたり新年の閑
日月に國民一般必讀の良書也

訂新 西遊記 全貳冊
想像の奇著遊の極寶に天外より來る名一體壯
麗快活を繪く能はざるしむ